# 博士論文

植物のエリシター応答発光の発見とプライミング検出技術への 応用に関する研究

# 伊代住浩幸

# 目 次

略語説り	] ·	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	١	vii
緒論・・	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	-	•	•	•		-					1

# 

- 第2節 各種植物からの病害抵抗反応に伴う極微弱発光の検出
- 材料及び方法

1	)	極微弱発光測定装置 •	•	•	•	•	•	•	•	•	·	•	·	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	13
2	2)	供試植物及び病原体	•	•	•		•	•	•		•			•	•	•	•	•	•			•	•		13

3)病原体の接種と極微弱発光測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

### 2. 結果

1	)	病原体	(野火病菌・	立枯病菌)	を接種	重したク	タバコ	葉の発	光・	••	•••	17
2	)	病原体	(いもち病菌	・白葉枯病	病菌)を	を接種し	したイン	ネ葉の	発光			19
3	)	病原体	(つる割病菌	)を接種し	_たメ1	ロン幼材	植物の	発光·		••	•••	21
4	)	病原体	(青枯病菌・	萎凋病菌)	を接種	重した丨	トマトラ	芽生え	の発	光・	•••	23
5	)	病原体	(炭疽病菌)	を接種した	モイチ	ゴ葉の	発光·		• •		•••	25
6	)	病原体	(つる割病菌	)を接種し	たサン	ソマイニ	モ貯蔵	退切片	の発	光・	•••	27
3.		考察・・							••	• •	•••	27
第3首	笷	病害抵	抗性に関連	する極微弱	発光の	特性解	矿					
1.	木	才料及び	方法									

1	)	供評	式植	物	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	29
2	)	供評	式菌	朱	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	30
3	)	病厚	ういしょう うちょう うちょう うちょう うちょう うちょう うちょう うちょう う	の持	妾利	重	と	極	微	弱	爭発	光	<u>-</u> 0	)浿	〕定	<u> </u>	•			•		•		•	•	•	•	-	•	•	•	30

4 ) サツマイモ貯蔵根切片上における非病原性フザリウム菌の発芽・・・	31
5 )発光の二次元イメージング・・・・・・・・・・・・・・・・・・	31
6 )イポメアマロンの検出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	31
7 ) サツマイモで観察される極微弱発光の分光測定・・・・・・・・・	32
① 極微弱発光の分光測定方法・・・・・・・・・・・・・・・・・	32
② 非病原性フザリウム菌の接種・・・・・・・・・・・・・・	34
③ 2, 4-D処理····································	34
<ol> <li>         ④ 変温処理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・</li></ol>	34
⑤ 分光データの解析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	35
2. 結果	
1) フザリウム菌接種条件の違いによるサツマイモの極微弱発光の変動	35
2)サツマイモ貯蔵根切片上におけるフザリウム菌の発芽・・・・・・	36
3) 極微弱発光の二次元イメージング・・・・・・・・・・・・・・・・	37
4 ) 非病原性フザリウム菌の接種によるイポメアマロン蓄積の検出・・	38
5) フザリウム菌との相互作用に伴う発光の波長組成変化・・・・・	38
6)比較解析①:2,4-D処理により誘導される発光の波長組成変化・	40
7)比較解析②:変温処理により誘導される発光の波長組成変化・・・・	40
3. 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	42
第4節 エリシターで処理した植物の極微弱発光	
1. 材料及び方法	
1)極微弱発光測定装置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	44
2)供試植物試料の栽培・培養条件・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	44
3 ) 供試エリシター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	45
4) エリシター応答発光の測定	
①サツマイモ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	46

	1	タノ	ベコ	• •	•••	•	•••	•	•	• •	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	46
	2	イオ	< •	•••			• •	•	•		•	•	-	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	46
5	)	エリ	シタ	一万	古答	発升	台の	分	光	解材	ŕ•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	47
2.	糸	吉果																										
1	)	サツ	マイ	モ貝	宁蔵	根の	)エ	IJ	シ	ター	- 応	、答	発	光	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	47
2	)	タバ	コ葉	切片	†の	エリ	リシ	タ	)	応答	\$ 発	光	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	48
3	)	イネ	葉切	片の	リエ	リシ	/タ	_	応	答発	≜光	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	49
4	)	イネ	培養	細別	包の	エリ	リシ	タ	-)	応答	\$ 発	光	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	52
3.		考察・	• •	• •				•			•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		•	•	•	•	53

# 第Ⅱ章 エリシター応答発光の増強に基づいたプライミング検出システム

# の開発

- 第1節 緒言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
- 第2節 病害抵抗性誘導物質の前処理で増強されるイネのエリシター応答発光

の特性解析

# 1. 材料及び方法

1)	供試植物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	60
2)	供試エリシター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	61
3)	病害抵抗性誘導物質・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	61
4)	病害抵抗性誘導物質で前処理したイネのエリシター応答発光の測定	
1	葉切片・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	61
2	懸濁培養細胞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	62
5)	エリシター応答発光の分光解析・・・・・・・・・・・・・・・・・	63
6)	エリシター応答発光とPR遺伝子発現の比較解析・・・・・・・・	63

2.	結	果
4.	- TH	~

1)イネ葉切片におけるエリシター応答発光の増強・・・・・・・・	65
2)イネ懸濁培養細胞におけるエリシター応答発光の増強・・・・・・	68
3)増強されたエリシター応答発光の波長組成・・・・・・・・・・・	69
4)PR遺伝子発現に対する各種病害抵抗性誘導物質の前処理の効果・・	70
5 ) エリシター添加後の増加分から求めた PR 遺伝子発現とエリシター	
応答発光の増強程度の比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	72
3. 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	74
第3節 各種植物培養細胞における病害抵抗性誘導物質によるプライミング	
活性のエリシター応答発光を指標とした検出	
1. 材料及び方法	
1)エリシター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	77
2)供試培養細胞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	77
3)病害抵抗性誘導物質・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	80
<ol> <li>4 ) 極微弱発光測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・</li></ol>	81
5 )病害抵抗性誘導物質のプライミング効果によるエリシター応答発光	と
R O S 生成 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	81
6 )各種抵抗性誘導物質のプライミング効果によるエリシター応答発光	
の増強解析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	83
2. 結果	
1 )病害抵抗性誘導物質のプライミング効果によるエリシター応答発光	
とROS生成・PR遺伝子発現の増強解析・・・・・・・・・・・	83
2 )各種抵抗性誘導物質のプライミング効果によるエリシター応答発光	
の増強解析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	86
3. 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	89

第4節 イネ培養細胞のエリシター応答発光の増強を指標とする病害抵抗性	
誘導物質の探索	
1. 材料及び方法	
<ol> <li>1)供試化合物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・</li></ol>	91
2)イネ培養細胞のエリシター応答発光の増強を指標とした選抜・・・・	91
3 )イネを用いた植物検定(Aグループ)・・・・・・・・・・・・	92
4)キュウリを用いた植物検定(Bグループ)・・・・・・・・・・・	92
2. 結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	94
3. 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	96
第5節 イネ培養細胞のキチンエリシター応答発光の増強におけるサリチル酸	1 -
経路の役割	
1. 材料及び方法	
1) 懸濁培養細胞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	99
2) RNAiによる O s WRKY45遺伝子の特異的発現抑制	
<ol> <li>RNAiコンストラクトの作成・・・・・・・・・・・・・・・・・</li> </ol>	99
② 形質転換イネ培養細胞の作出・・・・・・・・・・・・・・・・ 1	01
3)病害抵抗性誘導物質および異性体・・・・・・・・・・・・・・・・ 1	.03
4 ) エリシター処理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1	.03
5 ) 極微弱発光測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1	.03
6)定量的RT-PCRによるOsWRKY45遺伝子の発現量解析・1	.04
2. 結果	
<ol> <li>O s WR K Y 4 5 遺伝子発現を抑制したイネ培養細胞における</li> </ol>	
エリシター応答発光の増強・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1	.04
2 ) サリチル酸経路によるエリシター応答発光の増強に関する解析・・ 1	.08
3. 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1	11

#### v

第□	「章	総	合	考	察	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	-	• •	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	113
摘要	<b>.</b> .	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	-		• •	• •	•		•	•	•				•	•	•	•	•	•	119
Sι	ımn	۱a	r	У	•	•		•					•			•	•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	124
謝刮	¥••	•			•		•	•	•	•	•	•		•	•		•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	129
引月	] 文南	t -	•				•	•	•	•	•						•			•		•		•	•		•	•		•			130

# 略語説明

ABA	Abscisic acid
ASM	Acibenzolar-S-methyl
BABA	β-aminobutyric acid
BDR	Brassinosteroid-mediated disease resistance
BL	Brassinolide
BR	Brassinosteroid
CEBiP	Chitin oligosaccharide elicitor-binding protein
CERK1	Chitin elicitor receptor kinase 1
СР	Cerato-platanin
CRP	Carpropamid
DMF	N'N'-dimethylformamide
DNA	Deoxyribonucleic acid
ERPE	Elicitor-responsive photon emission
ET	Ethylene
ETI	Effector-triggered immunity
GA3	Gibberellin A3
HBA	Hydroxybenzoic acid
ISR	Induced systemic resistance
JA	Jasmonic acid
MAMPs	Microbe associated molecular patterns
NPR1	Non-expressor of PR-1
РА	Phosphatidic acid
PAL	Phenylalanine ammonia lyase

PAMPs	Pathogen associated molecular patterns		
PBZ	Probenazole		
PCR	Polymerase chain reaction		
PDB	Potato dextrose broth		
PGPF	Plant growth promoting fungi		
PLD	Phospholipase D		
PR protein	Pathogenesis related protein		
PRR	Pattern recognition receptor		
PTI	Pattern triggered immunity		
R-gene/protein	Resistant gene/protein		
RNA	Ribonucleic acid		
RNAi	RNA interference		
RNS	Reactive nitrogen species		
ROIs	Reactive oxygen intermediates		
ROS	Reactive oxygen species		
RT-PCR	Reverse transcription polymerase chain reaction		
SA	Salicylic acid		
SAR	Systemic acquired resistance		
TDL	Tiadinil		
TLC	Thin layer chromatography		
UPE	Ultraweak photon emission		
WSR	Wound-induced systemic resistance		

緒論

特殊な発光器官を持たない生物も、極微弱な光を放射している(Slavinski, 1988; 渡辺・稲場, 1991a, b)。この発光現象は、極微弱発光(Ultraweak photon emission: UPE), 自家化学発光 (Spontaneous chemiluminescence) あるいは、バイオフォトン (biophoton)などと呼ばれている(Abels, 1986; Popp, 1988; Cifra and Pospíšil, 2014)。 生体から放射される極微弱光に関する報告は、1920年代にA.G. Gurwitch が報告し た、タマネギの根端細胞の Mitogenetic Radiation (近接させたタマネギ鱗片細胞の有 糸分裂を促進する紫外域の電磁波と推定)にまで遡る(Abeles, 1986)。 残念ながら 現在まで Mitogenetic Radiation の機器による検出は成功していないが、生体から放 射される極微弱光の存在に関する研究は、その後も続けられた。しかし、10<sup>0</sup>~10<sup>4</sup>光 子数/秒/cm<sup>2</sup>と発光強度が弱いため(図1)、機器による測定は、単一光子計数が可 能な高感度光センサーが登場するまで待たなければならなかった。



#### 図1 生体極微弱発光と生物発光の比較

\*光のパワー:P= hc/λ ≒ 2×10<sup>-16</sup> /λW h:プランク定数(6.626×10<sup>-34</sup> J・s), c:真空中の光の速度(2.998×10<sup>8</sup> m/s) λ:光の波長(nm) 1950 年代になってようやく、Colli らが光電子増倍管を用いてコムギ、レンズマ メなど植物の黄化幼苗における可視光域の発光を初めて検出し(Colli and Facchini、 1954; Colli et al., 1955),それ以降、多くの研究者により、細菌から植物、哺乳類に いたる様々な生物種の個体・組織・細胞などで極微弱な発光現象が報告されるよう になった(Popp, 1988; Beloussov et al., 2000)。

生体の極微弱発光は自家発光(spontaneous photon emission)と光誘導(遅延)発 光 (photo-induced / delayed luminescence) に分類され,それぞれ,生化学反応あるい は光励起反応により生体内に生じる、電子的に励起された物質の基底状態への緩和 に伴い発光すると考えられている(Popp et al., 1992)。特に自家発光は、恒常的に幅 広い波長域(紫外域~近赤外域)で観察され、生体の活動レベルの変化や外部から の刺激によって発光強度が変化する。発光のメカニズムとしては, in vitro 実験の結 果などから,励起種としてフリーラジカルや活性酸素種(Reactive oxygen species: ROS)が生成し、周囲の蛍光性物質(不飽和脂肪酸,核酸,アミノ酸,ポリフェノ ール他)が過酸化を受けて励起・発光する場合や、励起カルボニルから蛍光性物質 へのエネルギー移行による発光(渡辺・稲場, 1991a)のほか,活性酸素の一種であ る一重項酸素そのものの発光 (Abels, 1986), DNA 分子の巻き戻しに由来する発光 なども推定されている(Slavinski, 1988)。つまり, 生物発光におけるルシフェリン -ルシフェラーゼ反応のような,発光に特化したシステムではなく,生体内で別の 働きを持つ物質・酵素などが発光に関与すると考えられている。例えば、蛍光性物 質がペルオキシダーゼやオキシゲナーゼによって酸(素)化されて発光すると推測 されるケースは、生物発光の始原的な姿だと考えられている(渡辺・稲葉,1991a)。

生体が放射する極微弱光の測定は、植物の芽生えで最初に成功したが、その後の 高感度フォトンカウンティングカメラを用いたダイズ芽生えの測定において、根端 や胚軸など、細胞分裂が活発な部位が強く発光することが示唆されている(Ichimura *et al.*, 1989)。植物の生育を調節するホルモン物質を与えた場合の発光の測定結果は

 $\mathbf{2}$ 

これを支持しており、アズキの芽生えに根の成育を促進する濃度(10µM)のジベレ リン(Gibberelin A<sub>3</sub>: GA<sub>3</sub>)を与えると、わずかではあるが無処理に比べて発光が増 加する。この発光は根冠部分で特に強く、成育の促進と関連すると推測されており、 同濃度において根の成育を抑制するアブシジン酸を与えた場合には、発光は強く抑 制されている(Kai *et al.*, 1995)。こうした、植物の生長との関連が認められる発光 の有力な原因としては、細胞分裂時の物質代謝における各種酸(素)化酵素の働き や、呼吸増加に伴う活性酸素生成の増加などが推定されている。実際に、ホウレン ソウ細胞から分離したミトコンドリアにおいて、呼吸鎖の駆動に伴う発光が報告さ れており、呼吸量など細胞の活動レベルを反映することが示唆されている(Hideg *et al.*, 1991)。

自家発光測定は酸化的ストレス状態のモニタリング(稲場, 1983; Khabiri *et al.*, 2014)のほか, 腫瘍細胞の判別(Musumeci *et al.*, 1992), 脳活動のモニタリング(Kobayashi *et al.*, 1999), 腎不全の判別(Agatsuma *et al.*, 1992)など, 生理変化の指標としての応用が試みられている。

一方,各種のストレスを負荷された植物においても発光の増加が観察されている。 植物を傷つけると,付傷部位から周囲よりも強い極微弱発光が一時的に観察される (Suzuki et al., 1991)。付傷に伴う活性酸素種の生成とそれによる膜脂質の過酸化は, 発光に強く関わると考えられており,一重項酸素(<sup>1</sup>O<sub>2</sub>)の関与が示唆されている (Saline and Bridges, 1981; Chen et al., 2003)。植物にとって致死的な高温では,劇的 な発光の増加が認められる(Havaux, 2003; Havaux et al., 2006)。また,急激な温度 低下によっても一時的な発光の増加が認められ,凍霜害に対する耐性検定への応用 も試みられている(Agaverdiyev et al., 1965)。温度変化は、呼吸の増減とともに酸素 と脂質の反応速度に影響し,発光を増減させると考えられており、付傷部位におけ る発光も十分な温度がないと認められない(Flor-Henry et al., 2004)。

極微弱発光の性質を理解するために、発光強度の経時変化の解析と並んで、分光

解析も研究の当初から行われていた(Colli et al., 1955; Slawinski et al., 1981)。光の 波長は、励起種の種類やその生成部位に依存するため、波長を調べて極微弱発光の 発光源を同定することが目的とされた。従来の分光測定装置では感度が足りないた め,1970年代には日本で光電子増倍管とフィルター分光を組み合わせた高感度な自 動分光測定装置が開発された(Inaba et al., 1979)。1990年代初めには,回折格子に よる分光と二次元測定用の光電子増倍管を組み合わせた、多波長同時分光測定装置 も開発され(Nagoshi et al., 1992),発光源の特定が精力的に試みられた(渡辺・稲 場,1991a,b)。しかしながら,極めて弱い発光強度と発光波長の幅広さが,生体中の 発光源の特定を困難にしている。報告されている唯一の成功例として,腎不全症患 者の血漿で検出される 430 nm にピークを持つ発光において,発光前駆物質として Indoxyl-β-glucronide が特定されているに過ぎない (Agatsuma *et al.*, 1994)。一方では, 発光分子種を特定せずとも極微弱光を連続的に測定し、生理変化の動的な指標とし て捉える試みは、極微弱光研究の中での一つの研究分野である。特に自家発光の測 定では、発光・蛍光プローブ等も使わないため、測定行為が生理反応に与える影響 が極めて小さい。また、測定システムが非常にシンプルであることも利点に挙げら れる。そのため、植物においても、生理変化を伴う各種のストレス、例えば、付傷 (Salin et al., 1981; Chen et al., 2003), 嫌気的処理 (Roschger et al., 1992), ホルモン 処理(Kai et al., 1995), 塩処理(大矢ら, 1998), 乾燥ストレス(大矢ら, 2000), 低 温処理(Agaverdiyev et al., 1965),高温処理(Havaux, 2003; Havaux et al., 2006),除 草剤処理(Hideg and Inaba, 1991; Inagaki et al., 2007, 2008, 2009)などのストレスの 負荷後に自家発光の増加が観察されている。そして、上記のような非生物的なスト レスだけでなく,昆虫の食害(川畑ら,2004;Yoshinaga et al., 2006),センチュウの 接種(袴田ら, 2004),そして病害(江原, 1994; Bennett et al., 2005; Kobayashi et al., 2007)といった生物的ストレスに応答した発光について近年報告されるようになっ てきた。

植物が持つユニークなストレス応答として,全身獲得抵抗性 (Systemic acquired resistance: SAR) がある。元々は,壊死病斑を生じさせる病原体に感染すると,それ以降,同じ病原体のみならず,他の病原体に対しても抵抗性を発揮する現象から発見された (Ryals *et al.*, 1994)。SAR研究が始まる前の 1980 年に日本では SAR 誘導活性を有する物質であるプロベナゾール (Probenazole: PBZ) が偶然発見されている (Sekizawa *et al.*, 1980)。SAR についての研究が進み,本作用におけるサリチル酸 (Salicylic acid: SA)の重要性が明らかになると (Ryals *et al.*, 1994), それをもとに,より強力かつ安定的に抵抗性を誘導する物質として,アシベンゾラル Sメチル (Acibenzolar-S-methyl: ASM),チアジニル (Tiadinil: TDL),イソチアニル (Isotianil) などが開発・商品化されている。これらを称して,病害抵抗性誘導剤 (プラントアクティベーター)と呼ぶ (有江・仲下, 2007)。

植物病害への対策には、動物病になぞらえ、罹病した植物個体を治癒あるいは延 命させるための処置である「治療」、植物病害の蔓延を防止するための処置である 「防除」、そして、作付け前から様々な方法で病害発生リスクを低減させ、経済的 な被害が発生しないようにする「予防」がある(難波、2008)。治療、防除、予防 それぞれにおいて、耕種的、物理的、生物的、化学的な手段が存在し、コスト及び 労力・効果・持続性(薬剤耐性の回避、環境負荷の低減)のバランスを考慮した総 合的病害虫・雑草管理(Integrated Pest Management)が行われるが(難波、2008)、 病害抵抗性誘導剤は、化学的な予防技術と言えるものであり、病害抵抗性品種の導 入と並び、植物病害対策の基幹技術に成り得るものである。現在では SA を介する経 路(SAR)以外にも、ジャスモン酸(Jasmonic acid: JA)やエチレン(Ethylene: ET)を介する経路(Induced systemic resistance: ISR、Wound-induced systemic resistance: WSR)、ブラシノステロイド(Brassinosteroid: BR)を介する経路 (Brassinosteroid-induced disease resistance: BDR)なども明らかになってきて いる(仲下・安田、2004)。しかしながら、これまでに商品化されているのは病害抵

 $\mathbf{5}$ 

抗性誘導剤としてのみ登録された,わずか4剤で,しかも全て SA 類似の物質である (有江・仲下,2007)。SAR の研究が最も進んでいることも理由にあるが,より根本 的な問題として,旧来の接種検定法に代わりうる選抜方法が未だ存在しないことが あげられる。一般殺菌剤で一次スクリーニングに利用されているような,ハイスル ープットスクリーニングが病害抵抗性誘導剤に適用できていないため,開発のボト ルネックになっている。

この課題に取り組むため,著者は各種の病害抵抗性誘導で共通する,特徴的な現 象に注目した。すなわち,病害抵抗性を誘導された植物では,それが誘導されてい ない場合に比べて,病原体の攻撃に対する抵抗反応が加速,増強されるもので,こ の現象を引き起こす作用はプライミング (Priming/Dfense priming) と呼ばれてい る (Conrath *et al.*, 2015)。従来プライミングの指標とされている抗菌物質生産 や関連する遺伝子発現では,サンプルの破壊やマーカーの検出操作が処理速度や簡 便性を制限している。プライミングによる加速・増強を非破壊で迅速に捉えるのに 向いた病害抵抗反応の発見は,病害抵抗性誘導剤のハイスループットスクリーニン グを実現する上で重要なブレイクスルーになると考えられた。

静岡県農林技術研究所(2007年に農業試験場から改称)では,1980年代から非病 原性糸状菌による病害抵抗性誘導を利用した病害防除法の確立に取り組んできた。 一方で,1990年代初めから農業分野における極微弱光測定技術利用の可能性を模索 しており,病害抵抗反応の簡易検出への応用として両者が結びついた。

本研究は1996年から2010年まで静岡県農林技術研究所において行ったものであり、本論文はその研究成果を取りまとめたものである。

# 第 I 章 病害抵抗反応に伴う極微弱発光の検出に適した植物試 料と病害抵抗反応誘導因子の組み合わせ

### 第1節 緒言

植物の表層のワックス成分や細胞壁,精油のもとになるような,細胞内に蓄えた 抗菌物質などは,常在して自然界の環境ストレスや無数の微生物による攻撃をかわ す障壁となることから,Constitutive defense(静的抵抗性)と呼ばれる。その静的抵 抗性を打破して侵害する能力,つまり病原性を有するものの侵入を感知し,阻止し ようと,新たに発動させる防衛機構はInducible defense(動的抵抗性)と呼ばれる (Freeman and Beattie, 2008)。

病原体の多くは、植物の検知をかいくぐり、動的抵抗性を発揮させずに、植物細胞から養分を引き出す。植物細胞を生かしたまま養分を摂取するものを活物寄生 (biotroph)という。各種植物のうどんこ病菌、さび病菌などの病原糸状菌や、ファ イトプラズマ、植物ウイルス、ウイロイドなどが含まれる。一方、植物の動的抵抗 性を逆手に取って、細胞死を誘導し、養分を摂取するものを死物寄生 (necrotroph) と呼ぶ。灰色かび病菌,各種 Rhizoctonia 属菌、サツマイモ黒腐病菌を含む Ceratocystis 属菌, Alternaria 属菌などの病原糸状菌の他、軟腐病を起こす Pectobacterium 属細菌 などが含まれる。また、宿主細胞への侵入時には biotroph として植物の検知をかい くぐり、侵入後に necrotroph として細胞死を誘導する病原体は半活物寄生 (hemibiotroph)とされ、イネいもち病菌を含む Pyricularia 属菌、ウリ類つる割病菌 やトマト萎凋病菌を含む Fusarium 属菌、各種炭疽病菌を含む Colletotrichum 属菌な ど、多数の病原糸状菌のほか、イネ白葉枯病菌を含む Xanthomonas 属細菌、タバコ 野火病菌を含む Pseudomonas 属菌などの病原細菌も半活物寄生とされる(Glazebrook, 2005; Vleeshouwers, 2014)。

多くの biotroph もしくは hemibiotroph, さらに一部の necrotroph は, 感染に必要

な植物との相互作用メカニズムの制約から,その宿主範囲は比較的狭い(Freeman and Beattie, 2008)。ある病原体に対して、同一種内の全ての植物個体が抵抗性を示 す場合は,非宿主抵抗性 (non-host resistance) と呼ばれる (Gill et al., 2015)。これ に対して,同一種内で病原体に対する抵抗性の程度に違いがある場合(品種間差) は、全く病徴が認められない免疫(immunity)と呼べるレベルから、多少の病徴は 認められるものの,拡大が防がれる抵抗性(resistant),明瞭な病徴が示される罹病 性(susceptible)まで、連続的に認められる(Freeman and Beattie, 2008)。病害抵抗 反応の発動には高いコストを必要とするため、植物は、病原体による静的抵抗性の 打破を監視し、その侵入を検出するシステムを重層的に備え、常時病害抵抗反応を 発動させるのではなく、必要に応じて、適切なセットの病害抵抗反応を発動させる ことで無駄なコストを省いている。第1層目は、幅広い種類の病原体(微生物)に 共通する分子パターン (Pathogen/Microbe associated molecular pattern(s): PAMP(s)/MAMP(s))のPattern recognition receptor (PRR)による認識を経て発動され るもので, Pattern triggered immunity (PTI) と呼ばれ, 一般にそれほど顕著ではない ものの、幅広い、病原体レースに効果を示すことから圃場(基礎的)抵抗性、水平 抵抗性とも呼ばれる。進化の過程で,ある病原菌は PTI を抑制する働きを持つ分子 (Effector)を獲得し、特権的に栄養を引き出す機会を得る。この場合、植物は「罹

病性」であり、明瞭な病徴を示す。これに対して、Effectorを認識して動的抵抗性を 発動できる植物は、「抵抗性」であり、Effectorの認識に関わるタンパク質は R

(Resistant) -protein, それをコードする遺伝子は R-gene と称される。Effectorの認識を経て発動される動的抵抗性は, Effector-triggered immunity (ETI) と呼ばれ,顕著な防御力と病原体レースに対する特異性の高さから真性(R遺伝子依存)抵抗性, 垂直抵抗性とも呼ばれる(Jones and Dangles, 2006; Tsuda and Katagiri, 2010)。ETIは,病原体の進化がもたらす新たな Effector により打破されることがあるが,植物側もR遺伝子の進化により新たな ETIを発現する(Zigzag model: Jones and Dangles, 2006)。

これは、イネいもち病に対する抵抗性品種に典型的な例を見ることができるが、ETI の打破は抵抗性の「崩壊」と呼ばれるほど、劇的な防御力の低下につながるため、 昨今の育種の課題となっている。一方、Effector により PTI の抑制は起きるものの、 PAMPs/MAMPs が往々にして複数の PRR に認識されるため(Boller and Felix, 2009)、 崩壊しにくい。育種においても、真正抵抗性と圃場抵抗性の組み合わせや、複数の 圃場抵抗性遺伝子の集積により、崩壊しにくい抵抗性の獲得が試みられている (Horo *et al.*, 2016)。

病原体の認識に成功し,動的抵抗性を発動させる過程で,植物は様々な病害抵抗 反応を繰り出す(Boller and Felix, 2006)。遅くとも数分内にはシグナル物質でもあ る活性酸素種(Reactive oxygen species/intermediates: ROSs/ROIs)の生成(Levine *et al.*, 1994; Alvarez *et al.*, 1998)が始まり,数時間内には,遺伝子発現を経て,キチナ ーゼやグルカナーゼなどの糖加水分解酵素(Mauch *et al.*, 1988; Ji and Kuć, 1996), 過敏感細胞死(Greenburg, 1996; Van Aken and Van Breusegem, 2015),抗菌物質である ファイトアレキシンの蓄積(Ahuja *et al.*, 2012),アポプラストへのカロースの沈着 (Luna *et al.*, 2010),細胞壁の強化(Iiyama *et al.*, 1994)などが始まる。細胞死やカロ ースの沈着は,侵入を受けた細胞で病原体を封じ込める。サツマイモ貯蔵根でみら れるように,ファイトアレキシンの合成は隣接細胞でも行われ(瓜谷, 2001),被害 の拡大を防ぐ。

病害抵抗反応には、初期の ROSs/ROIs 生成や過敏感細胞死、各種の酵素反応が介 在するファイトアレキシン合成や細胞壁の強化に至るまで、高エネルギー中間体の 励起種の生成を伴う生化学反応が多く含まれ、極微弱発光の発光源になりうると考 えられる。ROS そのものの発光としては、一重項酸素 <sup>1</sup>O<sub>2</sub>の発光(1分子発光:λ=1270 nm;2分子発光:λ=634 nm、703 nm)が報告されているが、生物の極微弱発光では、 ROS による、脂質やタンパク質の酸化で生じる三重項励起カルボニル <sup>3</sup>R=O\*(λ=350-550 nm)からの発光のほか、ROS や励起カルボニルによって、クロロフィル、カロ

テノイド,アントシアニンやメラニンなどの色素が励起されることによる発光(メ ラニン  $\lambda$ =550-600 nm; クロロフィル  $\lambda$ =670-740 nm; クロロフィル蛍光  $\lambda$ =750-1000 nm),または,近接分子の発光を受けて色素から生じる蛍光などが,より優占する と考えられる(渡辺・稲葉,1991a; Pospíšil *et al.*, 2014)。三重項励起カルボニルは,初 期病害抵抗反応のオキシダティヴバーストで生成するスーパーオキシド('O<sub>2</sub>'),ス ーパーオキシドの不均化で生じる過酸化水素(H<sub>2</sub>O<sub>2</sub>)などの存在による,細胞膜成 分の酸化のほか,サツマイモ貯蔵根におけるファイトアレキシン(ipomeamarone) 生成(Fujita *et al.*, 1982)のようにP450モノオキシゲナーゼが介在する二次代謝産 物合成の反応中間体などに存在する(Guengerich *et al.*, 2011)。また,シロイヌナズ ナの ETIにおける過敏感細胞死では,ROS ではなく活性窒素種(Reactive nitrogen species: RNS)の発光への関与が示されているが(Bennett *et al.*, 2005),直接的には, この場合にも RNS による膜脂質,タンパク質の過酸化(Repetto *et al.*, 2012)の関与 が推測される。

エリシター(elicitor)は、植物の病害抵抗反応を誘導する要因の総称で、病原体 や宿主成分など生物由来分子(Keen *et al.*, 1983; Boller and Felix, 2006)のほか、無 機元素(Fawe *et al.*, 1998; 渡辺ら, 2000)、紫外線(Kunz *et al.*, 2008; 神頭ら, 2011) などが報告されている。PAMPs/MAMPs あるいは effctor はともに病原体(微生物) 由来のエリシターであるが、上述のとおり、PAMPs/MAMPs は微生物の科以上のレ ベルで概ね共通して存在しており、植物側の受容体も、狭くても種内で共通してい る(Boller and Felix, 2009)。

PAMPs/MAMPs の代表として、キチン (poly-β1,4-*N*-acetyl-D-glucosamine) が知ら れている。キチンは、植物病原糸状菌の主要な細胞壁構成成分の一つであり、その 分解物であるキチンオリゴ糖は、細菌由来のflg22と並び最もユニバーサルな MAMP であり、多くの植物に対してエリシターとして働くことが報告されている (Shibuya and Minami, 2001)。また、純度の高い精製品が粉末状態で市販されており、精密な

試験に安定的な利用が可能である。イネにおいて、キチン受容体である CEBiP(Chitin oligosaccharide Elicitor-Binding Protein) と CERK1 (Chitin Elicitor Receptor Kinase 1) の複合体によって認識され、病害抵抗反応を引き起こすことが明らかにされた (Kaku *et al.*, 2006; Shimizu *et al.*, 2010; Hayafune *et al.*, 2014)。イネ以外の植物種に おいても類似のシステムが保存されている(Shinya *et al.*, 2015)。イネでは 6 量体 以上の重合度で明瞭な活性が認められ、1  $\mu$ M 程度からキチン応答性の遺伝子発現を 誘導し (Minami *et al.*, 1996), 100  $\mu$ M でファイトアレキシン生成を強く誘導するこ とが報告されている(Yamada *et al.*, 1993)。

また,植物の根圏で生息させることで生育促進効果及び,病害防除効果を示すこ とが報告されている植物生育促進菌類(Plant growth promoting fungi: PGPF)は、菌 体だけでなく,その培養ろ液にも強いエリシター活性が認められる(Meera *et al.*, 1994; Koike *et al.*, 2001;原液~1/2水希釈で使用)。中でも *Penicillium simplicissimum* GP17-2株の培養ろ液は、キュウリ、タバコ、シロイヌナズナ、イネなどにエリシタ ー活性が確認され、新規の MAMPs として注目されているエリシターである(Koike *et al.*, 2001; Hossain *et al.*, 2007)。

病害抵抗反応はダイナミックな生理変化を伴うため、肉眼による病徴観察にはじ まり、感染組織の顕微鏡観察や代謝産物の検出、病害抵抗反応に先立つ遺伝子発現 の解析など、そのモニタリングのために多方面からのアプローチが試みられている。 本研究論文の目的でもある病害抵抗性誘導の検出にも、病害抵抗反応のモニタリン グ技術が使われるが、病徴観察以外の顕微鏡的・生化学的手法では、サンプルの破 壊や加工を伴い、サンプリングのタイミングや処理方法に付随する制限がある。ま た近年、ルシフェリンールシフェラーゼシステムのような発光マーカーを利用して、 同一サンプルにおいて既知の病害抵抗性誘導関連遺伝子/タンパク質発現を連続的 に非侵襲的に観察する方法が用いられるが (Ono *et al.*, 2004; Ono *et al.*, 2011)、遺伝 子組換えによる植物の加工や、検出用試薬の添加などによる対象への干渉は避けら

れない。

本研究で扱う生物の極微弱発光(Ultraweak photon emission: UPE)は、Ultraweak chemiluminescence, biophotonとも呼ばれ、励起種生成を伴う生化学反応を発光源とすると考えられている(Abeles, 1986)。植物の病害抵抗反応では、高エネルギーの励起種が生成する生化学反応が起きており、それに伴う発光が観察される可能性が高い。病徴観察以外で植物の病害抵抗反応を非侵襲的かつ連続的に測定する技術は、これまでにないユニークな指標となり、病害抵抗性誘導におけるプライミングの簡易な検出方法の作成につながる可能性がある。

本章研究では,第一に各種の植物と病原体の組み合わせで,病害抵抗反応に関連 した発光の検出を試みた。第二に,病害抵抗反応に関連した発光の特性を解析し, 病害抵抗反応に伴って,定常状態と波長組成や強度が異なる発光現象が生じている ことを明らかにした。第三に,病原体接種の代替として,病害抵抗反応の引き金と なる因子,すなわち,エリシターで病害抵抗反応を引き起こすことで,安定的な発 光(エリシター応答発光)が得られることを明らかにし,植物の病害抵抗反応の新 たな検出方法として確立した。

# 第2節 各種植物からの病害抵抗反応に伴う極微弱発光の検出

# 1. 材料及び方法

#### 1) 極微弱発光測定装置

発光強度の経時的変化は、フォトンカウンター(図2 MSPCI 浜松ホトニクス) で測定した。本装置は、240~630 nm に感度を持つ光電子増倍管(R329P 浜松ホト ニクス)と、直径 60 mm、高さ 15 mm までのサンプルを円周上に 16 個搭載可能な 円盤型サンプルテーブルを暗箱内に収めた測定部構造で、光検出器の下でサンプル テーブルを回転させ、各サンプルからの発光を約1分ごとに2秒間測定した。



図 2 フォトンカウンター

(MSPCI 左:チェンバーを開けたところ、右:サンプルホルダー)

### 2)供試植物及び病原体

極微弱発光の測定には、入手しやすく、測定試料の調性が容易な、1 年生植物の 芽生え、葉、貯蔵根などを用いることとし、モデル植物であり実用植物でもある、 タバコ及びイネに加えて、静岡県内で栽培が盛んなメロン、イチゴ、トマト、サツ マイモを解析対象とした。タバコ (Nicotiana tabacum) に対しては、病原体として野 火病菌 (Pseudomonas amygdali pv. tabaci) 及び立枯病菌 (Ralstonia solanacearum)、 イネ (Oryza sativa) に対しては、いもち病菌 (Pyricularia oryzae) 及び白葉枯病菌 (Xanthomonas oryzae pv. oryzae)、メロン (Cucumis melo) に対しては、つる割病菌 (Fusarium oxysporum f. sp. melonis), トマト (Solanum lycopersicum) に対しては, 青枯病菌 (R. solanacearum), イチゴ (Fragaria×ananassa) に対しては,炭疽病菌 (Colletotrichum gloeosporioides),サツマイモ (Ipomoea batatas) に対しては,つる 割病菌 (F. oxysporum f. sp. batatas) を用いた。供試品種として,タバコとイネ,メ ロンでは対象病害に対して真性抵抗性を持つ品種と罹病性の品種,イチゴとトマト では, 圃場抵抗性程度が異なる品種を用いた。サツマイモでは,罹病性品種のみを 用い,接種に病原菌及び非病原性菌 (F. oxysporum SK-102 株)を用いた。供試品種 の対象病害に対する抵抗性の概要は表1に,用いた病原体の種類は表2に示した。

病原体のうち,細菌はジャガイモ半合成寒天培地(ジャガイモ 300 g 分の煎汁, スクロース 15 g, ペプトン 5 g, Na<sub>2</sub>HPO<sub>4</sub>・12H<sub>2</sub>O 2 g, Ca(NO<sub>3</sub>)<sub>2</sub>・4H<sub>2</sub>O 0.5 g, 寒天 15 g, 蒸留水 で 1000 mL にメスアップ後オートクレーヴ, pH 6.8) で 25℃, 2 日間 培養した菌体を滅菌水に懸濁して用いた。糸状菌のうち,いもち病菌は,オートミ ール寒天培地(オートミール 50 g を 80℃の熱水中で 1 時間撹拌し煮汁をガーゼで ろ過したもの・寒天 20 g, 蒸留水で 1000 ml にメスアップ後オートクレーヴ, pH 5.8) 上で形成させた分生胞子を Tween20 (和光純薬) 0.02%を含む滅菌水に懸濁して用 いた。Fusarium 属菌(つる割病,萎凋病),炭疽病菌はジャガイモ・デキストロース 液体培地(Potato dextrose broth, PDB: ジャガイモ 200 g 分の煎汁・デキストロース 20 g/L)中で 28℃,120 rpm,4日間振とう培養した培養物をガーゼでろ過,遠心洗 浄して菌糸体を除いて得た分生胞子(Fusarium 属菌は出芽細胞: bud-cell)を滅菌水 に懸濁して用いた。

#### 3) 病原体の接種と極微弱発光測定

病害抵抗反応に伴う極微弱発光は非常に発光強度が弱いことが予測されたため, いずれの植物サンプルも接種前に 1~5 時間, 暗黒下において, 光照射によって発生 する遅延蛍光が減衰してから, 病原体の接種を実施した。 タバコは,播種後10週目の植物の完全展開葉からリーフディスク(φ40 mm)を 採取し,滅菌水に浮かべ3時間暗所に置いた。野火病菌あるいは,立枯病菌の滅菌 水懸濁液(1×10<sup>8</sup> cfu/ml)を減圧接種した後,φ50 mmのプラスティックシャーレ(栄 研化学工業(株))内で滅菌水に浮かべ,25℃で発光を測定した。1回の試験は2反 復で行い,結果は2回の試験の平均を示した。

植物種	供試 部位	品種	抵抗性	
タバコ Nicotiana tabacum	葉切片	Bright Yellow 4 Burley 21 みちのく1 号 遠州	野火病, 立枯病に罹病性 野火病に抵抗性( <i>N. longiflora</i> 由来の強抵抗 性) 野火病に抵抗性( <i>N. longiflora</i> 由来の強抵抗 性) 立枯病に抵抗性( <i>Rps</i> 遺伝子とpolygene 由来)	
イネ Oryza sativa	葉切片	コシヒカリ 黄金晴 ツキミモチ ササニシキ 中系 314 号 黄玉	いもち病に罹病性 いもち病レース 001 に抵抗性 ( <i>Pi-a</i> ) いもち病レース 007 に抵抗性 ( <i>Pi-i,k</i> ) 白葉枯病に罹病性 白葉枯病に抵抗性 白葉枯病に抵抗性	
メロン Cucumis melo マクワウリ Cucumis melo var. makuwa	幼植物	アムス 大井 アンデス 黄金 9 号 (マクワウリ)	つる割病全レースに罹病性 つる割病レース0及び2に抵抗性(Fom-1) つる割病レース0及び2に抵抗性(Fom-1) つる割病レース0及び1に抵抗性(Fom-2)	
トマト Solanum lycopersicum	幼植物	ポンテローゼ がんばる根 LS89 Walter	青枯病,萎凋病に罹病性 青枯病に抵抗性(圃場抵抗性と考えられる) 青枯病に抵抗性(圃場抵抗性と考えられる) 萎凋病(レース2)に抵抗性	
イチゴ Fragaria×ananassa	小葉	女峰 炭強 2(静岡農林研成) 炭強 20(静岡農林研成) 宝交早生	炭疽病抵抗性の程度 女峰 ≦ 炭強 2 < 炭強 20 ≦ 宝交早生 (圃場抵抗性と考えられる)	
サツマイモ Ipomoea batatas	貯蔵根 切片	ベニコマチ	つる割病抵抗性 極弱	

表1 供試した植物品種

#### 表2 供試した病原体

宿主	病名	病原名	菌株名(分譲元)	
タバコ ー	野火病	Pseudomonas amygdali pv. tabaci	MAFF301075	
	立枯病	Ralstonia solanacearum phylotype I	MAFF301069	
イネー	いもち病	Pyricularia oryzae	愛知県農業総合試験場	
		レース 001, 007	山間農業研究所	
	白葉枯病	Xanthomonas oryzae pv. oryzae	MAFF 311018	
		レース I		
メロン	つる割病	Fusarium oxysporum f. sp. melonis		
		レース 0, レース 1, レース 2, レース	九州沖縄農業センター	
		1,2y		
	青枯病	Ralstonia solanacearum phylotype I	MAFF 301070	
	萎凋病	Fusarium oxysporum f. sp. lycopersici	静岡農林研保存株	
		レース 2		
イチゴ	炭疽病	Colletotrichum gloeosporioides	静岡農林研保存株	
サツマイモ -	つる割病	Fusarium oxysporum f. sp. batatas	静岡農林研保存株	
	非病原性菌	Fusarium oxysporum SK-102 株	静岡農林研保存株	

イネは 5-6 週齢の植物体の展開葉から葉切片(3 cm×1 cm 3 枚)を採取し,滅菌 水で湿らせた濾紙を敷いた 60 mm シャーレに入れて暗所に 1 時間置いた。その後, 束ねた木綿針で葉裏に傷を付け,いもち病菌の分生胞子懸濁液(1×10<sup>7</sup> cells/ml)あ るいは,白葉枯病菌懸濁液(1×10<sup>8</sup> cells/ml)1 mlを全体に噴霧接種し,25℃で接種 面の発光を測定した。結果は 2 回の試験の平均を示した。

メロンは、インキュベーター内(25℃・明期 12 時間)のプラスティックシャーレ で子葉を展開させた幼植物(催芽 4-6 日後・10 個体)を使用した。滅菌水で湿らせ た濾紙を敷いたシャーレに移し、5 時間暗所に置いた後、つる割病菌の出芽細胞懸 濁液( $1\times10^7$  cells/ml)1 mlを全体に噴霧接種し、直ちに 25℃で発光を測定した。1 回の試験は 2 反復で行い、結果は 2 回の試験の平均を示した。

トマトは、インキュベーター内(25℃・明期 12 時間)のプラスティックシャーレ で子葉を展開させた幼植物(催芽 4-6 日後・10 個体)を使用した。滅菌水で湿らせ た濾紙を敷いたシャーレに移し,5時間暗所に置いた後,萎凋病菌の出芽細胞懸濁液(1×10<sup>7</sup> cells/ml)もしくは,青枯病菌懸濁液(1×10<sup>8</sup> cells/ml)1mlを全体に噴霧 接種し,直ちに25℃で発光を測定した。1回の試験は2反復で行い,結果は2回の 試験の平均を示した。

イチゴは、小葉を採取し、滅菌水で湿らせた濾紙を敷いたプラスティックシャー レに入れて暗所に1時間置いた。その後、束ねた木綿針で葉裏に傷を付け、炭疽病 菌の分生胞子懸濁液(1×10<sup>7</sup> cells/ml)1mlを全体に噴霧接種し、25℃で葉裏の発光 を測定した。1回の試験は2反復で行い、結果は2回の試験の平均を示した。

サツマイモは, 貯蔵根から φ50 mm, 厚さ 8 mm の円盤状の切片を作成し, シャー レに入れて 20℃, 暗黒下で 12 時間エイジングした。その後, つる割病菌もしくは, 非病原性菌の出芽細胞懸濁液 (1×10<sup>7</sup> cells/ml) 250 µl を切片上面に塗布接種し, 20℃ で接種面の発光を測定した。1 回の試験は 2 反復で行い, 結果は 2 回の試験の平均 を示した。

#### 2. 結果

#### 1) 病原体(野火病・立枯病)を接種したタパコ葉の発光

いずれのタバコ品種でも対照の水処理では、処理開始から 12 時間の時点で 5~6 光子/秒/cm<sup>2</sup>以下の発光強度で推移した。野火病菌を接種すると、野火病抵抗性 品種'Burley21'及び'みちのく 1 号'では、接種 0.5~1 時間後の短時間の発光増加に続 き、8 時間後から始まり 12 時間後に 10 光子/秒/cm<sup>2</sup>以上のピークを迎え漸減す る発光パターンが認められた(図 3)。これに対し、罹病性品種'Bright Yellow 4'(BY-4) では水処理と比べて明瞭な変化が認められず、抵抗性の有無により、病原菌接種 時の極微弱発光に明瞭な差異が認められた(図 3)。



接種後の経過時間(h)

立枯病菌の接種により,優性1因子の立枯病抵抗性遺伝子を有する品種'遠州'と 立枯病抵抗性遺伝子を持たない罹病性品種BY-4の葉は,ともに接種後20時間過ぎ から発光を増加させたが, '遠州'のピーク発光強度がより高く,20光子/秒/cm<sup>2</sup>に 達した(図4A, B)。



図4 立枯病菌を接種したタバコ葉の発光

タバコ展開葉から葉切片(直径 40 mm)を採取し,滅菌水に浮かべて3時間前後暗 所に置いた後,立枯病菌(1×10<sup>8</sup> cfu/ml)を減圧接種し,シャーレ内で滅菌水に浮か べて 25℃で発光を測定した。結果は2回の試験の平均を示した。

### 2) 病原体(いもち病菌・白葉枯病菌)を接種したイネ葉の発光

イネ葉切片へのいもち病菌の接種では、レース 007 を接種した場合に抵抗性品種 (ツキミモチ)では、24 時間後まで接種した葉片の発光が上回り、接種後 20 時間前後 には一時的な発光増高も認められた(図 5 A)のに対し、罹病性品種、コシヒカリ、に おいては、接種した葉片の発光が対照より高い状態が、接種直後から 10 時間程度認 められた(図 5 B)。しかしながら、レース 001 を接種した抵抗性品種"黄金晴"と罹 病性の"コシヒカリ"では接種区と対照区の間で差がなく、品種間にも明瞭な差が認 められなかった(図 5 C, D)。

これと同様に、白葉枯病菌を接種した場合にも、接種区と対照区あるいは、抵抗 性と罹病性の品種間差が明瞭でなかった(図6A~C)。



図5 いもち病菌を接種した各種イネ品種の発光

イネ展開葉から葉切片(3 cm×1 cm 3 枚)を採取し,60 mm シャーレに入れて暗所に1 時 間置いた。その後,束ねた木綿針で葉裏に傷を付け,いもち病菌(レース 001 もしくは 007) の懸濁液(1×10<sup>6</sup> cells/ml)1 ml を全体に噴霧接種し,25℃で接種面の発光を測定した。 結果は2 回の試験の平均を示した。



#### 3) 病原体(つる割病菌)を接種したメロン幼植物の発光

子葉期の幼植物につる割病菌の出芽細胞を接種すると、いずれのメロン及びマク ワウリ品種でも接種直後から対照の水処理に比べて発光が増加した(図7A~D)。 つる割病菌のレース 0, 1, 2, 1,2y 全てに罹病性のメロン品種'アムス'は、レース 1,2y に対してやや発光強度が低かったものの、4 レース全ての接種で、接種後 2 時 間で発光ピークに達し、その後漸減する同傾向の発光パターンが認められた(図 7 D)。これに対し、抵抗性遺伝子 Fom-2 を持ち、レース 0, 1 に抵抗性のマクワウリ 品種'黄金 9 号'は、全てのレースの接種で、接種後 10~20 分の早い段階で発光のピ ークに達した。その後、レース 0, 1 の接種では 6~8 時間後にゆるやかな第二ピー クを持つ発光パターンが認められる一方で、レース 2, 1,2y に対しては接種後 3~4 時間後に第二ピークを持つ発光パターンが認められた(図7A)。

抵抗性遺伝子 Fom-1 を持ち, レース 0,2に抵抗性のメロン'大井'は,レース 0, 1,1,2yの接種後 2 時間過ぎにピークに達し,その後漸減する発光パターンを示す一 方で,レース 2 に対しては他の 3 レースに対するのと異なり,接種後 8~10 時間に 緩やかなピークを持つ発光パターンを示した(図 7 B)。Fom-1 を持つ別のメロン'ア ンデス'(図 7 C)でも同様に,レース 2 に対してのみ異なる反応を示した。表 3 に 本試験の結果をまとめた。



図7 つる割病菌各レースを接種したレース判別用メロン各品種の発光

湿濾紙上で子葉を展開させた幼植物(催芽 4-6 日後・10 個体)を 60mm シャーレに移 し、5 時間前後暗所に置いた後、つる割病菌の出芽胞子懸濁液(1×10<sup>7</sup>cells/ml)1 ml を全 体に噴霧接種し、25℃で発光を測定した。結果は2回の試験の平均を示した。

接種レース 抵抗性/ 発光パターン *	レース 0	レース 1	レース 2	レース 1,2y
アムス	S	S	S	S
	+/-	+/-	+/-	+/-
大井	R	S	R	S
	+/-	+/-	+/+	+/-
アンデス	R	S	R	S
	+/-	+/-	+/+	+/-
黄金9号	R	R	S	S
(マクワウリ)	+/+	+/+	+/-	+/-

表3 つる割病菌各種レースを接種したメロン品種の反応(上段:病徴,下段:発光)

\* S:罹病性, R:抵抗性

\* 対照処理(水)との比較

+/-:接種後3時間以内の発光増加あり/接種後6時間以降の発光増加なし

+/+:接種後3時間以内の発光増加あり/接種後6時間以降の発光増加あり

#### 4) 病原体(青枯病菌・萎凋病菌)を接種したトマト芽生えの発光

トマト幼植物への青枯病菌の接種では, 罹病性の'ポンテローザ'で, 病原菌接種 により対照の水処理に比べて平均発光強度が若干低くなったが, いずれの品種にお いても一過性の発光増加は認められなかった (図8A~D)。また, トマト幼植物へ の萎凋病菌の接種では, 罹病性及び抵抗性品種ともに対照の水処理に対して明瞭な 発光変動は認められなかった (図9A, B)。



### 図8 青枯病菌を接種したトマト各品種の発光

湿濾紙上で子葉を展開させた幼植物(催芽4-6日後・10個体)を60mmシャーレに移し, 5時間前後暗所に置いた後,青枯病菌の懸濁液(1×10<sup>8</sup>cells/ml)1 mlを全体に噴霧接種 し,25℃で発光を測定した。結果は2回の試験の平均を示した。



#### 図9 萎凋病菌を接種したトマト各品種の発光

湿濾紙上で子葉を展開させた幼植物(催芽 4-6 日後・10 個体)を 60mm シャーレに移 し、5 時間暗所に置いた後、萎凋病菌の出芽胞子懸濁液(1×10<sup>7</sup>cells/ml)1 ml を全体に噴 霧接種し、25℃で発光を測定した。結果は2回の試験の平均を示した。

# 5) 病原体(炭疽病菌)を接種したイチゴ葉の発光

炭疽病菌の分生胞子懸濁液を接種したイチゴ小葉では、タバコのリーフディスク やメロンの幼植物で認められた一過性の発光増加は認められなかった(図 10)。今 回供試した品種は、炭疽病抵抗性の強さにおいて、'女峰'≦'炭強 2'< '炭強 20'≦ '宝交早生'の関係にある。各品種において、病原菌を接種した区と水処理の対照区 の発光強度を比べると、抵抗性の弱い'女峰'及び、'炭強 2'では、接種区の発光強度 が対照区に比べて高い傾向にあったが(図 10 A, B)、抵抗性が強い'炭強 2'及び、 '宝交早生'では対照区と差がなかった(図 10 C, D)。



接種試験による抵抗性の程度:女峰 ≦ 炭強2 < 炭強20 ≦ 宝交早生

### 図 10 炭疽病菌を接種したイチゴ各品種の発光

イチゴ小葉を採取し、60mm シャーレに入れて暗所に1時間置いた。その後、束ねた木 綿針で葉裏に傷を付け、炭疽病菌の分生胞子懸濁液(1×10<sup>7</sup>cells/ml)1 ml を全体に噴霧 接種し、25℃で接種面の発光を測定した。結果は2回の試験の平均を示した。

#### 6) 病原体(つる割病菌)を接種したサツマイモ貯蔵根切片の発光

サツマイモ貯蔵根切片の表面につる割病菌(F. oxysporum f. sp. batatas)の出芽細胞を接種すると、接種1~2時間後から発光強度が上昇し、接種14~18時間後をピークに、漸減した(図11)。ピーク時の発光強度は300光子/秒/cm<sup>2</sup>を越えた。 また、非病原性のF. oxysporumを接種した場合にも、病原体接種には及ばないがピークで200光子/秒/cm<sup>2</sup>を越える発光が認められた。対照として同量の水を処理した場合には、接種区でピークを迎える時間帯でも15光子/秒/cm<sup>2</sup>程度であり、 病原体の接種により他の植物に比べて著しい発光の増加が認められた(図11)。測定終了後、病原菌接種切片上には菌糸が旺盛に成育していたが、非病原菌接種切片 では、菌糸の成育は認められなかった(図省略)。



#### 図 11 つる割病菌あるいは非病原菌を接種したサツマイモ貯蔵根の発光

結果は2回の試験の平均を示した。

## 3. 考察

本研究では,病害抵抗反応に伴う発光現象の検出を目的に,各種作物において, 病原体を接種し,それに対する罹病性品種と抵抗性品種の反応を比較解析した。

病原体の侵害に対して,植物はまず基礎的抵抗性(PTI)を発揮するが,病原体は, それを抑制・遅延させるか,あるいはそれに耐えるかして感染を成立させる(瓜谷
ら,2001; Tsuda and Katagiri,2010)。本研究において、タバコ立枯病、メロンつる割病において抵抗性・罹病性に共通した発光増加が認められたのは、この基礎的抵抗性(PTI)に由来する可能性が考えられた。

これと同様に、サツマイモ貯蔵根に対して、つる割病菌あるいは非病原性フザリ ウム菌を接種した場合の発光は、強度の差はあったものの、基礎的抵抗性に由来す る同質の反応と推測される。サツマイモ貯蔵根に病原性を示す黒斑病菌、偽黒斑病 菌、つる割病菌、紫紋羽病菌などは、侵入の仕方が似ており、侵入に対する病害抵 抗反応として、ファイトアレキシンであるイポメアマロンをはじめとするテルペン 類が合成される(瓜谷ら、2001)。イポメアマロンの糸状菌成育抑制効果はサツマイ モ病原体に対しては比較的弱く、病原体は侵害を続けることが出来ると考えられて いる(瓜谷ら、2001)。そのため、つる割病菌の接種により、非病原性菌に比べて強 い発光が長く続いたのは、侵害を止められず、サツマイモが抵抗反応を続けていた のが原因だと推測される。

一方,真性抵抗性を持つタバコ野火病抵抗性品種では,極微弱発光の測定におい て野火病菌の接種 8~12時間後に,罹病性品種では認められない一過的な発光増加 が認められた(図 10)。野火病抵抗性のタバコに野火病菌を接種して過敏感反応を 誘導すると,接種の 9~12時間後に活性酸素種(O<sub>2</sub>)の生成と細胞死が起きること が報告されている(Krzymowska *et al.*, 2007)。過敏感細胞死に基づく極微弱発光の 発生は Bennett らにより報告されており(Bennett *et al.*, 2005),抵抗性品種で認めら れた発光の一過的な増加は,過敏感反応に由来する可能性が推察される。

しかしながら、立枯病菌に対して真性抵抗性を持つ抵抗性品種と罹病性品種の間 に認められた発光パターンの違いを、病害抵抗反応に関連付けて推察することは、 今回はできなかった。同様に、つる割れ病菌のレースに対して真性抵抗性を持つメ ロン品種(レース0と抵抗性品種の組み合わせを除く)からは、表3に示したよう に、病原菌の接種の6~10時間後にピークを持つ極微弱発光が発生し、この発光は

罹病性反応では認められないことから,抵抗性反応に起因すると考えられるが,そ の種類を推察することはできなかった。

タバコ葉あるいはサツマイモ貯蔵根切片への病原菌接種では共に,水処理と明瞭 に区別される発光の増加が観察された。タバコ葉への細菌接種では,常用される細 胞間隙への浸潤接種をおこない,また,サツマイモ貯蔵根切片への接種では,切断 面への塗布をおこなったことにより,他の植物種のケースに比べて病原体の細胞へ の接触機会が多く,その結果,病害抵抗反応を示す細胞数が多くなったと考えられ, 接種方法が発光誘導に与えた影響が大きかった。

これとは対照的に、イネ葉、トマト幼植物、イチゴ小葉などでは、いずれの組み 合わせにおいても、対照区との発光の差は明瞭には認められなかった。罹病性の組 み合わせでは、測定後に接種部位の病徴を確認しており、接種に問題は無く(デー タ省略)、少なくとも、今回の方法による病害抵抗反応に伴う発光変動の検出は、難 しいと考えられた。

以上のように、複数の植物と病原体の組み合わせにおいて早期に明瞭な発光の増 加が認められたのは、一部の組み合わせに限られたが、発光パターンが植物の抵抗 性を反映することが確認された。今回供試した中で、サツマイモ貯蔵根切片とフザ リウム菌の組合せでは、特に強い発光が長時間にわたって観察され、病害抵抗性に 関連した発光の特性を調べる上で好適なモデルと考えられたため、第3節ではこの 組み合わせを用いて解析を進めた。

# 第3節 病害抵抗性に関連する極微弱発光の特性解析

# 1. 材料及び方法

#### 1) 供試植物

サツマイモ品種'ベニコマチ'の貯蔵根から直径 50 mm, 厚さ 8 mm の切片を作成し, 試験に用いた。切片は, プラスティックシャーレに入れて 20℃, 暗黒下で 12 時

間エイジングした後に使用した。また,切片を 10 分間沸騰水中においたものを不活 性化サンプルとして使用した。

#### 2) 供試菌株

第2節で使用した非病原性フザリウム菌*F. oxysporum* SK-102株を使用した。本菌 株は接種試験によってサツマイモに対する病原性がないことを確認している。ジャ ガイモ・デキストロース液体培地(Potato dextrose broth, PDB: ジャガイモ200g分 の煎汁・デキストロース20g/L)中で28℃,120 rpm,4日間振とう培養した培養物 をガーゼでろ過して菌糸体を除き,出芽細胞(bud-cell)懸濁液を得た。遠沈と滅 菌水への再懸濁を5回行い,細胞を洗浄した。洗浄した細胞は滅菌水で1×10<sup>5</sup>~10 <sup>7</sup>出芽細胞/mlになるよう滅菌水で段階希釈して試験に用いた。また,チューブに 入れた胞子懸濁液を5分間,沸騰水中に置いたものを同様に洗浄して不活性化サン プルとした。対照には,滅菌水を使用した。サツマイモのファイトアレキシンであ るイポメアマロン(Ipomeamarone)の生成を誘導する対照菌として,サツマイモ黒 斑病菌(*Ceratocyctis fimbriata* NBRC 30501)を用い,非病原性フザリウム菌と同様 に接種源(内生胞子)を調整した。

#### 3) 病原体の接種と極微弱発光の測定

サツマイモの発光強度の経時変化は、フォトンカウンター(C1230 浜松ホトニ クス)で測定した。本装置は、185~650 nmに感度を持つ光電子増倍管(R208 浜 松ホトニクス)と、直径60 mm、高さ15 mm までのサンプルを円周上に16個搭載 可能な円盤型サンプルテーブルを暗箱内に収めた構造で、光検出器の下でサンプル テーブルを回転させながら測定を行った。今回の試験では、所定濃度の胞子懸濁液 を上面に塗布したサツマイモ切片を直径60 mmのポリスチレンシャーレ(栄研)に 入れ、サンプルテーブルに格納し、各サンプルについて42.4秒ごとに1秒間の測定 を20℃で24時間連続しておこなった。

# 4) サツマイモ貯蔵根切片上における非病原性フザリウム菌の発芽

発光測定用のサンプルと同様に非病原性フザリウム菌を接種した切片を 20℃で 暗所に維持し,接種の3時間後および6時間後に接種面を含む組織薄片を採取した。 小川ら(1986)の方法に従い,非病原性フザリウム菌の出芽細胞を染色した後,光 学顕微鏡下で1枚の薄片あたり100個以上の胞子を観察し,4枚の平均発芽率を求 めた。

#### 5) 発光の二次元イメージング

発光の二次元イメージングには、ARGUS-50/VIM フォトンカウンティングカメラ (浜松ホトニクス)を備えた撮像用暗箱を使用した。サツマイモ切片上面に非病原 性フザリウム菌の出芽細胞懸濁液を 1×10<sup>7</sup> 個/ml の濃度で「F」の字に塗布し、暗箱 内で 20℃,6時間インキュベートした後に5分間発光を積算し,2次元画像を得た。 ネガティブコントロールとして、滅菌水を同様に塗布した切片を使用した。

# 6) イポメアマロンの検出

サツマイモ貯蔵根では黒斑病菌, 偽黒斑病菌, つる割病菌, 紫紋羽病菌などの侵入に対する抵抗反応として, ファイトアレキシンであるイポメアマロン

(Ipomeamarone)を生成することが報告されている(Oguni and Uritani, 1974; 瓜谷, 2001)。非病原性フザリウム菌を接種したサツマイモにおいて, 既報(Oguni and Uritani, 1974) に従い, 薄層クロマトグラフィー (Thin layer chromatography: TLC) によりイポメアマロンの検出を試みた。サツマイモ貯蔵根から厚さ 5 mm, 重さ 70 g の切片を切り出し, 非病原性フザリウム菌の出芽細胞懸濁液(1×10<sup>7</sup> 個/ml)を上面に塗布接種した。ポジティブコントロールとして, サツマイモ黒斑病菌の 出芽細

胞懸濁液(1×10<sup>7</sup>個/ml), ネガティブコントロールとして, 滅菌水を同様に塗布した ものを用意した。接種した切片は, 湿室条件で, 20℃, 暗黒下において 48 時間イン キュベーションした。インキュベーション後, それぞれの切片を 100 ml の抽出溶媒 (クロロフォルム - メタノール 1:1 vol/vol) 中で摩砕した。摩砕液はガラス繊維ろ 紙(GA200 アドバンテック) でろ過した。ろ過残渣を 50 ml の抽出溶液で洗い, 洗い液を先の抽出物と合わせ, 50ml の脱イオン水と混合し, 2 層に遠心分離させ, 下層のクロロフォルム層を採取・乾燥してイポメアマロンを含むとされる脂質画分 を得た。脂質画分は 2 ml の抽出溶媒に溶解し, 200 µl をシリカゲルプレート(PK-5 Whatman) にスポットして *n*-ヘキサン-酢酸エチル (4:1 vol/vol) で 1 時間展開した。 展開後のプレートに Ehrlich 試薬(10% *p*-dimethylaminobenzaldehyde を含む 95 %エ タノール-濃塩酸 1:1 vol/vol 溶液) を噴霧し, Rf 値 0.63 付近の赤桃色スポットの存 在でイポメアマロンの生成を確認した。なお,切片接種面に Ehrlich 試薬を直接噴霧 することで, イポメアマロンを含むセスキテルペン類を赤桃色に発色させることが 出来るため, 一部の切片で発色を確認したのち実際の抽出を行った。

# 7) サツマイモで観察される極微弱発光の分光測定

非病原性フザリウム菌の接種により、サツマイモで観察される極微弱発光の発光 スペクトルの特性を明らかにするため、成長ホルモン作用のある薬剤処理及び変温 処理によって生じる極微弱発光の発光スペクトルと比較解析を行った。

#### ① 極微弱発光の分光測定方法

極微弱発光の分光測定には、分光型フォトンカウンター(MSPCII 浜松ホトニクス)を用いた(図12)。本装置は240-630 nmに感度を有するヘッドオン型光電子増 倍管(R329 浜松ホトニクス)とサンプル用及び、分光フィルター用の回転円盤を 収めた高精度の暗箱からなる。装置内には直径 60 mm、高さ15 mm までのサンプ ルを16 個まで搭載可能である。分光用フィルターは9枚まで搭載可能で、本研究で

はそれぞれ半値幅で約50nmの透過帯域を持ち,透過帯域の重なりが少ない,帯域 透過フィルターのセット(図12 日本真空光学)を使用し,280-630nmの波長域を カバーした。それぞれのサンプルからの発光は8分ごとに40秒間(フィルター無し 及び7枚のフィルター測定に各5秒間)測定した。1回の試験にそれぞれの処理で 2枚の切片を使用し,試験は3回行った。





MSPC II の外観(左)とチェンバー 内部(右) 外周:サンプルホルダー 内周:フィルターフォルダー



図 12 分光型フォトンカウンターMSPCI(上)と測定波長特性(下) ※各フィルターを透過した光子数を透過率及び量子効率で補正した。

## ② 非病原性フザリウム菌の接種

非病原性フザリウム菌 SK-102 株の出芽細胞懸濁液(1×10<sup>7</sup> 個/ ml) 0.2 mlをサツ マイモの上面に均一に塗布接種した。対照として,滅菌蒸留水を同様に塗布した。 接種直後から 20℃, 36 時間,極微弱発光の分光測定を行った。

#### ③ 2,4-D 処理

2,4-D (2,4-dichlorophenoxyacetic acid) は細胞の伸長成長を促進し,分化を制 御するオーキシン作用を示す。また,2,4-D は適切な処理濃度でサツマイモのカルス 形成を誘導する (Liu and Cantlife, 1984; Schultheis *et al.*, 1990) など大きな生理状態 変化を誘起するため発光変化が期待される。本研究では 2,4-D (和光純薬)を 10 mM Tris-HCl (pH 7.0) で 2 mg/L に希釈して使用した。0.2 ml の 2,4-D 溶液,あるいは対 照として溶媒をサツマイモ上面に塗布した。塗布直後から 20℃,65 時間,極微弱発 光の分光測定を行った。

#### ④ 変温処理

サツマイモの貯蔵根は長期間の保存に際して,事前に高温・高湿度処理される (R.H. 90-95%, 30-32 ℃で1週間)が,この間に呼吸速度は上昇し,収穫時に出来 た傷にはコルク層が形成されるなど,生理状態に変化が認められており(小川ら, 1987),発光変化が期待される。本研究では,装置内を長期間高湿度に保つことが 困難であったため,短時間の温度変化に曝した場合の発光変化を調べた。すなわち, 暗箱内の温度を最初の4時間は20 ℃に維持し,その後33℃まで上昇させ10時間 維持した後,20 ℃に温度を下げて10時間維持した。サンプル温度はサンプルに直 径1mm程度の熱電対プローブを直接差し込み,自記温度計(TR-52S T&D)で記 録した。極微弱発光の分光測定は24時間行った。

# ⑤分光データの解析

それぞれの波長域における発光強度 Liは、下式により算出した。

 $I_i = (N_i - N_i b) / (QE_i \times T_i)$ 

N<sub>i</sub>とN<sub>i</sub>b はそれぞれ i 番目のフィルターを通過して検出されたサンプルあるいは ブランクホルダーの発光を示す。QE<sub>i</sub>は i 番目のフィルターの透過域に対応する波 長域における光電子増倍管の量子効率の平均値,そしてT<sub>i</sub>は i 番目のフィルターの 半値幅での平均透過率を示す。サツマイモ貯蔵根切片から放射される極微弱発光の 波長組成は,測定した全ての波長域における発光量の合計に対する,各波長域にお ける発光量の割合で示した。図中の波長組成の推移は 10 測定点ごとの移動平均を 示した。本研究では,280-430 nm の領域では殆ど発光が検出されなかったため,430-480 nm, 480-530 nm, 530-580 nm 及び 580-630 nm の 4 波長域の値のみを表示した。

#### 2. 結果

# 1) フザリウム菌接種条件の違いによるサツマイモの極微弱発光の変動

表4・図13に示すとおり,生のサツマイモに非病原性フザリウムの生菌を接種した場合のみ,発光の顕著な増加が認められた(表4・図13:1~4番)。熱処理して不活性化したサツマイモでは,不活性化菌(表4・図13:7番)でも生菌(表4・図13:8番)でも発光の増加は殆ど検出されず,生のサツマイモに死菌,あるいは滅菌水を処理した場合(表4・図13:5,6番)を下回った。さらに,測定中24時間の積算発光量は接種胞子濃度の増加に伴って増加した。また,接種胞子濃度が高いほど,発光強度がピークに到達する時間が早まった(表4・図13:1~4番)。

	サツマイモ	フザリウム菌		極微弱発光		
実験 番号	<b>熱処理</b> <sup>a)</sup>	<b>熱処</b> 理 <sup>b)</sup>	濃 度 (細胞数/ml) ×10 <sup>5</sup>	最高発光 強度(光子 数/秒/cm <sup>2</sup> )	積算発光量 (24 時間) ×10 <sup>3</sup>	発光ピーク (測定開始 後 h)
1	無	無	100	257	2934	10
2	無	無	20	162	1976	13
3	無	無	5	144	1257	22
4	無	無	1	108	838	≧24
5	無	有	100	42	395	≧24
6	無	滅菌水 <sup>c)</sup>	0	18	144	0 <sup>d)</sup>
7	有	有	100	23	102	0 <sup>d)</sup>
8	有	無	100	18	90	0 <sup>d)</sup>

表 4 フザリウム菌の接種条件がサツマイモの極微弱発光に与える影響

a)サンプルを沸騰水中に 10 分間おいて不活性化した。

b)サンプルを沸騰水中に5分間おいて不活性化した。

c)無処理対照

d)実験番号 6-7 では測定中に発光ピークが認められなかった。



図 13 フザリウム菌とサツマイモの相互作用に伴う発光の強度推移

図中の番号は表4の実験番号に対応する。

# 2) サツマイモ貯蔵根切片上におけるフザリウム菌の発芽

接種3時間後で平均4.5%,6時間後では36.8%の胞子が発芽していた(図表略)。

# 3) 極微弱発光の二次元イメージング

サツマイモ切片の表面に非病原性フザリウム菌の胞子懸濁液を「F」の形に塗布接 種し,ARGUS-50/VIM で二次元イメージングを行ったところ,塗布した部分で周囲 に比べて強い発光が認められた(図 14)。これより,非病原性フザリウム菌を接種 したサツマイモでは,菌と接している部分で主に発光していることが示された。



# 図 14 フォトンカウンティングカメラで撮影した サツマイモ塊根切片の発光の二次元イメージ

サツマイモ切片に「F」の形に胞子を塗布接種し, 12時間後に ARGUS-50/VIM フォトンカウンティン グカメラで 5 分間の発光を積算して 2 次元イメー ジを取得した。



# 図 15 サツマイモのファイトアレキシン(イポメアマロ ン)生成の TLC 解析

1: サツマイモ黒斑病菌を接種した切片
2: 非病原性フザリウム菌を接種した切片
3: 滅菌水を処理した切片

それぞれの処理後, サツマイモ切片を 20℃, 48 時間 インキュベートしてから, 脂質画分の抽出を行い, TLC 解析に用いた。図中矢印(IP)は イポメアマロン の展開位置(Rf=0.63 の赤桃色スポット)を示す。

#### 4) 非病原性フザリウム菌の接種によるイポメアマロン蓄積の検出

非病原性フザリウム菌を接種したサツマイモにおいて、サツマイモの主要なファ イトアレキシンである、イポメアマロンの蓄積を調べたところ、TLC プレートアッ セイにおいて、対照の黒斑病菌を接種した場合と比べると量は少ないものの、ほぼ 同位置にイポメアマロンの存在を示す、赤桃色のスポットが検出された(図 15 矢 印 Rf=0.63 付近)。

# 5) フザリウム菌との相互作用に伴う発光の波長組成変化

滅菌水を塗布したサツマイモ貯蔵根切片の発光は,ほぼ 480-530 nm,530-580 nm 及び,580-630 nm の 3 波長域で構成されていた(図 16 c)。波長組成は、多少の変 動を見せたものの、測定終了まで安定していた。一方、非病原性フザリウム菌を接 種したサツマイモ貯蔵根切片では、波長組成が発光量の増加に伴って、大きく変化 した(図 16 b)。すなわち、580-630 nm 域の割合が急激な減少を見せる一方で、480-530 nm の発光の割合は急激な増加を示し、530-580 nm の割合はわずかに増加した。 また、430-480 nm 域の発光も増加し主要な成分として加わった。こうした変化は、 総発光量の増加がまだ緩やかな接種後 2-10 時間に起きた。総発光量は接種 20 時間 後でピークに達するまで増加を続けたが、波長組成は接種 12 時間後を過ぎると、測 定終了まで殆ど変化しなかった(図 16 a, b)。



図 16 非病原性フザリウム菌あるいは蒸留水を接種したサツマイモの発光量の推移(a) 及び波長組成の推移(b: 非病原性フザリウム菌, c: 蒸留水)

グラフ中の値は10測定点の移動平均で示している。

### 6)比較解析①:2,4-D処理により誘導される発光の波長組成変化

2,4-Dを処理したサツマイモ貯蔵根切片では,処理後10時間過ぎから総発光量の 増加が認められ,32時間後にピークに達し,その後緩やかに減少した(図17a)。 2,4-D処理後,比較的早い段階で480-530 nm及び530-580 nm域の割合の増加と, 580-630 nm域の割合の減少が認められた。処理後16時間過ぎから測定終了時まで は,波長組成は殆ど変化せず,非病原性フザリウム菌の接種で誘導される発光と類 似していた(図17b)。



図 17 2,4-D で処理したサツマイモの発光量(a)及び発光波長組成(b)の推移

# 7)比較解析②:変温処理により誘導される発光の波長組成変化

暗箱内の温度上昇によりサツマイモ貯蔵根切片内部の温度は 20℃から 33℃に 2 時間で上昇し、およそ 8 時間保たれた後、暗箱内の温度低下により 4 時間かけて

グラフ中の値は 10 測定点の移動平均で示している。

20℃まで低下した(図 18 a)。サツマイモ切片からの発光量は、切片温度の上昇に 伴って増加し、ほぼ同時に最高値に達した。その後も切片温度は約 8 時間に渡って 最高値に維持されたのに対して、発光量は速やかに減少をはじめた。図 18 b にみら れるとおり、極微弱発光の波長組成は切片温度の上昇に伴い、580-630 nm 域の割合 が増加し、530-580 nm 域の割合が減少したが、切片温度が 33 ℃に保たれていると きには、総発光量が減少しても波長組成は変化しなかった。しかしながら、切片温 度が 33 ℃から 20℃に下がる過程では、総発光量の減少に伴って波長組成に変化が 認められた。すなわち、一時的に 580-630 nm 域の割合が急激に減少し、530-580 nm 域の割合が増加した。温度上昇時に比べて温度低下時のほうが波長組成の変化が顕 著に認められた。



#### 図 18 サツマイモの温度変化とサツマイモの発光量(a)及び発光波長組成(b)の推移

グラフ中の値は10測定点の移動平均で示している。

#### 3. 考察

第2節において,特に病原菌(非病原菌)接種時の発光強度の上昇程度が高く, また長く認められた,フザリウム菌を接種したサツマイモの極微弱発光をモデルに, 病害抵抗反応との関係性と,発光の特性について解析を進めた。

接種源の濃度と発光の関係からは、濃度上昇に伴う発光強度の上昇と共に、発光 強度推移にも明瞭な差異が認められた。2×10<sup>6</sup> 個/ml 以上の高濃度で接種した場合 には、接種の4時間後から急激な発光の増加が認められ、一度ピークを形成する特 徴的な発光パターンを示した。5×10<sup>5</sup> 個/ml 以下ではこのピークが認められず、接 種の24時間後に向けて発光が漸増する発光パターンを示した。一方、熱処理して不 活化した胞子を1×10<sup>7</sup> 個/ml で接種した場合、接種の約6時間後から発光が増加し 始め、測定終了時まで増加し続けた。これは、出芽細胞表面の分子がサツマイモに 認識され、弱いながらも病害抵抗反応を誘導したことに基づくと推測される。熱処 理で不活性化したサツマイモ上にフザリウム菌を接種した場合の発光は熱処理なし のサツマイモに水処理した場合よりも弱く、顕著な発光増加はサツマイモから放射 されたと判断できた。

2×10<sup>6</sup> 個/ml 以上で接種した場合には、明らかに発光強度上昇のタイミングが早 く、発芽が確認され始める接種 4 時間後には上昇し始めるため、発芽前のフザリウ ム菌体表面に存在するエリシター成分に応答した発光である可能性も示唆される。 その場合、熱処理で不活性化した接種源では明瞭な反応が認められないため、タン パク質、揮発性成分など、熱処理で活性が失われるものであることが考えられる。 サツマイモ黒斑病菌の近縁種 *Ceratocystis fimbriata* f. sp. *Platani* で発見された、 **Cerato-platanin** (CP) は、宿主細胞表面への固着に関与すると考えられる分泌性タン パク質で、サツマイモ黒斑病菌や F. oxysporum を含む子のう菌科で広くゲノム中に 類似の配列が確認されている(Yu and Li, 2014)。CP は宿主及び非宿主に対して共 に、ファイトアレキシン合成を誘導するエリシター活性を示すことが報告されてお り(Scala et al., 2004),非病原性フザリウム菌の出芽細胞で同様に働いていると仮 定すれば,発芽した細胞が増えるに伴い,急激な発光強度の上昇が認められ,熱処 理により活性が低下した結果を説明できると考えられる。

イポメアマロンが植物にとっても強い毒性を発揮するため、その生成・蓄積は、 ほぼ感染部位とその周辺細胞に限られることが知られている(瓜谷ら、2001)。TLC 解析により、非病原性フザリウム菌の接種によってイポメアマロンの蓄積が検出さ れたため、接種部位周辺でファイトアレキシン生合成へ至る病害抵抗反応が起きて いることは確実である。さらに、発光の2次元解析から、ほぼ接種部位でのみ発光 が観察された結果と併せると、ファイトアレキシン生合成へ至る一連の病害抵抗反 応が、極微弱発光の発生に関与すると考えられる。発光を病害抵抗反応の指標とし て利用する場合に、発光強度の推移に加えて、波長組成の変化も重要な指標になり うる。発光反応は様々なものが並行して起きていることが想定されるが、病害抵抗 反応が進行している細胞では、通常の代謝は抑制され、病害抵抗反応のための生化 学反応が優先的に起きており、発光反応も通常の発光とは異なることが期待された。 測定の結果は、定常状態や呼吸が亢進するような場面(580-630 nm が優占)に比べ て、より短い波長域の光の割合が増加しており(480-580 nm が優占)、波長組成にも 生理状態の変化が反映されていると判断できた。

第2,3節の結果から、病害抵抗反応、すなわち、病原体と植物の相互作用による 発光を検出することができた。その際、病害抵抗反応の引き金、すなわち、エリシ ターとなるのは、タンパク質(ペプチド)や脂質、糖質など病原体の構成分子や、 二次代謝産物であり、それらは病原体そのものよりも安定性や定量性に優れること から、病害抵抗反応の解析や、免疫付与のツールとして活用されている(Yamaguchi *et al.*, 2005; Garcia-Brugger *et al.*, 2006; Hossain *et al.*, 2007; Schwessinger and Ronald 2012)。そこで、第4節では、エリシターを接種源として病害抵抗反応に伴う発光の 検出を試みた。

# 第4節 エリシターで処理した植物の極微弱発光

### 1. 材料及び方法

#### 1) 極微弱発光測定装置

極微弱発光の経時変化の測定にはフォトンカウンター(PCX-100 浜松ホトニク ス)を使用した。本装置は 240-630nm に感度を持つ光電子増倍管(R329P 浜松ホ トニクス)が,固定式のサンプルテーブル(16 サンプル)上を移動して測定を行う。 サンプルは直径 60 mm のポリスチレンシャーレ(栄研)に入れて測定した。発光の 分光測定にはフィルター分光型フォトンカウンター(MSPC II 浜松ホトニクス)を 使用した。発光の二次元イメージングには,ARGUS-50/VIM フォトンカウンティン グカメラ(浜松ホトニクス)を備えた撮像用暗箱を使用した。

#### 2) 供試植物試料の栽培・培養条件

サツマイモ (*Ipomoea batatas*'ベニコマチ')は、傷が少ない貯蔵根の φ60 mm 以上の部分から、φ50 mm、厚さ 8 mm の切片を作成し、φ60 mm のプラスティックシャーレ (栄研) に入れて 20℃,暗黒下で 12 時間エイジングしてから測定に用いた。

タバコ(*Nicotiana tabacum* 'Bright Yellow 2')は、育苗培土(宇部培土)に播種し、 温度制御ガラス温室で日中の 12 時間を 28℃,夜間を 18℃に調節して栽培した。3 週間後に鉢上げし、播種後 5~7 週目の個体を使用した。

イネ(Oryza sativa'日本晴')は、催芽後、育苗培土(宇部培土)に播種し、温度 制御ガラス温室で日中の12時間を28℃、夜間を18℃に調節して栽培した。本研究 には葉齢 5.5~7.5 の植物体(播種後 6~7 週目)を用いた。イネ培養細胞'日本晴'は、 玄米の胚から誘導して、葉緑体を持たないカルスを使用した。誘導した細胞は、改 変 N6 液体培地(Kuchitsu *et al.*, 1993:表6参照)で25℃,100 rpmで振とう培養し、 10日ごとに14gの細胞を300 mlの新鮮培地100 mlに移植継代した。

# 3) 供試エリシター

本研究では、キチンオリゴ糖(*N*-acetylchitooligosacchalide)及び、PGPF(Plant growth promoting fungi: 植物成育促成菌類)の液体培養ろ液を使用した。キチンオリゴ糖は、 イネでは 6 量体以上で明瞭な活性が認められ、1  $\mu$ M 程度からキチン応答性の遺伝 子発現を誘導し(Minami *et al.*, 1996), 100  $\mu$ M でファイトアレキシン生成を強く誘 導する(Yamada *et al.*, 1993)。本研究では、市販品で最も重合度が高い 6 量体キチ ンオリゴ糖(Hexa-*N*-acetylchitohexaose: 生化学工業)を滅菌水に溶解して使用した。

PGPF は Penicillium simplicissimum GP17-2 株(岐阜大学大学院 百町教授より分 譲)を使用した。PGPF の培養ろ液は Koike et al. (2001)の方法に従い調製した。 GP17-2 株培養ろ液のイネ培養細胞に対するエリシター活性は、フェニルアラニンア ンモニアリアーゼ遺伝子 (Os\_PALI)の発現増加で確認した(図 19)。400mlのジ ャガイモ - デキストロース液体培地(PDB)中に GP17-2 株の培養菌糸片(φ5 mm) を一つ投入した。暗所、25℃で 10日間静置培養した後、成育した菌糸マットを除い た培養物をガーゼでろ過し、その通過液をさらに孔径 0.25 µm のメンブランフィル ターでろ過滅菌した培養ろ液(約 300ml)をエリシターとして使用した。主要なエ リシター成分と推定される高分子量の糖は、およそ 5~10 mg/Lの濃度で含まれて いる(百町 私信)。溶媒対照として PDB を使用した。



#### 図 19 GP17-2 株培養ろ液で処理したイネ培養細胞における Os\_PAL1 遺伝子の発現増加

イネ培養細胞'日本晴'(培養10日目)に5%容量のPGPF エリシターを加え,2及び4時間後に 細胞を採取し,総 RNA を抽出した。アガロースゲル電気泳動後,セルロースメンブレンに転写し, Digoxigenin 抗体で標識した Os\_PAL1 プローブとハイブリダイゼーションを行った。発現シグナル は,化学発光法で検出した(上段)。総 RNA 量は泳動ゲルの臭化エチル染色で確認した。

#### 4) エリシター応答発光の測定

### ① サツマイモ

病斑, 食害痕等が認められない φ60 mm 以上の貯蔵根から, φ50 mm, 厚さ8 mm の円盤状の切片を作成し, シャーレに入れて 20 ℃, 暗黒下で 12 時間エイジングし た。その後, 1, 10, 100 μM のキチンエリシター250 μl または 50%の GP17-2 株培養 ろ液 250 μl を切片上面に塗布接種し, その直後から, 20℃でフォトンカウンター PCX-100 により極微弱発光測定を開始した。対照として, キチンエリシターでは蒸 留水, GP17-2 株培養ろ液では 50% PDB を同量処理した。全ての実験は 3 回繰り返 した。

# ② タバコ

暗所に 4 時間置いた個体の第 5~7 葉から, φ50 mm の切片を作成し, それをシャ ーレ内の蒸留水 3 ml に浮かべ, 暗所・26 ℃でクロロフィル遅延蛍光の減衰と傷口 のエイジングのため 12 時間インキュベートした。インキュベート後に, シャーレ内 の蒸留水を 100%, 20%, 5%の GP17-2 株培養ろ液, PDB, あるいは蒸留水に置換 し, 直後より 26 ℃でフォトンカウンターPCX-100 により極微弱発光測定を開始し た。全ての実験は 3 回繰り返した。

#### ③イネ

葉切片からの発光の測定には、最上位葉(第5-8葉)を使用した。暗所に4時間 置いたイネ葉の幅1 cm以上の部分10 cmから、長さ1 cm(10枚)もしくは長さ0.5 cm(20枚)の切片を作成し、蒸留水3 mlを入れたφ60 mmのプラスティックシャ ーレに葉表を上にして10枚浮かべ、暗所・26℃でクロロフィル遅延蛍光の減衰と傷 ロのエイジングのため12時間インキュベートした。インキュベート後に、溶液を3 mlの1、5、20μMのキチンエリシター溶液もしくは蒸留水に置換し、直後より26℃ でフォトンカウンターPCX-100により極微弱発光測定を開始した。同様に、100%、 50%、25%のGP17-2株培養ろ液もしくは PDB と置換し、微弱発光を測定した。

培養細胞からの発光の測定には、培養10日目の1gの細胞を含む2.85 mlの細胞 懸濁液をφ60 mmのプラスティックシャーレに分注し、終濃度0.2,1.0 μMとなる ように調整したキチンエリシター溶液150 μlを添加した。対照として蒸留水を用い た。その添加直後から、26℃でフォトンカウンターPCX-100により極微弱発光測定 を開始した。全ての実験は3回繰り返した。

エリシターに GP17-2 株培養ろ液を用いた場合は、1gの細胞を含む 2.4 mlの細胞 懸濁液に GP17-2 株培養ろ液の原液もしくは PDB で 4 倍希釈したものを 60 0 µl 添 加した(終濃度 20 %, 5 %)。対照には PDB を用いた。

#### 5) エリシター応答発光の分光解析

分光測定は 430-480 nm, 460-480 nm, 480-500 nm, 500-520 nm, 520-540 nm, 540-560 nm 及び, 560-580 nm 域について, 分光型フォトンカウンターMSPC II を用いて おこなった。各波長域に対応する透過率半値幅を持つ帯域透過フィルター(日本真 空光学)を順次光電子増倍管(R329:浜松ホトニクス)の前に挿入し,1回5秒間, エリシター添加後6時間の連続分光測定をおこなった。フィルターを通過して測定 された光子数を当該波長域におけるフィルターの透過率の平均値と光電子増倍管の 量子効率(QE)の平均値で補正した上で,測定回ごとに各波長域における発光量の 全波長域における発光量に対する割合を求めた(第1章 第3節 1.材料及び方法 7) を参照)。

# 2. 結果

#### 1) サツマイモ貯蔵根のエリシター応答発光

サツマイモ貯蔵根切片は,無処理で5光子/秒/cm<sup>2</sup>以下の発光強度だが,溶媒の蒸留水あるいは PDB の塗布で1~2時間後に10光子/秒/cm<sup>2</sup>程度の一時的な発 光増加が認められたが,速やかに低下した。エリシターとして6量体キチンオリゴ

糖を塗布すると 10 μM 以上で発光の増加が認められ, 100 μM では塗布 15 時間前後 に 80 光子/秒/cm<sup>2</sup>程度のピークが認められた(図 20 左)。

一方,50%濃度のGP17-2株培養ろ液の塗布では,PDB 塗布とほぼ同時期に2倍 程度の強度で発光ピークが認められ,同様のパターンで発光強度が低下し,測定中 を通じて2倍程度の発光強度で推移した(図20右)。



図 20 サツマイモ塊根スライスのエリシター応答発光

塊根スライス作成後,12時間エイジングした後に所定濃度の6量体キチンオリゴ糖水溶液あるいは,GP17-2培養ろ液を250μ/ノスライスで塗布し,発光をPCX-100で12時間測定した。

# 2) タバコ葉切片のエリシター応答発光

蒸留水に浮かべたタバコのリーフディスクの発光は10光子/秒/cm<sup>2</sup>未満で推移 した。蒸留水を20%以上の濃度のGP17-2培養ろ液に置換すると、置換直後に発光 の増加が認められ、ピークを形成した。100%ろ液処理では、それに加えて、処理開 始12時間過ぎから再び発光が増加し、緩やかなピークを形成した(図21)。



図 21 タバコリーフディスクのエリシター応答発光

リーフディスク作成後, 蒸留水に浮かべて 12 時間エイジングした後に所定濃度の GP17-2 培養ろ液に溶液を置換し, 直後から発光を PCX-100 で測定した。

# 3) イネ葉切片のエリシター応答発光

蒸留水に浮かべたイネ葉切片からの発光は、10光子/秒/cm<sup>2</sup>以下で推移し、漸減した。溶液を6量体キチンオリゴ糖溶液に置換すると、5µM以上の処理で溶液交換直後から発光が高まり、20µM処理区で蒸留水処理より3~4光子/秒/cm<sup>2</sup>発光が増加するピークが、0.5及び3時間後に認められた(図22)。

一方、エリシターとして GP17-2 株培養ろ液を使用した場合、葉切片では溶液交換直後及び 4~6 時間にピークを持つ非常に強い発光が認められ、原液では 500 光子/秒/cm<sup>2</sup>まで達した(図 23 左)。



図 22 イネ葉切片の6量体キチンオリゴ糖応答発光

蒸留水に 1×1 cm の葉切片を浮かべて 26 ℃, 12 時間暗黒下でインキュベートした 後, 溶液を所定濃度の 6 量体キチンオリゴ糖水溶液もしくは対照の蒸留水に交換し, 発光を PCX-100 で 12 時間測定した。



## 図 23 イネ葉切片の GP17-2 株培養ろ液応答発光

蒸留水に1×1cmの葉切片を浮かべて26℃,12時間暗黒下でインキュベートした後,蒸留水を等量の所定濃度のGP17-2培養ろ液あるいはPDBで置換し,発光をPCX-100で12時間 測定した。2次元画像は100%培養ろ液処理区で,開始8時間後からARGUS50/VIMフォトン カウンティングカメラで10分間積算して取得した。

イネの GP17-2 株培養ろ液に対する応答発光強度が極めて高かったため,高感度 カメラ(ARGUS50/VIM)による 2 次元画像の取得を試みた。葉切片は,ほぼ切断面 のみ発光していた(図 23 右)。測定終了後,葉の表面はエリシター溶液を撥いてお り,切断面のみエリシター溶液が浸透していた(図省略)。



# 図 24 葉切片の大きさによるイネの GP17-2株培養ろ液応答発光の違い

蒸留水に 1 cm×1 cm の葉切片 10 枚あるいは 0.5 cm×1 cm の葉切片 20 枚を浮かべて 26℃, 12 時間暗黒下でインキュベートした後, 蒸留水を 3 ml の 50% GP17-2 培養ろ液で置換し, 発光を PCX-100 で 12 時間測定した。

1 cm×1 cm の葉切片 10 枚の発光強度変化に比べて,同じ面積で切断部分を 2 倍に した, 0.5 cm×1 cm の葉切片 20 枚の発光強度は,増加・減少ともより急激に変化し た(図 24)。

GP17-2 株の培養ろ液に浮かべたイネ葉切片からの発光を処理開始直後からフィルター分光法により連続的に測定したところ,処理直後から発光強度の上昇に伴い,比較的長めの 590-630nm の割合の減少と 480-590nm の割合の増加が認められ,処理1時間後以降はほぼ同じ組成で推移した(図 25)。



## 図 25 イネ葉切片の GP17-2 培養ろ液応答発光の波長組成の推移

イネ葉切片(1 cm×1 cm10 枚)の処理溶液を 100%GP17-2 培養ろ液で溶液を置換した直後 から、分光型フォトンカウンターMSPC II でフィルター分光法により測定を開始した。 イネの懸濁培養細胞に6量体キチンオリゴ糖を添加すると、葉切片では殆ど応答 が認められなかった1.0 µMにおいて、添加直後と3~4時間後にピークを持つ明瞭 な応答発光が認められた(図26上左)。応答発光は0.2 µMでも認められ、遺伝子発 現等では検出が困難な微弱なエリシター応答を検出していると考えられた。

一方,GP17-2株の培養ろ液をイネ培養細胞に添加すると、培養細胞でも非常に強い応答発光が認められ、20%濃度では添加直後から発光が急増しピークを形成した後、2時間後に二つ目のピークを持つ応答発光が認められ、5%濃度では一つ目のピークは明瞭でなくなるが、2時間後にピークが認められた(図 26 上右)。



#### 図 26 イネ培養細胞のエリシター応答発光

培養 10 日目のイネ懸濁培養細胞 '日本晴' に所定濃度になるようにエリシター溶液を 5%容量 (GP17-2 培養ろ液の 20%濃度は 20%容量) で添加後, 直ちに発光を PCX-100 で 12 時間測定した。二次元画像は, 1 μMの6量体キチンオリゴ糖を添加し, 3 時間後から ARGUS50/VIM フォトンカウンティングカメラで 30 分間積算して取得した。 高感度カメラ(ARGUS50/VIM)により2次元画像を撮影すると,所々に強く発光している細胞小塊が観察された(図26下)。

イネ培養細胞の GP17-2 株の培養ろ液応答発光を処理開始直後からフィルター分 光法により連続的に測定したところ,処理直後から発光強度の上昇に伴い,比較的 長めの 590-630 nm の割合の減少と 480-590 nm の割合の増加が認められた。処理 1 時間後以降,ほぼ同じ組成で推移した後,発光強度の低下に伴い,処理前の波長組 成に近づいた(図 27)。



# 図 27 イネ培養細胞の GP17-2 培養ろ液応答発光の波長組成の推移

イネ懸濁培養細胞 '日本晴' に GP17-2 培養ろ液を 20%容量で添加した直後から, 分光型 フォトンカウンターMSPC II でフィルター分光法により測定を開始した。

## 3. 考察

微生物由来のエリシターである MAMPs には、細胞表面に存在するものの他、分 泌されるもの、微生物の細胞が崩壊するときに細胞内から放出されるものなどが知 られている(Boller and Felix, 2009)。それらは、様々なタイミングや濃度で植物細 胞に認識され、病害抵抗反応を誘起すると考えられる。しかしながら、エリシター として培養菌体から調製されたものや、試薬として購入可能なものは、実際の微生 物と植物の相互作用に比べて,高い濃度で,一斉に,多数の細胞に認識させること ができる。本研究において使用した PGP17-2 株培養ろ液あるいは,6量体キチンオ リゴ糖をサツマイモ貯蔵根切片に塗布すると,塗布直後から発光強度が急激に上昇 した。同様の傾向はタバコ葉やイネ葉,イネ培養細胞でも認められており,多数の エリシター分子が一斉に多くの細胞に認識された結果だと考えられた。また,いず れも数時間以上は対照区よりも高い発光を持続しており,発光の分光測定など,発 光特性の調査にも有利な性質と考えられた。

エリシター応答発光の発光強度の推移(発光パターン)を決める要因としては, ①植物の応答性(レセプターの有無),②エリシターが誘起する抵抗反応の種類(オ キシダティヴバーストのように早く、比較的短いものか、ファイトアレキシン生成 のように比較的長いものか),③植物試料の調製方法(エリシターが細胞に接触し やすいか)などが挙げられる。①については、塩化水銀(HgCl2)や紫外線のような、 細胞傷害の副作用として病害抵抗反応を誘導するエリシターと異なり, MAMPs は 品種特異的エリシターではないものの、非特異的ではないため、レセプターが存在 しない植物は反応できない。タバコの培養細胞では、同じ種由来であっても、誘導 や培養等の条件によってレセプターを喪失してキチンオリゴ糖に反応できなくなっ た例もある(Okada *et al.*, 2002)。②については, MAMPs はそれぞれ比較的類似し た抵抗反応を誘起するとされているが、全く同じというわけではなく、同じ種類の 抵抗反応を誘導する場合でも、タイミングが異なることもある(Denoux et al., 2008)。 本研究におけるサツマイモ貯蔵根のキチンオリゴ糖と GP17-2 培養ろ液に対する反 応ではその差が顕著であった。一方で,キチンオリゴ糖応答発光は,強度こそ違え, フザリウム菌接種に類似した発光パターンを示しており、類似した抵抗性が誘起さ れていると推察される。③については、本研究におけるイネ葉切片のサイズと切断 部位の発光への影響から明らかになったことである。同じ面積の葉をより沢山の切 片にしたことで、切断面、つまり、エリシターとの接触面積が増えて、発光の上昇

がより急激になった一方で、減衰は早く、総発光量も減った(図24)。サツマイモ 貯蔵根でのファイトアレキシン生成について報告されているように、病害抵抗反応 には病原菌の侵害を受けた細胞の近隣細胞の存在が非常に重要で、病原菌封じ込め のための物質生産や、エネルギー供給なども近隣細胞から行われている(瓜谷ら、 2001)。今回のケースでは、エリシターとの接触面積は半分だが、より大きな葉切 片で、より強く、長く続く発光が確認されており、切片サイズの調整で発光時間や 強度をある程度コントロールできると考えられる。一方で、懸濁培養細胞は、数個 から大きくても数十個程度の細胞塊でしかないため、強い発光は長くは望めない一 方で、ワックス層など持たないためエリシターと細胞の接触は非常に容易で反応は 一斉に起きると推察される。

GP17-2 培養ろ液エリシターに対するイネ葉切片及び培養細胞の応答発光の分光 解析の結果は、フザリウム菌を接種したサツマイモでの波長組成の変化と同様に発 光波長が短波長側へシフトしており、エリシターの処理で病害抵抗反応に伴う生理 変化が起きていることが推定された。

著者らのグループでは各種阻害剤を用いた薬理学的解析から、イネ培養細胞のキ チンエリシター応答発光の制御機構について明らかにした(図 28, Kageyama *et al.*, 2006を一部改変)。レセプター(CEBiP)からのシグナルが、脂質二重膜からのシグ ナル分子の切りだしからフォスファチジン酸(Phosphatidic acid: PA)の合成、タン パク質リン酸化及び脱リン酸化シグナルやカルシウムイオン Ca<sup>2+</sup>のフラックスを経 て、活性酸素生成、そして、その先の極微弱発光に至る経路が推定されている。

以上のように、エリシターで病害抵抗反応を引き起こすことで、安定的な発光(エ リシター応答発光)が得られることを明らかにし、植物の病害抵抗反応の新たな検 出方法として確立することができた。第Ⅱ章では、新規の病害抵抗性誘導物質(プ ラントアクティベーター)を選抜するため、エリシター応答発光を指標に病害抵抗 性誘導によるプライミングを迅速・簡便に検出するシステムを開発した。



図 28 キチンエリシターの受容からエリシター応答発光の放射にいたる経路(推定)

(Kageyama et al. 2006 を一部改変)

# 第Ⅱ章 エリシター応答発光の増強に基づいたプライミング 検出システムの開発

# 第1節 緒言

病原菌は植物の静的抵抗性を打破し,動的抵抗性である基礎的抵抗性(PTI)を抑 制・改変するなどして感染を成立させる(Tsuda and Katagiri, 2010)。植物病害の防 除には,病原体が侵入・繁殖し難いように環境を整えた上で,静的抵抗性や,病原 菌の感染行動の認識に関わる遺伝子の導入などにより動的抵抗性を強化した品種を 使用するか,あるいは,殺菌・静菌効果を有する化学的・生物的な殺菌剤を用いる。 これらが植物病害の主な防除策であるが,これらを補完するのが病害抵抗性誘導の 利用である。病害抵抗性誘導は,病害抵抗性品種に匹敵する防除効果を上げること も多く,病原菌の薬剤耐性の発達により,殺菌剤の効果が劣る場合にも有効である (有江・仲下, 2007)。病害抵抗性誘導は,誘導メカニズムや作用スペクトルの違い から,Systemic acquired resistance (SAR), Induced systemic resistance (ISR), Woundinduced systemic resistance (WSR)などに分類されるが,生物的/非生物的な刺激を 局所的に与えることで,全身的な保護効果を得る点で共通している(仲下・安田, 2004)。

病害抵抗性誘導の効果の本体として,当初は Pathogenesis related protein (PR protein: Görlach *et al.*, 1996; Lawton *et al.*, 1996) や,ファイトアレキシンの合成 (Iwata, 2001) などの直接誘導が注目された。これらは病害抵抗性誘導物質で直接 誘導される防御応答 (Direct defense) として考えられており,比較的高濃度 (数 mM 以上)の処理で誘導される (Thulke and Conrath, 1998)。

一方で, Direct defense を殆ど示さない濃度での前処理で, 病原菌やエリシターに 対する植物の病害抵抗反応が加速・増強するように, 植物細胞のコンディションを 整える間接的な作用がある。この作用は, リポ多糖応答性のヒト白血球の防御反応

が、インターフェロン前処理により増強される現象になぞらえて、プライミング (priming) と呼ばれている (Conrath et al., 2015)。病害抵抗性誘導により,幅広い スペクトラムで病害抵抗反応が増強される現象は早くから知られていたが (Hammerschmidt and Kuc, 1982; Stumm and Gessler, 1986), 病原菌の攻撃を受けた後 の反応であるため, Direct defense に比べると解析が遅れていた。しかし, Kauss ら が,ジャスモン酸やサリチル酸などによるプライミングで,パセリ培養細胞におけ るエリシター応答性のファイトアレキシン合成(Kauss et al., 1992a,b)が加速・増強 される現象を報告したのを皮切りに、様々な病害・虫害・環境ストレスなどに対す る抵抗反応において、プライミング活性の存在が明らかにされた(Kauss et al., 1995; Fauth et al., 1996; Katz et al., 1998; Kohler et.al., 2002; Herms et al., 2002)。 プライミ ング活性は,自然条件では,非親和性菌の感染が引き起こす干渉作用として観察さ れるほか、根圏微生物による ISR の主要な作用としても認められている(Pieterse et al., 1996, 1998)。さらに, このプライミング活性は, SAR であればサリチル酸 (Salicylic acid: SA), ISR であればジャスモン酸 (Jasmonic acid: JA) やエチレン (Ethylene: ET) などのシグナル物質を与えた場合に加えて, 既知の分類には当ては まらない経路で抵抗性を誘導する物質(β-アミノ酪酸(β-aminobutyric acid: BABA) やピラクロストロビン(Pyraclostrobin))においても報告されている(Conrath*et al.*, 2015)。病原体の感染戦略に応じて,植物はそれぞれに異なった病害抵抗反応を示す ように進化してきたが、病害抵抗性誘導で認められる幅広い防御スペクトルは、そ れぞれの病原体のタイプに合わせて、プライミングにより、植物が本来備える抵抗 反応が増強されることによると考えられる(Zimmerli et al., 2000; Kohler et al., 2002; Conrath *et al.*,  $2015)_{\circ}$ 

病害抵抗性誘導を人為的・化学的に引き起こす農薬が、「病害抵抗性誘導剤(Plant activator /Plant defense activator)」である。商品化された初めての病害抵抗性誘導剤は日本発であり、1974年、病原菌に対する抗菌活性を示さず、病害を防ぐ物質と

してプロベナゾール (Probenazole: PBZ) が開発され,後年,その作用が病害抵抗性 誘導によることが明らかにされた(Iwata, 2001)。その後, 1996 年にアシベンゾラル S メチル (Acibenzolar-S-methyl: ASM), 2003 年にチアジニル (Tiadinil: TDL), 2009 年にイソチアニル(Isothianil)などが、病害抵抗性誘導を作用機作とする農薬とし て登録されている(Kessmann *et al.*, 1994; Tally *et al.*, 1999; 有江・仲下, 2007)。ま た,殺菌・静菌作用で農薬登録された物質の中にも,バリダマイシン A(ValydamycinA) やカルプロパミド(Carpropamid: CRP)など,実際の使用場面における効果から,病 害抵抗性誘導が明らかにされたものがあるが(Araki and Kurahashi, 1999; Ishikawa et al., 2005), それらを含めても病害抵抗性誘導剤の登録数は一般の殺菌剤に比べて非 常に少ない。その大きな理由として、病害抵抗性誘導活性を評価する効率的なスク リーニング方法がなかったことが挙げられる。病害抵抗性誘導の場合、通常の殺菌 剤開発における抗菌活性評価のような、直接的かつ簡易な評価方法が開発されてい なかったため、手間の掛かる病原菌の接種による防除効果の判定を行わざるを得な かった。近年になって,病害抵抗性誘導メカニズムに関する研究成果を基に,シグ ナル伝達因子や PR タンパク質に関するものなど,病害抵抗性誘導物質の処理で直 接誘導される遺伝子発現をルシフェリンールシフェラーゼ発光や色素蓄積に変換し て評価することで、簡便性や迅速性を高めた方法(レポータージーンアッセイ)が 試みられるようになり(Ono *et al.*, 2004, 2011; Narusaka *et al.*, 2006; Noutoshi *et al.*, 2012)、スクリーニングの効率化に道が開かれつつある。

これら,既知のいわゆる"-omics"データを活用して行われるスクリーニングが非 常にパワフルである一方,病害抵抗性誘導には未だ明らかにされていないメカニズ ムも存在する可能性は否定できない。また,これらのスクリーニングには遺伝子組 換えや,シグナル検出のための試薬添加など,結果に影響する可能性のある侵襲的 な操作を何かしら伴っている。

これに対し、本研究では、病害抵抗反応の新たな非侵襲的検出指標として、エリ

シター応答発光を見出した。エリシター応答発光は、作用機作が不明な新規物質の プライミングによる病害抵抗反応の増強を検出するのに適しており、上述のレポー タージーンアッセイとは異なるアプローチで、簡便・迅速な病害抵抗性誘導物質の 活性評価を実現できると考えた。そこで本章では、第一に、病害抵抗性誘導剤処理 によりエリシター応答発光が増強されることを、イネの植物体(葉切片)と懸濁培 養細胞を用いて実証した。さらに、各種病害抵抗性誘導物質によるプライミング作 用の検出指標としての特性を解明するため、エリシター応答発光と、各種 PR 遺伝 子発現の変動を比較解析した。そして第二に、各種植物において、エリシター応答 発光の増強を指標にして、各種抵抗性誘導物質のプライミング作用に対する検出能 力を明らかにした。その中から、スクリーニングに最適なものを選び、新規病害抵 抗性誘導骨格の探索を行い、最終的に7種類の新規骨格を得た。第三に、プライミ ングによるエリシター応答発光の増強機構について解析を行い、「プライミング検 出システム」としてのエリシター応答発光の有用性について考察した。

# 第2節 病害抵抗性誘導物質の前処理で増強されるイネのエリシター応答 発光の特性解析

# 1. 材料及び方法

#### 1) 供試植物

イネ(Oryza sativa '日本晴')は、催芽後、育苗培土(宇部培土)に播種し、温 度制御ガラス温室で日中の12時間を28℃、夜間を18 ℃に調節して栽培した。本研 究には葉齢 5.5~7.5の植物体(播種後6~7週目)の最上位展開葉を用いた。

イネ培養細胞'日本晴'は、玄米の胚から誘導した、葉緑体を持たないカルスを使用した。誘導した細胞は、改変 N6 液体培地(Kuchitsu *et al.*, 1993) で 25 ℃, 100 rpm で振とう培養し、10 日ごとに 14 g の細胞を 300 ml のフラスコに入れた新鮮培

地 100 ml に移植・継代した。

## 2) 供試エリシター

植物成育促進菌類 (PGPF) である *Penicillium simplicissimum* GP17-2 株の培養ろ液 を Koike *et al.* (2001) の方法に従って調製した。調製した培養ろ液は、冷蔵して数日 のうちに使用するか、-70 ℃に凍結保存し、使用時に 37 ℃で溶解して使用した。

## 3) 病害抵抗性誘導物質

本研究では、イネに病害抵抗性を誘導するという報告のある4種類の化合物、プ ロベナゾール(PBZ: Uchiyama *et al.*, 1973; Sekizawa, 1980),メチルジャスモン酸 (MJ: Murller-Uri, *et al.*, 1988; Nojiri *et al.*, 1996; Schweizer *et al.*, 1997a, b), カル プロパミド(CRP: Thieron and Kurahashi, 1998; Araki and Kurahashi, 1999),及び、 アシベンゾラル Sメチル (ASM: Rohilla *et al.*, 2001)を使用した。 PBZ, CRP 及び ASM は和光純薬から、また、MJ は Sigma-Aldrich から購入した。これらの抵抗性誘 導物質は、既報の使用例を参考に 20~200 µM で植物に処理した。各抵抗性誘導物 質の原体を溶媒の2% Tween20を含む N'N'ジメチルホルムアミド (DMF: 和光純 薬)に溶かし、葉切片用に 100倍,培養細胞用に 1,000倍のストック液を準備した。

### 4) 病害抵抗性誘導物質で前処理したイネのエリシター応答発光の測定

#### ①葉切片

病害抵抗性誘導剤のプライミング効果に対するエリシター濃度の影響を調査した。幅 1cm 以上のイネの葉身を 26 ℃・暗所に 4 時間以上置いた後,葉身から長さ 1 cm の切片 10 枚を切り出した。それを,直径 60 mm のプラスティックシャーレ(栄研)中の 3 ml の 20 μM ASM 溶液に浮かべ,26 ℃・暗所で前処理を開始した。12 時間後,蒸留水で 100,25 あるいは 12.5%濃度に調整した GP17-2 培養ろ液各 3 ml と

前処理液を弱光下で置換し、エリシター処理を行った。処理直後より、フォトンカ ウンターPCX-100(浜松ホトニクス)で極微弱光放射の測定を、26℃で10時間行っ た。

次に,各種抵抗性誘導物質のプライミング効果の調査を行った。同様に準備した イネ葉身の切片 10 枚を,PBZ,MJ,CRP 及び ASM の 20,100,200 µM 溶液を 3 ml 入れたプラスティックシャーレに浮かべ,前処理を開始した。前処理開始の直後よ り,フォトンカウンターPCX-100 で極微弱光放射の測定を 12 時間行った。その後, 弱光下で前処理液を GP17-2 培養ろ液原液 3 ml に置換し,直ちに測定を再開した。 全ての実験は 3 回繰り返した。

#### ②懸濁培養細胞

葉と同様に培養細胞で、病害抵抗性誘導剤のプライミング効果に対するエリシタ ー濃度の影響を調査した。培養 10 日目のイネ細胞培養物から、0.5g(生鮮重量)の 細胞を含む 1.5 mlの細胞懸濁液を直径 60 mm のプラスティックシャーレに採取し た。それに、終濃度が 20 または 200 µM になるように、PBZ のストック液を 1.5 µl 添加し、直ちに 26 ℃でフォトンカウンターPCX-100 により極微弱発光の測定を開 始した。対照として、同量の DMF を添加したものを用意した。PBZ 前処理の 4 時 間後、終濃度で 66、20 あるいは 5%となるように、前処理液の一部を等量の GP17-2 培養ろ液原液と弱光下で置換し、エリシター処理を行った。その後、直ちに極微 弱発光の測定を再開した。

前処理時間がエリシター応答発光の増強に与える影響を調査するため、同様に準備した細胞懸濁液に、終濃度 20 または 200 µM で PBZ を添加し、0、4 あるいは 8 時間、26 ℃・暗所で前処理した後、終濃度 5 %で GP17-2 培養ろ液をエリシターと して処理した。その直後から、フォトンカウンターにより 26℃で発光測定を開始し た。

最後に,各種抵抗性誘導物質のプライミング効果の調査を行った。1.5 mlのイネ

細胞懸濁液に, PBZ, MJ, CRP 及び ASM を 20, 100 あるいは 200 μM の濃度で 4 時 間前処理した後に, 終濃度 5%で GP17-2 培養ろ液エリシターを添加した。その直後 から, エリシター応答発光を測定した。全ての実験は 3 回繰り返した。

### 5) エリシター応答発光の分光解析

0.5gの細胞を含む 1.5 mlのイネ細胞懸濁液を,200 µM PBZ で4時間前処理(26℃・ 暗所)した後に,終濃度5%でGP17-2培養ろ液エリシターを添加し,26℃でエリ シター応答発光をフォトンカウンターPCX-100で測定した。分光測定は440-460 nm, 460-480 nm,480-500 nm,500-520 nm,520-540 nm,540-560 nm 及び,560-580 nm 域 について行った。各波長域について,第I章第3節1.材料及び方法7)に記述した 方法で測定値を補正し,発光ピーク前後の10点の測定値を平均し,全波長域の発光 量の合計に対する割合を求めた。処理間における波長組成の比較は,波長域ごとに, 比率を逆正弦変換した値を用いて分散分析を行った。結果は6反復の平均を示した。

# 6) エリシター応答発光と PR 遺伝子発現の比較解析

エリシター添加前に,200  $\mu$ M の PBZ, MJ, CRP あるいは ASM で 0.5 g の細胞を 含む 1.5 ml のイネ細胞懸濁液を 26℃,4 時間,暗黒下において前処理した。前処理 終了時に終濃度 5%で GP17-2 培養ろ液エリシターを添加し,その直後からフォトン カウンターPCX-100 により 26℃で発光を測定した。遺伝子発現解析のため,エリシ ター添加直前および添加 30 分後に,各処理区から細胞 45 mg(生鮮重量)を採取し, 液体窒素中で凍結・摩砕後, RNeasy® Plant Mini Kit と RNase Free DNase Kit (QIAGEN)により全 RNA を抽出した。cDNA は 500 ng の全 RNA からランダムヘキ サマーをプライマーとして Perfect Real Time<sup>TM</sup> RT-PCR kit (タカラバイオ)を用い て合成した。PR 遺伝子 mRNA の定量のため, cDNA 混合液を 40 倍希釈したものを 鋳型として, SYBR® Premix *Ex Taq*<sup>TM</sup> (タカラバイオ)を用いたリアルタイム定量
PCR 解析を Mx3000-P Real Time PCR System (アジレント) で実施した。病害抵抗反応関連遺伝子 (PR 遺伝子) として,病原菌感染時及び,イネのキチンオリゴ糖処理時の発現増加が報告されている,phenylalanine ammonia lyase ( $Os_PALI$ : X16099, Minami et al., 1989), chitinase (Cht-I: D16221, Nishizawa et al., 1993), EL2 (EL2: D64038, Minami et al., 1996) 及び,PBZ1 (PBZI: E12488, Midoh and Iwata, 1996) を 用い,それぞれの遺伝子の発現量は特異的プライマーセット (表 5)を用いて解析 した。PCR は,ポリメラーゼ活性化 95°C・10秒の後,DNA 変性 95°C・75秒, アニ ーリング・伸長 64°C・30秒を 40 サイクル行った。各遺伝子の発現量を同じサンプ ルの rice poly ubiquitin 遺伝子 (RUBQI: AF184279.1)の発現量で標準化し,相対的 発現量として以後の解析に用いた。RUBQIの発現は,全ての処理区で安定していた。 1回の PCR では,解析対象の cDNA 2 反復のほか,内部標準遺伝子と標的遺伝子の 標準曲線を作成するための cDNA 希釈系列 (50~640 ng,8 段階) と,cDNA を入れ ないコンタミネーションチェック用の溶液も同時に反応させた。RNA 抽出および発 光測定は 2 反復で行い,PCR も各 RNA サンプル当り 2 反復で行った。結果は 2 反 復の平均で示した。

遺伝子名	フォワードプライマー	リバースプライマー	増幅物 サイズ (bp)
Os_PAL1	5' AGGTCAACTCCGTGAACGAC 3'	5' AGGTCAGCCCGTTGTTGTAG 3'	192
Cht-1	5' TACAAGCGCTACTGCGACAT 3'	5' CAGCCATTGTGGGCATTACT 3'	201
EL2	5' CCTGACCTCACTGCACTTCA 3'	5' AGCTTGGCTTGATTGCTGAT 3'	227
PBZ1	5' GCCGAATACGCCTAAGATGA 3'	5' TCACCCATTGATGAAGCAAA 3'	220
RUBQ1	5' CCAGTAAGTCCTCAGCCATGGAG 3'	5' GGACACAATGATTAGGGATCACTT 3'	237

表5 定量的 RT-PCR に用いたプライマーセット





### 図 29 イネ葉切片の GP17-2 培養ろ液に対す る濃度別応答発光とASM 前処理の効果

イネ葉切片をASM あるいは溶媒に浮かべて 26℃,12 時間暗黒下でインキュベートした後, 前処理液を 100%(A),25%(B),12.5%(C)の GP17-2 培養ろ液に置換し,溶液交換直後か ら発光測定を開始した。発光測定にはフォトン カウンターPCX-100を用いた。

#### 2. 結果

#### 1) イネ葉切片におけるエリシター応答発光の増強

GP17-2の培養ろ液原液に浮かべたイネ葉片から放射される極微弱発光は、ASMの 前処理により発光の増強が認められた。しかしながら、希釈した培養ろ液の応答発 光の場合には、むしろ発光が抑制された(図29)。エリシター濃度が薄いほど増強 程度は高まるという、パセリの培養細胞を用いたプライミングに関する報告(Kauss et al., 1992a, b)とは異なった。後述するイネ培養細胞のGP17-2培養ろ液応答発光 では既報と同じく、低濃度のエリシターで増強程度が増す傾向であった。GP17-2培 養ろ液中のエリシター成分が植物体(葉)と培養細胞で異なる働きを示すことが推 測されたが、葉を用いる試験では、この結果を踏まえて培養ろ液の原液を用いた。



図 30 病害抵抗性誘導物質で前処理したイネ葉切片におけるエリシター応答発光の増強

- A:イネ葉切片を 200 µM の PBZ, MJ, CRP, ASM あるいは 1%の溶媒に浮かべて, 26℃, 24 時間発光を測定した。
- B:20~200 μM の各種病害抵抗性誘導物質の溶液にイネ葉切片を浮かべて,26℃,12 時間 暗黒下で前処理した後,前処理液を等量の GP17-2 培養ろ液原液に置換し,溶液交換直後 から発光測定を開始した。発光測定にはフォトンカウンターPCX-100 を用いた。

各種病害抵抗性誘導物質溶液にイネ葉片を浮かべて 12 時間前処理することで, その後の GP17-2 培養ろ液処理に応答して放射される極微弱発光の最高発光強度は, 最大で 1.2~1.3 倍に増強され,測定中の総発光量に明瞭な増加が認められた(図 30 B)。PBZ, CRP, MJでは 20 μM 処理による増強が最大で,ASM では 20 μM と 100 μM の効果が同程度であった。また,いずれの病害抵抗性誘導物質処理でも,最高濃 度の 200 μM では増強程度がやや低い傾向が認められた。

各種病害抵抗性誘導物質および溶媒に浮かべたイネ葉片では,極微弱光放射の明 瞭な変動は認められず(図 30 A 200 μMのみ表示),応答発光の増強は,病害抵抗 性誘導物質処理によるプライミングによると考えられた。



図 31 エリシター濃度とエリシター応答発光の増強

イネ培養細胞を所定濃度の PBZ 溶液(20,200 μM)あるいは,対照の DMF0.1%溶液で 前処理した。PBZ 前処理の4時間後,終濃度で66,20 あるいは5%となるように,前処理液 の一部を等量の GP17-2 培養ろ液原液と弱光下で置換し,エリシター処理を行った。その 後,直ちに極微弱発光の測定を再開した(図中0h)。



#### 図 32 抵抗性誘導物質の前処理時間とエリシター応答発光の増強

イネ培養細胞を所定濃度の PBZ 溶液(20,200 μM)あるいは,対照の DMF0.1 %溶液で前処理した。前処理開始から 0,4 あるいは 8 時間後に,GP17-2 培養ろ液(5 %v/v)を添加し, 測定を開始した(図中 0 h)。

#### 2) イネ懸濁培養細胞におけるエリシター応答発光の増強

イネ懸濁培養細胞では、葉切片の場合と異なって、5%程度の低濃度のGP17-2培養ろ液に対する応答発光において、病害抵抗性誘導物質の前処理による明瞭な発光 の増強が認められ、むしろ高い濃度では発光増強程度は低くなり、既報の培養細胞 のプライミングによるエリシター応答の増強と同様の傾向が認められた(図31)。

プライミングのもうひとつの特徴として,前処理時間を長くすることで,増強効 果が向上し,反応が加速 (acceleration)することが挙げられる (Kauss *et al.*, 1992a)。 エリシター応答発光でも同様の傾向が認められており,イネ懸濁培養細胞を 200 μM PBZ で処理した場合,エリシターと同時の処理でも発光の増強は認められたが,前 処理時間を設けることで,発光のピーク到達までの時間が短くなった (図 32)。ま た,同時処理では増強効果が認められなかった低濃度処理 (20 μM)でも,前処理時 間を設けることで,増強効果が現れた。

このようなエリシター応答発光の増強と加速は,供試した誘導物質全てで,20-200 µM 処理において認められた(図 33)。葉切片で認められた高濃度での増強程度の 低下はなく,いずれも 200 µM 処理で最大の増強効果が得られた。



#### 図 33 病害抵抗性誘導物質で前処理したイネ培養細胞のエリシター応答発光の増強

イネ培養細胞を所定濃度(20,100,200 µM)の PBZ, MJ, CRP, ASM 又は対照の溶媒で前 処理した。前処理開始から 4 時間後に GP17-2 培養ろ液(5%v/v)を添加し, 極微弱光測定を 開始した(図中 0h)。発光測定にはフォトンカウンターPCX-100 を用いた。

#### 3) 増強されたエリシター応答発光の波長組成

病害抵抗性誘導物質 PBZ の前処理により増加したエリシター応答発光と対照の 溶媒前処理時のエリシター応答発光の波長組成を発光ピーク付近で詳細に比較する と,発光強度では誘導剤前処理区が2倍以上も高いのにも関わらず,波長組成には 有意な差が認められず,同じ発光反応が起きていることが示唆された (図34)。



#### 図 34 抵抗性誘導物質の前処理により増強されたエリシター応答発光の波長組成

GP17-2 培養ろ液(5% v/v)によるエリシター処理の4時間前から,200 µM PBZ でイ ネ培養細胞を前処理することで,図32のようにエリシター応答発光が増加した。各波長 域で発光ピーク時の10測定点の平均をとり,波長組成比を求めた。結果は6回の試験 の平均を示した。カラム中の縦棒は標本標準偏差(±SD)を示す。対照の応答発光と, 前処理で増加した応答発光の間では,各波長域の組成比に逆正弦変換後の分散分析 で有意な差は認められなかった(p=0.01)。

#### 4) PR 遺伝子発現に対する各種病害抵抗性誘導物質の前処理の効果

PR 遺伝子の発現量は,抵抗性誘導物質の前処理を終了し,エリシター添加直前の 対照区(溶媒前処理)の値を1とした相対値で表した。ASM, PBZ, MJ あるいは CRP の4時間の前処理により, *Cht-1* 遺伝子はそれぞれ 1.32, 1.45, 0.72, 0.8 となり, また, *EL2* は 1.29, 1.57, 1.22, 1.89, *Os\_PAL1* は 0.89, 0.34, 2.11, 1.18 で, この 3 遺伝子は抵抗性誘導物質の前処理による変動が小さかった。これに対し, *PBZ1* 遺伝子は 15.09, 2.27, 15.72, 30.47 と病害抵抗性誘導物質処理に強く影響されてい た (図 35 白色カラム)。



#### 図 35 エリシター添加前(白色)及び添加後(灰色)の PR 遺伝子発現への各種病害抵抗 性誘導物質前処理の影響

イネ培養細胞を 200 μM の各種病害抵抗性誘導物質で 4 時間前処理した後に, GP17-2 培養ろ液エリシターを添加した。エリシター添加直前(白色)及び添加 30 分後(灰色)にサン プルを採取し, PR 遺伝子の発現を定量的 RT-PCR で解析した。

ー方,エリシター添加 30 分後における PR 遺伝子の発現量は,溶媒前処理区では, PBZI で 3.19, EL2 で 1.93, Cht-I で 1.18, Os\_PALI で 1.09 と,全体に発現増加は少 なく,殆ど発現が変動していない遺伝子もあった。これに対して,各種病害抵抗性 誘導物質の前処理区では,Os\_PALI 遺伝子発現における PBZ 前処理の場合を除い て,溶媒前処理区における発現量を上回った(図 35 灰色カラム)。中でも,PBZI は, ASM, PBZ, MJ, CRP の前処理により,それぞれ 69.21, 12.24, 136.4, 154.81 と大 きく増加しており,エリシター添加無しでの発現レベルを考慮しても,病害抵抗性

誘導物質処理による明瞭な増強が認められた。

# 5) エリシター添加後の増加分から求めた PR 遺伝子発現とエリシター応答発光の増強程度の比較

PR 遺伝子発現は、対照の値、エリシターに応答した値、プライミング状態でエリ シターに応答した値を、全て同じもの(特定遺伝子の mRNA 量)に基づいて求めて いるのに対して、極微弱発光に関しては、少なくとも対照の定常時とエリシター応 答時とは性質が異なる。そのため、遺伝子発現のように対照に対する相対値で示す ことできず、プライミング活性による増強程度を遺伝子発現と直接比較するのは困 難である。そこで、エリシター応答発光と比較するために便宜的に、エリシター処 理後の PR 遺伝子発現量の増加分を求め、病害抵抗性誘導物質前処理区の値を溶媒 前処理区の値で割り算した値を増強程度とした(図 36)。その結果を見ると、EL2 遺 伝子は、CRP の前処理により対照の溶媒前処理に比べて 2.7 倍に増強された他は、 1.1~1.5 倍と変化が小さかった(表 6)。Cht-1 遺伝子 は 4.2~6.6 倍で 4 種類の誘導 物質により同程度に増強された。これに対して、PBZ1 遺伝子は MJ および CRP の 前処理により 55 倍以上に増強されたが、ASM では 24.7 倍、PBZ では 4.6 倍で、増 強程度は誘導物質ごとに大きく異なった。Os\_PAL1 遺伝子は MJ の前処理による増 強が 50.1 倍と顕著である一方、CRP で 9.6 倍、ASM で 2.9 倍、PBZ では 2.3 倍と, 誘導物質ごとに大きな差が認められたが、PBZI 遺伝子とは傾向が異なった。

エリシター応答発光の増強程度は、図 33 中の 200 µM 処理の結果から算出した。 エリシター応答発光は、4 種類の誘導物質の前処理により、ピーク到達時間が約 2 時間後から1時間後に一様に早まり、さらに最大発光強度の増強程度はそれぞれ対 照の 2.7~3.4 倍で、作用性の異なる誘導物質のプライミング活性にもかかわらず、 増強が同程度に認められた(表 6)。



#### 図 36 エリシター応答反応の増強程度の算出(上段:遺伝子発現,下段:発光)

防御関連遺伝子発現の増強程度は、図中の A を B で割った値を用いた。なお、防御 関連遺伝子の発現量は、対照の「エリシターー」の値を1とする相対値で示した。遺伝子 発現増加量(A, B)は「エリシター+」の値から「エリシターー」の値を引いたものである。 エリシター応答発光の増強程度は図中 C を D で割った値を用いた。なお、エリシター処理 後の発光増加量(C, D) は、ピーク発光量とエリシター添加直前(図中 0h)の発光量の差 分である。

	相対的増強程度	<sup>a)</sup> と溶媒前処理	目におけるエリシ	ター添加後の増	自加 <sup>b)</sup>
前処理	<sup>c)</sup> Os_PAL1	EL2	Cht-1	PBZ1	極微弱発光
PBZ	2.3ª)	1.1	6.6	4.6	3.3
MJ	50.1	1.5	5.6	55.1	2.7
CRP	9.6	2.7	5.4	56.8	3.2
ASM	2.9	1.3	4.2	24.7	3.4
溶媒	(0.09) <sup>b)</sup>	(0.93)	(0.18)	(2.19)	(22.79)

表 6 病害抵抗性誘導物質のプライミング活性に基づくエリシター応答の増強効果

a) 表中の増強程度は、図 35 の方法で算出した。抵抗性誘導物質で前処理した細胞における、エリシター 処理後の遺伝子発現および極微弱発光の増加分の値を、前処理していない細胞での増加分の値で割っ た比を示す。 遺伝子発現を調査した同じサンプルで発光を測定した。

b)エリシター処理後の各種遺伝子発現の増加分は、対照における同じ遺伝子のエリシター添加直前の値を 1とする相対値を用いた。発光の増加分はエリシター処理後のピーク発光量からエリシター無添加の場合 の発光量を引いた値(単位は光子数/秒/cm<sup>2</sup>)。

c)イネ培養細胞は 200µM PBZ, MJ, CRP あるいは ASM で前処理し, 4 時間後に GP17-2 培養ろ液エリ シター(5 %v/v)を添加した。

#### 3. 考察

プライミングは病原体の接種後に始めてその効果が明らかになるため、病害抵抗 性誘導処理による PR タンパク質の直接的な発現増加などに比べて研究が進んでい なかった (Conrath et al., 2015)。しかしながら、病害防除効果そのものではく、病原 体やエリシターに対して植物が示す、個々の応答反応に注目することで、プライミ ングに関する精密な研究が進められるようになった (Kauss et al., 1992a,b; Katz et al., 1998)。本節では、著者らが発見したエリシター応答発光が、各種の病害抵抗性誘導 物質の前処理により、エリシターが誘導する各種 PR 遺伝子の発現増強と並行して 増強されることを見出し、プライミングの指標として利用可能であることを明らか にできた。また、PR 遺伝子は、通常 Direct defense の指標に用いられることもあり、 PAL や PBZ1 など一部の遺伝子では、プライミングが検出できるものの、直接的な 誘導が顕著で、病害抵抗性誘導物質の種類により発現程度に大きな差が認められる 傾向があった。これに対して、エリシター応答発光は、作用性が異なると考えられ る各種の病害抵抗性誘導物質の処理により、明瞭かつ似通ったレベルで増強され、 様々なタイプの病害抵抗性誘導を対象にしたスクリーニングに適した特性を持つこ とを明らかにした。

これに加え、同じエリシターに対する応答発光の増強を植物体と培養細胞で比較 することで,発光反応だけでは見えない両者のエリシター応答の差異が発見された。 葉切片において GP17-2 培養ろ液エリシターが誘導する応答発光には、ASM 前処理 による応答発光の増強に関してエリシター濃度の影響が強く認められ、希釈したエ リシターでは応答発光が抑制された(図 29)。この結果を GP17-2 の培養ろ液が複数 のエリシター成分の混合物であること(Koike et al., 2001)に照らして考えると, GP17-2 培養ろ液は、大量に存在して、ASM の作用で植物の応答が抑制されるエリ シター成分と、量は比較的少ないものの、ASM によって応答が増強されるエリシタ ー成分の両者を含有し、後者の濃度が一定の閾値を越えると、発光全体として ASM による応答発光の増強が顕在化するケースが想定される。Hossain et al. (2007)は, GP17-2 培養ろ液で処理したシロイヌナズナにおける病害防除効果が,部分的にサリ チル酸依存であるものの、大部分はそれ以外(ジャスモン酸/エチレン)の作用に よるとしている。個々のエリシター成分が誘起する抵抗反応の詳細や, ASM 処理と の相互作用については明らかにされていないが、イネ葉切片で観察されたエリシタ ー応答発光の変動は, GP17-2 培養ろ液が誘導する抵抗反応の多面性を反映している と考えられる。一方で、懸濁培養細胞では、より低濃度の培養ろ液処理でも、ASM 処理により発光が抑制されることは無かった。このことから、葉に分化した細胞で はじめて発現するレセプターからのシグナルが、葉において ASM 処理で抑制され る GP17-2 培養ろ液応答発光に関与する可能性が推察される。

さらに、イネ葉切片では、いずれの抵抗性誘導物質も 20 μM の処理で発光の増強 を示したものの、100 μM 以上の濃度では、増強程度はむしろ低下する場合も認めら れた(図 30)。例えば、サリチル酸とジャスモン酸は、それぞれ Direct Defense を誘 導する高濃度では、その生合成から、下流のシグナル伝達まで明瞭な拮抗を示すが (Niki *et al.*, 1998)、プライミングのみ示すような低濃度では、拮抗が認められない (Mur et al., 2006)。ここでは、エリシターが誘起する病害抵抗反応が、高濃度の病害抵抗性誘導物質処理による Direct Defense と拮抗している可能性が考えられる。

一方, イネ懸濁培養細胞の GP17-2 培養ろ液応答発光は, 供試したいずれの病害 抵抗性誘導物質 (ASM, PBZ, MJ, CRP) の前処理によっても増強効果が認められ, その効果は少なくとも 20~200 µM の間では濃度依存的に上昇した (図 33)。エリシ ター成分が培養細胞に誘導するエリシター応答発光は, 少なくともサリチル酸系と ジャスモン酸系の異なる 2 種類のシグナル伝達経路の抵抗性誘導により増強され, かつ,葉で認められたプライミングよりもダイナミックレンジが広いことが示され, 病害抵抗性誘導活性に関する化合物ライブラリーのスクリーニングに好適であると 考えられた。

GP17-2 培養ろ液は, 調製後4 ℃で冷蔵し, 数日内で使用するか, 1回使用分ごと に小分けして-70 ℃で冷凍保存し, 解凍して使用したが, 凍結保存後に発光誘導活 性が著しく低下するケースが認められた(図 37)。大量の化合物のスクリーニング のためには, エリシターの性状が安定している必要がある。

そこで,第3節では,汎用的な病害抵抗性誘導物質の高効率スクリーニングシス テム構築のため,各種植物の培養細胞を用いて,エリシター応答発光を指標として, 各種病害抵抗性誘導物質のプライミング活性を評価した。



図 37 GP17-2 培養ろ液の凍結保存によるエリシター活性の低下

## 第3節 各種植物培養細胞における病害抵抗性誘導物質によるプライミ

ング活性のエリシター応答発光を指標とした検出

#### 1. 材料及び方法

1) エリシター

エリシターは、論文等で当該植物における活性が明らかにされており、基礎的抵抗反応を引き起こすものとして、生物由来の Microbe associated molecular patterns

(MAMPs)を用いた。イネ(Kuchitsu *et al.*, 1993) とコムギ(Ortmann *et al.*, 2004) には6量体キチンオリゴ糖(生化学工業),ブドウ(Busam *et al.*, 1997)には酵母エ キス(Difco),また,ジャガイモ(Nakane *et al.*, 2003)には,アラキドン酸(Sigma-Aldrich)を使用した。キチンは20µM,酵母エキスは20mg/mlで滅菌蒸留水に溶解 し,懸濁培養細胞の5%量を添加した。アラキドン酸は2mMでDMFに溶解し,懸 濁培養細胞の1%量を添加した。

なお、イネで使用するキチンエリシターについては、比較的低濃度(μM オーダ ー)で ROS 生成と密接に関係しながら発光を誘導し、SAR 経路、WSR 経路に関与 する病害抵抗性誘導物質の前処理で、エリシター応答発光が増強されることを確認 している(Kageyama *et al.*, 2006; 影山ら, 2007)。

#### 2) 供試培養細胞

イネ(*Oryza sativa*)は、'金南風'KI株 12gを 100mlの改変 N6 液体培地(Kuchitsu *et al.*, 1993,表7)で25℃,120 rpm,暗黒条件で振とう培養し、培養 9~10 日後の 懸濁培養細胞を使用した。

コムギ (*Tritichum aestivum*) は'ハルユタカ'HY-1 株を用い,細胞 5gを 100 mlの コムギ用 LS 培地 (表 7) に移し,25℃,120 rpm,暗黒条件で振とう培養し,培養 13~14 日後の懸濁培養細胞を試験に供試した。

ブドウ(Vitis vinifera)は、'Baily Alicante B'RPC00004VW株5gをブドウ用LS培

77

地(表7)100 ml 中で25 ℃,120 rpm,暗黒条件で振とう培養し,培養14日後の懸 濁培養細胞を使用した。

また,ジャガイモ (Solanum tuberosum) については'Lisera'PC1018 株を用い,細胞 10gを100mlの4X培地 (Gamborg et al., 1968,表7)に移し,20℃,120rpm,暗 黒条件で振とう培養し,培養14日後の懸濁培養細胞を使用した。

rt 八昌/m m/l )	イネ用	コムギ用	ブドウ用	ジャガイモ用
໙分重(mg/L)	改変 N6	改変 LS	改変 LS	4X
無機塩類	_	-		
$(NH4)_2SO_4$	463			134
$NH_4NO_3$		1650	1650	
KNO <sub>3</sub>	2830	1900	1900	2500
KH <sub>2</sub> PO <sub>4</sub>	400	170	370	
H <sub>3</sub> BO <sub>3</sub>	1.6	6.2	6.2	3
MnSO <sub>4</sub> ·4H <sub>2</sub> O	4.4	22.3	22.3	10
ZnSO₄·7H₂O	1.5	8.6	8.6	2
KI	0.83	0.83	0.83	0.75
Na₂MoO₄·2H₂O	0.05	0.25	0.25	0.25
CuSO <sub>4</sub> ·5H <sub>2</sub> O	0.005	0.025	0.025	0.025
CoCl <sub>2</sub> ·6H <sub>2</sub> O		0.025	0.025	0.025
CaCl <sub>2</sub> ·2H <sub>2</sub> O	0.005	440	440	150
MgSO <sub>4</sub> ·7H <sub>2</sub> O	166	370	370	246
FeSO <sub>4</sub> ·7H <sub>2</sub> O	185	27.8	27.8	
Na₂-EDTA	5.56	37.3	37.3	
Fe-EDTA	7.41			
FeNaEDTA				36.7
NaH₂PO₄·2H₂O				169.57
ビタミン類	-		1	
酒石酸鉄				
ミオイノシトール	100	100	100	100
	0.5			1
	0.5	-	-	1
チアミン-HGI	0.1		I	10
<u></u> 	2			
<u></u> ショ糖	30000	30000	30000	20.000
ホルモン				
2,4-D	1	1	0.2	2
NAA				0.5
IAA				0.5
カイネチン				0.2
рН	5.8	5.8	5.8	5.6

# 表 7 懸濁細胞培養に用いた培地の組成

#### 3) 病害抵抗性誘導物質

既報の病害抵抗性誘導経路に関係する物質を供試した(図 38)。プロベナゾール (PBZ), アシベンゾラル S メチル (ASM), チアジニル (TDL), カルプロパミド (CRP), β-アミノ酪酸 (BABA) は, 残留農薬分析用の標準品を和光純薬から購入 した。メチルジャスモン酸 (MJ), ブラシノライド (Brassinolide: BL) は Sigma-Aldrich から購入した。BABA は滅菌水に, その他の病害抵抗性誘導物質は 2 % Tween20 を 含む N'N'ジメチルホルムアミド (DMF: 和光純薬)に溶解し, 終濃度の 1,000 倍濃 度のストック液を調製した。0.5 g (生鮮重量)の細胞を含む 1.5 ml の細胞懸濁液に, 1.5 µl の抵抗性誘導物質ストック液をエリシター処理の 2 時間前に添加し, 前処理 した。全ての抵抗性誘導物質は 20 と 200 µM で処理し, その濃度でエリシター応答 発光の増強が不明瞭な場合には, 20 と 200 µM の間の濃度やそれより高い 500 µM の処理も行った。また, エチレン (ET: ジーエルサイエンス) は, 機器分析用の標 準ガスを密閉容器中の雰囲気に 10 ppm で混入し, 細胞懸濁液をエリシター処理前 に 24 時間暴露した。



#### 図 38 各種病害抵抗性誘導経路と関連する物質

(カッコ内は供試した物質名)

#### 4) 極微弱発光測定

エリシター応答発光の経時的測定には,240~630 nm に感度を有する R329P 光電 子増倍管を備える浜松ホトニクス社製のフォトンカウンターMSPC I を使用した。

#### 5) 病害抵抗性誘導物質のプライミング効果によるエリシター応答発光と

#### ROS 生成

本章第2節では、イネ懸濁培養細胞に GP17-2 培養ろ液が誘起するエリシター応 答発光は、各種病害抵抗性誘導物質の前処理により、病害抵抗反応関連遺伝子(PR 遺伝子)発現と共に増強されることを明らかにしているが、本現象がその他の植物 でも認められるかを調査した。

コムギ,ブドウ及びジャガイモのそれぞれで,0.5g(生鮮重量)の細胞を含む 1.5 mlの細胞懸濁液を直径 60 mm のプラスティックシャーレに採取し,細胞を 200 μM ASM (ジャガイモは 20 μM) で処理し,直ちにフォトンカウンターで極微弱発光の 測定を行った。ASM 処理の 2 時間後に,エリシターを所定の濃度で添加し,極微弱 発光の測定を再開した。エリシター処理 1 時間後に各種培養細胞における ROS 生 成あるいは,PR 遺伝子発現の解析を行った。コムギについては,影山ら (2007 b) の方法で ROS である過酸化水素の生成量と PAL2 遺伝子の発現量を調査した。PR 遺 伝子の解析は,本章第 2 節 1.材料及び方法 6) の方法に従い行った。供試したプラ イマーセットは表 8 に示した。また,ブドウについては Chit4c 遺伝子,ジャガイモ は StrbohB 遺伝子を対象に発現量解析を行った。

発光の増強程度の算出のため、エリシター添加サンプルの発光量からエリシター 無添加サンプルの発光量を差し引いて、エリシター添加後5時間の積算発光量を求 めた(図39)。抵抗性誘導物質前処理区の積算発光量を、溶媒前処理区(対照)の積 算発光量で除してエリシター応答発光の増強程度を算出した。

植物種*	遺伝子 名	機能	フォワードプライマー	リバースプライマー	増幅物 (bp)
コムギ	PAL2	フェニルアラニ ンアンモニアリ アーゼ	5' CAAGTCGATTGAGCGTGAG 3'	5' GCGCTCTGGACATGGTTAG 3'	336
	ACT1	アクチン (内部標準)	5' CCTCATGCCATTCTTCGTTT 3'	5' GCAGTCTCCAGCTCCTGTTC 3'	176
ブドウ	CHIT4c	クラス 4 キチナーゼ	5' TGCCTTGTGGTATTGGATGA 3'	5' TTGACAGCAGCAGTGTTTCC 3'	114
	Act2	アクチン (内部標準)	5' TCCTTCGTCTTGACCTTGCT 3'	5' ACGGAATCTCTCAGCTCCAA 3'	245
ジャガイモ	StrbohB	NADPH オキシダーゼ	5' GTGAGCCTCCAACTGGTGAT 3'	5' CCAATGCCAAGGCCTACTAA 3'	163
	EF-1α	伸長因子 (内部標準)	5' ACCAAGGCTGCTCAGAAGAA 3'	5' TATTTTGCCACCGTCTGTCA 3'	217

表 8 エリシター応答遺伝子発現解析に使用したプライマーセット

\*イネ用は第2節表5に記載





エリシター応答発光からベースライン発光(水処理)の値を引いた積算発光 (斜線部:キチン添加後 5 時間)を求め,抵抗性誘導物質前処理(A)を溶媒 前処理(B)で除して増強程度を算出した(増強程度=A/B)。

#### 6) 各種抵抗性誘導物質のプライミング効果によるエリシター応答発光の増強解析

イネ,コムギ,ジャガイモ及びブドウの培養細胞を用いて,抵抗性誘導メカニズ ムが異なる各種抵抗性誘導物質(図38)によるエリシター応答発光の増強の違いを 解析した(図39)。

各種植物について 0.5 g の細胞を含む 1.5 ml の細胞懸濁液をプラスティックシャ ーレに採取し,所定の方法で各病害抵抗性誘導物質を細胞に添加した。所定の前処 理時間の後,エリシターを所定の濃度で添加し,直後から極微弱発光をフォトンカ ウンターにより測定した。抵抗性誘導物質の前処理及び極微弱発光測定は,ジャガ イモは 20 ℃で,また,その他の3 植物は 25 ℃で行った。

#### 2. 結果

# 1) 病害抵抗性誘導物質のプライミング効果によるエリシター応答発光と ROS 生成・ PR 遺伝子発現の増強解析

6 量体キチンエリシター1 μM で処理したコムギ培養細胞では,処理数分後と 2~ 3 時間後にピークを持つ二相性の発光増加が確認され,ASM の前処理により,明瞭 な増強が認められた(図 40 左)。エリシター添加の 1 時間後に ROS 生成量を評価 したところ,キチン応答性の ROS 生成が ASM の前処理により明瞭に増強されてお り(図 40 右),同様に,PR 遺伝子の PAL2 の発現増加も確認された(図省略)。ASM の抵抗性誘導によりコムギの病害抵抗反応が増強されている状態で,エリシター応 答発光の増強が起きていることが確認された。



#### 図 40 ASM のプライミング効果によるエリシター応答発光と ROS の増強(コムギ)

コムギ培養細胞におけるエリシター応答発光の増強(左)と ROS 生成の増強(右)。 ASM200 μM(溶媒 0.1%DMF)で2時間前処理した後,エリシターとして6量体キチンを1.0 μM(対 照 滅菌水)で添加。エリシター添加1時間後の時点(▼印)で ROS 生成を評価した。

酵母エキスエリシター1 mg/ml で処理したブドウ培養細胞では, 処理数分後と1~ 2 時間後にピーク(肩)を持つ二相性の発光増加が確認され, ASM の前処理により, 明瞭な増強と発光時間の延長が認められた(図 41 左)。エリシター添加の1時間後 に酵母エキス応答性のキチナーゼ遺伝子(*Chit4c*)発現量を評価したところ, ASM の前処理により明瞭に増強されていることが確認された(図 41 右)。



#### 図 41 ASM のプライミング効果によるエリシター応答発光とPR 遺伝子の増強(ブドウ)

ブドウ培養細胞におけるエリシター応答発光の増強(左)と病害抵抗反応関連遺伝子(キチナ ーゼ遺伝子: *Chit4c*)発現の増強(右)。ASM200 μM(溶媒 0.1%DMF)で 2 時間前処理した後, エリシターとして酵母エキスを 1.0 mg/ml(対照 滅菌水)で添加。エリシター添加 1 時間後の時点 (▼印)で遺伝子発現を解析した。

アラキドン酸エリシター20μM で処理したジャガイモ細胞では,処理の4~6時間 後にピークを持つ弱い発光増加が認められたが,ASM の前処理により明瞭な増強と 発光増加時間の延長が認められた(図42左)。エリシター添加の6時間後に アラキ ドン酸応答性の NADPH オキシダーゼ遺伝子 (*StrbohB*) 発現量を評価したところ, ASM の前処理により明瞭に増強されていることが確認された(図42右)。

以上のように、イネと同様に、コムギ、ブドウ及びジャガイモにおいても ASM の 病害抵抗性誘導効果により、エリシター応答発光のプライミングが認められること が判明した。



#### 図 42 ASM のプライミング効果によるエリシター応答発光とPR 遺伝子の増強(ジャガイモ)

ジャガイモ培養細胞におけるエリシター応答発光の増強(左)と病害抵抗反応関連遺伝子 (NADPHオキシダーゼ遺伝子: *Strboh*B)発現の増強(右)。ASM20 μM(溶媒 0.1%DMF)で2時 間前処理した後,エリシターとしてアラキドン酸を 20 μM(対照 1%DMF)で添加。エリシター添加 6時間後の時点(▼印)で遺伝子発現を解析した。

# 2) 各種抵抗性誘導物質のプライミング効果によるエリシター応答発光 の増強解析

試験結果をまとめて表9に示した。SAR 経路に作用する物質は,全ての植物種で エリシター応答発光を増強させた。ジャガイモでは,各種物質の200 μM 処理で発 光の抑制が認められたが,20 μM で良好な増強を示した。一方,WSR/ISR 経路に 作用する MJ は,200 μM 処理でイネにおいて良好な増強を示し,コムギ,ジャガイ モでも低濃度で増強が認められたが,ブドウでは200~20 μM で,酵母エキスエリ シターに対する応答発光を抑制した(図43)。同じくWSR/ISR 経路に作用するエ チレン(ET)は,10 ppm・24 時間の前処理で,イネ,コムギ,ジャガイモにおいて 発光を増強させたが,ブドウでは発光を抑制した(図43)。

近年明らかになった,BDR 経路に作用するブラシノライド(BL)は,200 μM 処 理でジャガイモ,ブドウにおいて発光を増強させたが(図 43),イネ,コムギでは 明瞭な変動が認められなかった。また,近年,アブシジン酸(Abcisic acid: ABA)が 関与する誘導経路に作用することが明らかになってきた BABA は,イネ,ジャガイ モヘの 500 μM 処理で増強が認められたが (図 43), ブドウ, コムギでは明瞭な変化 が認められなかった。以上のように, 各種の病害抵抗性誘導物質による, エリシタ ー応答発光の増強に関するデータが得られ, 複数の植物種 - エリシターの組み合わ せを用いることで, いずれの病害抵抗性誘導経路の活性も検出できた(表 9, 図 43)。

物質	抵抗性誘導 のタイプ	イネ	コムギ	ジャガイモ	ブドウ
ASM	SAR	10.7	2.4	3.2 <sub>(20 µM)</sub>	5.6
SA	SAR	3.7	3.1	1.7 <sub>(20 µM)</sub>	1.8
TDL	SAR	5.1	2.1	2.3 <sub>(20 µM)</sub>	2.2
PBZ	SAR	12.5	4.4	2.0 <sub>(20 µM)</sub>	4.2
MJ	WSR/ISR	2.8	1.3 <sub>(66.7 µM)</sub>	<b>3.0</b> (50 µм)	0.3
ET	WSR/ISR	1.6	1.8	1.7	0.2
BL	BDR	1.0	0.9	1.5	3.3
BABA	未知	1.7 <sub>(500 µM)</sub>	1.1	1.5 <sub>(500 µM)</sub>	1.0

表9 各種抵抗性誘導物質の前処理(2 h・200 µM)によるエリシター応答発光の変動

・表中の数字はエリシター応答発光の変動(X=1.0:変動なし、1.1<X:増強、X<0.9:抑制)。</li>

・病害抵抗性誘導物質の濃度が 200 µM 以外の場合は表中(X µM)で表示。

・使用したエリシター(イネ及びコムギ:6量体キチン 1 µM, ジャガイモ:アラキドン酸 20 µM, ブドウ:酵母エキス 1 mg/ml)。

・エチレン (ET) は、ガスで 10ppm・24 h 処理。



図 43 各種病害抵抗性誘導物質の前処理によるエリシター応答発光の変動(抜粋)

#### 3. 考察

本スクリーニングシステムの特徴として、方法に示したとおり、非常に簡便なこ とがあげられるが、24時間処理する ET を除けば、前処理から判定終了まで半日か からず終了する迅速性においても他の方法(接種試験:1~数週間、マイクロアレイ: 2~3日、レポーターアッセイ:1日)に対して優位にある(表 10)。

作用する誘導経路	処理形態	濃度	前処理時間
SAR	有機溶媒希釈	200µM 以下	2 時間以上
WSR/ISR(MJ)	有機溶媒希釈	200µM 以下	2 時間以上
WSR/ISR(ET)	ガス	10ppm	~24 時間
BDR	有機溶媒希釈	200µM 以上	2 時間以上
BABA-IR	水希釈	500µM 以上	2 時間以上

表 10 病害抵抗性誘導物質の処理方法

また,表9に示したように,ジャガイモは供試した総ての抵抗性誘導物質が持つ プライミング活性を,エリシター応答発光の増強として検出することができたが, 他の3種の植物ではそれができなかった。その上,ジャガイモにしても,BLとBABA によるエリシター応答発光の増強程度は十分でなく,かつ,SAR経路の抵抗性誘導 物質による増強程度も,他の植物よりやや低かった。このように,いずれか1種類 の植物種で全ての誘導経路に対応することは困難と考えられ,誘導経路に応じて検 出感度が高い植物種を選ぶことにより,高感度な検出が実現できる。

一方,抵抗性誘導物質の種類によっては、それぞれの植物種で評価に好適な処理 濃度が異なる場合があった。病害抵抗性誘導物質には副次的な効果も知られており、 植物種によっては比較的低濃度でも生育を阻害する場合もある。複数の植物種によ るスクリーニングシステムを採用することで、そのリスクを軽減した評価が可能に なると思われる。 興味深いことに、WSR/ISR(化合物:MJ,ET)に関しては、イネ、コムギ、ジ ャガイモでは、エリシター応答発光の増強を認めたが、ブドウでは非常に低濃度か ら逆に抑制が認められた。この現象の原因については未解明であるが、作用未知の 物質について WSR/ISR か、それ以外の抵抗性誘導経路に作用するかを判別する手 段に利用できる可能性がある。

以上のように,主要な複数の作物種で病害抵抗性誘導物質のスクリーニングシス テムを作成したが,中でもイネとキチンエリシターの組み合わせは,BDR の活性検 出は出来なかったものの,それ以外については,対応する病害抵抗性誘導物質の濃 度レンジが広く,増強程度も高かった。イネとキチンエリシターの組み合わせを軸 に,適宜,他の植物種を併用することで,汎用性の高いスクリーニングシステムが 構築可能である。そこで,第4節では,農薬原体供給企業の協力を得て,イネとキ チンエリシターの組み合わせによる化合物ライブラリーのスクリーニングを行い, 植物体での病原体接種検定と組み合わせて,実際に病害抵抗性誘導物質の選抜を試 みた。

# 第 4 節 イネ培養細胞のエリシター応答発光の増強を指標とする病害抵 抗性誘導物質の探索

#### 1. 材料及び方法

#### 1) 供試化合物

協力企業 A が合成した化合物群の中から,病害抵抗性誘導が期待される化合物 群 A グループ 1,006 剤及び,協力企業 B が合成した中から,殺虫・殺菌・除草効 果などが認められないか,極めて低い化合物を選び出し,さらに構造的特徴の重 複が少なくなるように選抜された化合物群 B グループ 7,941 剤を用いた。A グル ープは 5000 ppm 水和剤(協力企業 A で製剤), B グループは 2% Tween20 を含有 する N'N'ジメチルホルムアミド(DMF:和光純薬)に 5000 ppm で溶解したもの をストック液とした。

#### 2) イネ培養細胞のエリシター応答発光の増強を指標とした選抜

改変 N6 液体培地(Kuchitsu *et al.*, 1993)で10日間振とう培養したイネ培養細胞・金南風、2.5gを含む培養物 5.94 mlを φ60 mm のプラスティックシャーレ(栄研)に採取した。それに,終濃度 50 ppm になるよう,化合物のストック液を 60 µl 添加・混合し,その2時間後にエリシターとして 4~20 µM の6量体キチンオリゴ糖(生化学工業)300 µl を添加して(終濃度 0.2~1 µM),エリシター応答発光を測定した。対照として,化合物処理では原体を含まない製剤成分(A グループ)もしくは2% Tween20を含有する DMF(B グループ)を,また,キチンエリシター処理では蒸留水を同量処理した。二相性のキチンエリシター応答発光の特徴と異なる発光を示したものを除き,既存の病害抵抗性誘導剤であるアシベンゾラル-S-メチル(ASM:和光純薬)200 µM の前処理による発光増加量の29%以上の発光増加が認められた化合物を選抜した(図 44)。この選抜基準を設

定したのは、病害抵抗性誘導活性を持つ既存の殺菌剤の中で、比較的エリシター 応答発光の増強が穏やかなカルプロパミドが、平均でこの程度の発光増加を示 すためである。また、一般にエリシター濃度が低いほうがプライミングによるエ リシター応答の増強程度が大きくなるが、抵抗性誘導活性が弱めの場合は、エリ シター濃度を高めたほうが、プライミングを検出しやすくなるため(図 45、ASM 20 µM 以下)、活性が弱い化合物まで幅広く選抜すること目的とした B グループ では、終濃度 1 µM でキチンを添加した。

#### 3) イネを用いた植物検定(A グループ)

直径 9 cm の止水可能な白磁鉢に水稲育苗用土(くみあい宇部粒状培土, JA 全 農)を詰め, 湛水後, 1.5 葉期の水稲品種'愛知旭'(いもち病抵抗性遺伝子 Pi-a) を 3 株ずつ 4 カ所に移植し, ガラス温室内で維持した。移植から約 2 週間後(2.5 葉期)に候補化合物の水和剤を, 有効成分濃度が 10 アールあたり 300 g になる ように, 一鉢あたり, 200ppm の希釈液 10ml(製剤約 0.4g)を水面施用した。水 面施用の 3 週間後(4~5 葉期), イネいもち病菌(レース 007)の分生胞子懸濁 液(1×10<sup>6</sup> cells/ml)を噴霧接種し, 接種 5 日後に接種時の最上位葉の病斑数を調 査した。2 回の試験で連続して, 対照の水処理に対して, 平均で防除価 75 以上 を示したものを, 病害抵抗性誘導剤の候補化合物として選抜した。

#### 4) キュウリを用いた植物検定(Bグループ)

直径9 cmのポリ鉢に園芸培土(ナース・豊土,(株)ホーチ・アグリコ)を詰め, 25 ℃・暗所・湿室で一晩催芽したキュウリ品種'霜知らず地這い'種子を3粒/鉢 で播種し,底面給水によりガラス温室内で維持した。子葉展開後に,化合物を100 ppmの濃度で子葉の表裏に綿棒で塗布し,3日間の誘導期間後,キュウリ炭疽病 菌(*Colletotrichum orbiculare*)の分生胞子懸濁液(1×10<sup>6</sup> cells/ml)を噴霧接種し た。その後,25℃で24時間暗所・湿室に置いたのち,25℃・16時間蛍光灯照明 下で維持し,本葉第一葉の発病面積率を調査した。試験は1薬剤に対し2鉢で行っ た。対照の溶媒前処理に対して平均で防除価75以上を示した化合物について,同 じ方法で再試験を行い,再び防除価75以上を示した化合物を,最終的に病害抵抗 性誘導剤の候補化合物として選抜した。



#### 図 44 キチンエリシター応答発光の増強程度の算出

キチンエリシター応答発光からベースライン発光(水処理)の値を引いた積 算発光(斜線部:キチン添加後 5 時間)について,候補化合物前処理の値 (A)から溶媒前処理の値(B)を引いて発光増加量を求めた。その発光増加 量が,200 μM ASM の前処理による発光増加量の 29 %以上の値を示した 化合物を選抜した。



#### 図 45 エリシター処理濃度によるプライミング検出力の違い

図 44 の方法により 1.0 µM と 0.2 µM のキチンエリシター処理で 200~4 µM の ASM 前処理(2 時間)によるプライミングを検出した。図中の数字(%)は, 200 µM 処理に対する発光増加の割合(%)を示す。

#### 2. 結果

エリシター応答発光を指標とした1次スクリーニングの結果,供試した8,947剤 の化合物から、2,309剤の化合物(選抜率25.8%)を選抜した(表11)。Aグループ から選抜した456剤のうち、117剤についてイネを用いた植物検定を行った結果、 48剤が高い抵抗性誘導活性を示し、構造相関解析の結果、抵抗性誘導活性を有する 5種類の新規骨格が得られた(表12)。

一方, B グループから選抜した 1,853 剤についてキュウリを用いた植物検定を行った結果, 21 剤が高い誘導活性を示し,構造相関解析の結果,抵抗性誘導活性を有する 2 種類の新規骨格を発見した(表 12・図 46)。

以上の結果から, 8,947 剤のスクリーニングの結果, 抵抗性誘導活性を有する新規 骨格7種類が得られた。

供試化合物数選抜数選抜率(%)化合物群Aグループ100645645.33化合物群Bグループ7941185323.33計8947230925.81

表 11 イネのキチンエリシター応答発光の増強を指標にした一次スクリーニング結果

表 12 植物検定による 2 次クリーニング結果

	供試化合物数	選抜数	新規骨格数*
イネ(いもち病)	117	48	5
キュウリ(炭疽病)	1853	21	2
計	1970	69	7

\*構造・活性相関解析により、選抜された化合物間で共通する骨格を割り出した。



溶媒前処理



#### 選抜化合物前処理

#### 図 46 選抜された候補化合物の効果(抜粋)

病原菌接種7日後のキュウリの様子。溶媒前処理(左),選抜化合物前処理(右)。 発病面積率の評価は接種4日後に実施。

#### 3. 考察

プライミングによる病害抵抗反応の増強は、病害抵抗性誘導物質とエリシターの 協力作用である。これまでの報告では、エリシター濃度は比較的薄く、PR 遺伝子発 現も殆ど誘導しないレベルが好適だとされている(Kauss *et al.*, 1992a)。エリシター 応答発光でも、同様の傾向は認められ、200 μM の ASM でイネ培養細胞を前処理し た場合、0.1~10 μM の 6 量体キチンオリゴ糖エリシターでは、0.1 μM で最も増強程 度が高かった(影山ら、2007)。しかし、新規骨格の探索の場合は、後の構造最適化 による効果の向上を見込んで、比較的低い活性でも選抜することがある。そこで、 より低い濃度 4~200 μM の ASM で細胞を前処理した場合の 0.2 及び 1.0 μM のキチ ンエリシター応答発光増強を比較したところ、1 μM のエリシター濃度でより低濃度 の ASM の活性を検出できた(図 45)。比較的弱いプライミング活性を検出するに は、エリシターによる刺激をやや強めにするのが有効だと考えられた。このことを 考慮して、弱い抵抗性誘導活性を検出したい化合物群 B のスクリーニングでは、キ チンエリシターの処理濃度は 1.0 μM とした。

近年,病害抵抗性誘導剤の開発効率化のために様々な手法が考案されているが, 中でも,レポータージーンアッセイは,通常の遺伝子発現解析を遥かに超える簡便 性を実現している(鳴坂,2008)。レポータージーンアッセイでは,プライミングで はなく,誘導物質処理で直接発現変動する遺伝子プロモーターを使用するため,解 明が進んでいる病害抵抗性誘導にのみ対応する。一方で,本研究によるエリシター 応答発光の増強を用いれば,既知の誘導メカニズムには当てはまらないものまで検 出できる可能性が高い。実際に,プライミング活性を持つが,誘導経路が未知なピ ラクロストロビン(Herms *et al.*,2002)などの処理でも,発光の増強を確認している (伊代住ら,2008)。

協力企業の化合物ライブラリーについて, プライミング活性化合物のスクリーニングを実施した結果は, ライブラリーの一次スクリーニングとしては高めの選抜率

96

となった。A グループ化合物は,既知の病害抵抗性誘導物質の構造をもとに合成展 開したライブラリーのため,予め選抜率が高くなることが予想された。また,B グ ループが,多様な骨格の中から新規の活性骨格を得ることを目標としていたため, 比較的活性の弱いものも取りもらさないように,選抜ラインを ASM による増強の 29%以上としたことも影響した。本研究においては,イネとイネいもち病菌,キュ ウリとキュウリ炭疽病菌の組み合わせでそれぞれ接種試験を行い,最終的に,合計 7種類の新規活性骨格を得ることができた。異なる植物種あるいは病原体を用いる ことで,別の選抜結果が得られる可能性は高く,エリシター応答発光の増強により 選抜した候補化合物は,プライミング活性を示す化合物群を集めた2次ライブラリ ーとして活用できる。

今回のスクリーニングでフォトンカウンターの原価償却分を除くランニングコ ストを試算したところ,1剤当たり233円(人件費は1人分)となり,ハウス内等 で植物体への接種を行う従来法のランニングコスト600円(同 ライブラリー提供 企業の試算による)と比べて安く実施できた。また,1回の測定に要した時間は, 準備時間を含めて合否判定まで8時間程度で(図47),1〜数週間かかる従来法 に比べて短時間で済んだ。このように,エリシター応答発光の増強を指標として, 汎用性・簡便性(安価)・迅速性を備えたプライミング活性物質の選抜方法が作成で きた。



#### 図 47 作成したプライミング活性化合物選抜方法

本方法は、第3節で述べたように既知の病害抵抗性誘導経路について幅広く対応 するだけでなく、解析が進んでいない未知の誘導経路にも対応していると考えられ る。本方法の指標であるエリシター応答発光については、第I章で述べたとおり、 発光メカニズムの解析を進めているが、一方で、発光増強のメカニズム解析は、残 された課題である。そこで、第5節では、近年明らかにされつつあるプライミング メカニズムに関する知見をもとに、イネ培養細胞のキチンエリシター応答発光の増 強メカニズムの解析を試みた。

## 第5節 イネ培養細胞のキチンエリシター応答発光の増強におけるサ

#### リチル酸経路の役割

#### 1. 材料及び方法

#### 1) 懸濁培養細胞

イネ懸濁培養細胞は'金南風'を使用した。1 mg/L の 2,4-D を含む改変 N6 液体培地 (Kuchitsu *et al.*, 1993) で 25℃, 暗所, 120 rpm で振とう培養し, 10 日ごとに 15 g を新鮮培地に植え継いだ。病害抵抗性誘導剤及びエリシター添加にあたっては, 培 養 10 日目のイネ懸濁培養細胞から, 培養細胞 0.5 g (生鮮重量) と 1 ml の液体培地 を採取して, 直径 35 mm のプラスティックシャーレ (イワキ) に分注した。

#### 2) RNAi による Os WRKY45 遺伝子の特異的発現抑制

イネにおいては、近年、SA 依存性の全身獲得抵抗性(Systemic acquired resistace: SAR)が確認され、転写因子である OsWRKY45(WRKY45)が極めて重要な役割を 果たすことが明らかにされている(Shimono *et al.*, 2006; Iwai *et al.*, 2007)。一方で、 イネの病害抵抗反応における SA シグナル伝達経路は OsWRKY45 ともう一つ、双子 葉植物の SAR において決定的な役割を持つ NPR1(Non-expressor of PR-1)のイネホ モログである OsNPR1 (NH1)を介する経路に分岐する(Sugano *et al.*, 2010; Takatsuji *et al.*, 2010)。しかしながら、イネにおいて、SAR 誘導剤である ASM 処理で正の制 御を受ける病害抵抗反応に関する遺伝子の大半は OsWRKY45 依存性で、OsNPR1 依 存性の遺伝子は主に ASM により負の制御を受ける光合成関連遺伝子などであり (Sugano *et al.*, 2010; Nakayama *et al.*, 2013)、OsWRKY45 をノックダウンすること

#### ① RNAi コンストラクトの作成

*OsWRKY45* (AK066225) 特異的な RNAi ベクターは Gateway の pENTR/D-TOPO ク ローニングキット (Invitrogen) と pANDA ベクター (Miki and Shimamoto 2004; Miki *et al.*, 2005) 奈良先端大 故島本教授より分譲) により作製した。*OsWRKY45* 遺伝子

で、イネのキチン応答発光の増強における SAR の関与を明らかにできると考えた。
の cDNA 断片(トリガー配列 309 bp, 5'-GGACACGGGCCGGGTAAAACGATCGAAA GAAGATGGATTCCACGCGTGTGTACAGAAATAATTAGCGGCAGCGCGGATCTTAAT TTGGAACTTGCAAAGATACTCCTAATTAGCCTGGCTAGATTAGTTTGTAAATTCCTT GTTGATGTCGTCTCAGCTTTAAGCTGCAGACATGCTAGCAAGTAACAACACGAT TAGTACGTAGTAATGTGGTTCTTGATTATGAGCTGGGGGGTCTTAACCTTTTTGTGT GACAAGCAAGAGAAGAGGATTTGGGTACAATGTAATCCTGTTCTTCCGCTTTCGA-3') はダイレクショナルクローニング用のプライマーセット (forward 5'-CACCGGACACGGGCCGGGTAAAACGATCGAAAGA-3'及び reverse 5'-TCGAAAGCG GAAGAACAGGATTACATTGTACCCA-3')を用いて PCR により増幅した。増幅した トリガー配列の pENTR/D-TOPO への組込みと大腸菌(One Shot TOP10®: サーモフ ィッシャーサイエンティフィック)への導入は、pENTR/D-TOPO クローニングキッ トの説明書に従い行った。カナマイシン耐性を指標に選抜したクローンの中で目的 の配列を有するものを増殖し、エントリークローンを得た。エントリークローンを 制限酵素 Nrul で消化し、フェノール-クロロフォルム抽出及びエタノール沈殿で精 製した。150 ng のエントリークローンを 150 ng の pANDA ベクター, 0.5 μl の Topoisomerase I (プロメガ) と混合し, TE バッファー (pH8.0) で 8 µl に調整した 後, 2 μl の LR clonase enzyme mix II (サーモフィッシャーサイエンティフィック) を加えて 25 ℃, 一晩インキュベーションし, LR クローニング反応により, pANDA ベクターに OsWRKY45 断片を組込み、 LR クローニング産物で大腸菌 (One Shot TOP10®: サーモフィッシャーサイエンティフィック) を形質転換した。 ハイグロマ イシン及びカナマイシン耐性を指標に選抜したクローンの中で, GUS リンカーを挟 んでトリガー配列が逆向きに一組挿入された目的の配列(図48)を持つものを大量 増殖し、pANDA-OsWRKY45-RNAiを得た。



図 48 イネ培養細胞 OsWRKY45-RNAi 系統の作出

#### ②形質転換イネ培養細胞の作出

pANDA-OsWRKY45-RNAi ベ ク タ ー を 導 入 し た Rhizobium radiobacter (Agrobacterium tumefaciens) EHA105 株を用いて形質転換イネ培養細胞を作製し た。RNAiベクターを持つ EHA105 株を AB 寒天平板で 25℃・暗所・3 日間培養し, 200 ppm のアセトシリンゴン(シグマ-アルドリッチ)を含む AAM 液体培地(表 13) に OD<sub>600</sub>=0.1 程度に懸濁し接種菌液とした。7 日間培養したイネ培養細胞・金南風、 (KI 株)の培養液を除き,細胞 5 g を接種菌液に 90 秒間浸した後,直ちに菌液を 除き,滅菌ろ紙を敷いた改変 N6 平板培地上 (200 ppm アセトシリンゴン含有)に重 ならないように細胞塊を広げ,23 ℃・暗所で3日間共存培養した。共存培養後,細 胞塊を滅菌水で5回すすぎ,最後に 300 ppm のカルベニシリンを含む滅菌水で1回 すすいでから,300 ppm のカルベニシリン,50 ppm の カナマイシンを含む 100 ml の改変 N6 液体培地に細胞を移し,100 rpm・25 ℃・暗 所で7日間除菌を行い,その後は12日ごとに15g を改変 N6 培地 (2,4-D・1 mg/L, 50 ppm ハイグロマイシン含有)に植え継いだ。極微弱発光測定及び RNA 抽出には, 培養 10 日目の細胞を用いた。これらの細胞系統について, RNAi のトリガー二本鎖 RNA の発現確認のため, gus リンカー配列の生成を RT-PCR により確認した。

#### 表 13 形質転換に使用した培地

_AB培地(1L:DW)	
K <sub>2</sub> HPO <sub>4</sub>	3g
NaH <sub>2</sub> PO <sub>4</sub> •2H <sub>2</sub> O	1.3g
NH₄CI	1g
KCI	150mg
CaCl <sub>2</sub> •2H <sub>2</sub> O	10mg
FeSO <sub>4</sub> •7H <sub>2</sub> O	2.5mg
01	_
Glucose	5g
Glucose	5g
pH	5g 7.2
pH (Bacto-agar)	5g 7.2 15g
Glucose pH (Bacto-agar) オートクレーヴ	5g 7.2 15g 121℃・15分
Glucose pH (Bacto-agar) オートクレーヴ *オートクレーヴ後に加用	5g 7.2 15g 121℃・15分
glucose pH (Bacto-agar) オートクレーヴ *オートクレーヴ後に加用 1M MgSO4・7H20溶液	5g 7.2 15g 121℃・15分 1.2ml

AA培地(1L:DW)		<u>AAストック(各10</u>	_AAストック(各100ml:DW)	
AA-1(×1,000)	1ml	AA-1(×1,000)	MnSO₄∙6H₂O	1,000mg
AA-2(×1,000)	1ml		$H_3BO_3$	300mg
AA-3(×1,000)	1ml		ZnSO <sub>4</sub> •7H <sub>2</sub> O	200mg
AA-4(×1,000)	1ml		Na <sub>2</sub> MoO <sub>4</sub> •2H <sub>2</sub> O	25mg
AA-5(×1,000)	1ml		CuSO <sub>4</sub> •5H <sub>2</sub> O	2.5mg
AA-6(×1,000)	1ml		CoCl <sub>2</sub> •6H <sub>2</sub> O	2.5mg
AA-7(×100)	10ml		KI	75mg
AA-8(×50)	20ml	AA-2(×1,000)	CaCl <sub>2</sub> •2H <sub>2</sub> O	15g
Casamino acids	0.5g	AA-3(×1,000)	ZnSO <sub>4</sub> •7H <sub>2</sub> O	25g
Sucrose	68.5g	AA-4(×1,000)	Fe-EDTA	4g
Glucose	36g	AA-5(×1,000)	NaH <sub>2</sub> PO <sub>4</sub> •2H <sub>2</sub> O	15g
L-Glutamine	0.9g	AA-6(×1,000)	Nicotinic acid	100mg
Aspartic acid	0.3g		Thiamine-HCI	1000mg
			Pyridoxine-HCl	100mg
pН	5.2		Myo-inocitol	10g
<u>オートクレーヴ</u>	121℃・15分	AA-7(×100)	L-Arginine	1,767mg
			Glycine	75mg
		AA-8(×50)	KCI	15g
			保存	4°C

#### 3) 病害抵抗性誘導物質および異性体

病害抵抗性誘導物質として、アシベンゾラル S メチル (ASM: 和光純薬), チア ジニル (TDL: 和光純薬), サリチル酸ナトリウム (SANa: 和光純薬)を使用した。 各種病害抵抗性誘導物質は, 2%の Tween20 (和光純薬)を含む N'N'ジメチルホル ムアミド (DMF: 和光純薬)を溶媒として, 20 mM の 100 倍ストック液を作成し, 1% (v/v) 量を培養細胞に添加した。対照は同量の溶媒を用いた。

サリチル酸の異性体である 3-ヒドロキシ安息香酸(3-HBA:和光純薬)及び 4-ヒドロキシ安息香酸(4-HBA:和光純薬)は、同様に、2% Tween20 を含有する DMFに溶解し、20 mM の 100 倍ストック液を作成した。

#### 4) エリシター処理

キチンエリシターとして 6 量体キチンオリゴ糖(*N*-acetylchitohexaose:生化学 工業)を使用した。6 量体キチンオリゴ糖は、滅菌水を溶媒として 20 μM ストッ クを作成し、終濃度で 1 μM になるように、5%量(v/v)を病害抵抗性誘導物質ま たはサリチル酸の異性体処理の 2 時間後に培養細胞に添加した。対照は同量の滅 菌水を用いた。

#### 5) 極微弱発光測定

サンプルからの発光はフォトンカウンターPCX-100 (浜松ホトニクス)を用い て、本章第2、3節に準じて測定した。直径60mmのプラスティックシャーレ(栄 研)に、培養10日目のイネ培養細胞0.5g(生鮮重量)と液体培地1mlを分注し、 病害抵抗性誘導物質の処理を行った。細胞を入れたシャーレをフォトンカウンタ ーにセットし、直ちに測定を開始した。2時間の前処理終了時に測定を一時停止 し、直ちにエリシターを添加して測定を再開した。シャーレのセット以降、全て の処理は暗所で行い、測定は26℃・3反復で実施した。各種処理におけるエリシ ター応答発光量は、キチンエリシター添加後5時間の積算光子数から水処理対照の値を差し引いた値で示した(図44)。

#### 6) 定量的 RT-PCR による Os WRKY45 遺伝子の発現量解析

培養細胞に病害抵抗性誘導物質処理を行った 2 時間後に, 生重量 50 mg の細胞 を採集した。その細胞から, RNeasy Plant Mini kit と RNase Free DNaseI (キアゲ ン)により総 RNA を抽出・精製し, 500 ng の総 RNA から Quantitect Reverse Transcription Kit (サーモフィッシャーサイエンティフィック)により cDNA を合 成した。定量的 PCR は, SYBR® Premix Ex Taq (タカラバイオ) により, Mx3000-P (アジレント)を用いて 95  $\mathbb{C} \cdot 5$  秒, 64  $\mathbb{C} \cdot 30$  秒で 30 サイクル行った。 *OsWRKY45* 遺伝子 (AK066255)の発現量は, *RUBQ1* (*Rice ubiquitin 1*; AK121590) の発現量で標準化した。プライマーは, *OsWRKY45* には, forward 5′-GAACGACGAGGTTGTCTTCG-3'及び reverse 5′-ACGCGTGGAATCCATCTTCT-3', *RUBQ1* には, forward 5′-CCAGTAAGTCCTCAGCCATGGAG-3′及び reverse 5′-GGACACAATGATTAGGGATCACTT-3′を使用した。

### 2. 結果

# 1) *Os WRKY45* 遺伝子発現を抑制したイネ培養細胞におけるエリシター応答発光の 増強

*OsWRKY45* 遺伝子発現のノックダウンが認められた系統は,野生株と外観及びハウスキーピング遺伝子(*Ubq1*)の発現で違いは認められなかった(図 49,図 50 A)。



図 49 培養 10 日目の金南風(左)と OsWRKY45-RNAi 系統(右)

溶媒前処理した OsWRKY45-RNAi 系統における OsWRKY45 遺伝子発現は, 金南風 と比較すると, 同等もしくは低いレベルであった(図 50 A 白カラム; 金南風に対す る発現割合の平均 OsWRKY45-RNAi#1:77.6%, OsWRKY45-RNAi#2:51.2)。ASM は単子葉植物及び双子葉植物で全身獲得抵抗性を誘導することが知られており (Görlach et al., 1996; Lawton et al., 1996), イネにおいて OsWRKY45 転写因子の発 現を誘導する (Shimono et al., 2007)。しかしながら, ASM で前処理した OsWRKY45-RNAi 系統における OsWRKY45 遺伝子発現は金南風よりも明らかに低く, OsWRKY45

のノックダウンが確認された (図 50 A 灰色カラム;金南風に対する発現割合の平 均 *OsWRKY45*-RNAi#1:25.9%, *OsWRKY45*-RNAi#2:44.3%)。

1 μM の 6 量体キチンオリゴ糖処理は,処理数分後と 2 時間後にピークを持つ二 相性のエリシター応答発光を誘導する(Kageyama *et al.*, 2006: 影山ら, 2007)。 *OsWRKY45*-RNAi#1 においては,キチンエリシター応答発光は金南風とほぼ同程度 であったが,*OsWRKY45*-RNAi#2 においては弱くなっていた。加えて,これらの 2 系 統では,二相目のピークが金南風よりも 1 時間遅れた(図 50 B 灰色のライン)。 *OsWRKY45*-RNAiの影響は,ASMの前処理によるエリシター応答発光の増強におい てより明瞭であった。金南風では,キチンエリシター応答発光の 5 時間積算光子数 は ASM 前処理により,溶媒前処理に比較して 339%増加した(黒色のライン 図 50 B)。 しかしながら, *OsWRKY45*-RNAi 系統では, ASM 前処理によるキチンエリシ ター応答発光の増加は明瞭に抑制された(図 50 B; *OsWRKY45*-RNAi#では-3 % OsWRKY45-RNAi#2 では 57%)。これらの結果から, ASM によるキチンエリシター 応答発光の増強への OsWRKY45 転写因子の寄与が確認された。



#### 図 50 OsWRKY45 ノックダウンによる ASM 誘導性キチンエリシター応答発光増強の抑制

(A) 金南風の野生系統とOsWRKY45-RNAi 系統はそれぞれ 200 µM の ASM (灰色 のカラム)もしくは溶媒(白色のカラム)で前処理した。前処理開始から2時間後,キチン添加 の直前に,生重量 50 mg の細胞を採取し, OsWRKY45 及び Ubq1 遺伝子発現量を定量 的 RT-PCR により解析した。gus リンカー配列 (gus)は, RNAi のトリガーニ本鎖 RNA の発 現確認のために RT-PCR により解析した。グラフ中の縦棒は標準偏差。(B)エリシター応答 発光測定は前処理開始直後(-2 h)から開始し,エリシター添加のため一時停止(0 h)した後 に再開し,その後 12 時間継続した。グラフの値は,3 回の試験の平均値を示す。

TDLはイネ用の病害抵抗性誘導剤として上市され、タバコにおいて、ASMと同様の経路で病害抵抗性シグナル伝達に作用することが報告されている (Yasuda *et* 

al., 2004; Yasuda et al., 2006)。図51に示す通り、イネ培養細胞(金南風)におい て、TDLもOsWRKY45遺伝子発現を誘導し、OsWRKY45-RNAi#1系統においては、 それが抑制されていた (図51 A 灰色カラム;金南風に対する発現割合の平均 OsWRKY45-RNAi#1:34.3%)。TDLで前処理した金南風において、キチンエリシタ 一応答発光の5時間積算光子数は、溶媒前処理から228%増加した一方で、 OsWRKY45-RNAi#1系統では78%の増加であった。以上の結果から、TDLによるキ チンエリシター応答発光の増強におけるOsWRKY45転写因子の寄与が確認され た。



エリシター添加後の時間(h)

#### 図 51 OsWRKY45 ノックダウンによる TDL 誘導性キチンエリシター応答発光増強の抑制

(A) 金南風の野生系統と OsWRKY45-RNAi 系統はそれぞれ 200 µM の TDL (灰色 のカラム)もしくは溶媒(白色のカラム)で前処理した。前処理開始から 2 時間後, キチン添加 の直前に, 生重量 50 mg の細胞を採取し, OsWRKY45 及び Ubq1 遺伝子発現量を定量 的 RT-PCR により解析した。グラフ中の縦棒は標準偏差。(B)エリシター応答発光測定は前 処理開始直後(-2 h)から開始し, エリシター添加のため一時停止(0 h) した後に再開し, その 後 12 時間継続した。グラフの値は, 3 回の試験の平均値を示す。

#### 2) サリチル酸経路によるエリシター応答発光の増強に関する解析

ASMとTDLは、SAの機能的アナログであり、SAが関与する病害抵抗性シグナル 伝達経路の下流に作用し、双子葉植物において、SARを誘導する(Lawton et al., 1996; Yasuda et al., 2006)。長い間、イネにおいては、健全葉に定常的にSAが蓄積 していることから、抵抗性誘導におけるSAの関与は明らかでなかった(Yang et al., 2004)。しかしながら、Shimono et al. (2007)が、イネにおいて、SA処理が OsWRKY45遺伝子発現を増加させること、そして、Iwai et al. (2007)は、8葉期の 生育の進んだイネの最上位展開葉へのSA処理が、病害抵抗性を誘導することなど を明らかにした。以上から、イネにおけるSAの病害抵抗性への寄与は明らかであ る。

図52に示すように、SAで前処理した金南風では、OsWRKY45遺伝子発現及びキチ ンエリシター応答発光の増強が観察される一方で、OsWRKY45-RNAi系統では、そ れらが弱まっていた(図52A;灰色カラム)。OsWRKY45-RNAi#1系統での OsWAKY45遺伝子の発現割合は金南風に対して55.4%であった。 図52B に示すよ う、SAで前処理した金南風におけるキチンエリシター応答発光の増加率は179% で、それに対して、OsWRKY45-RNAi#1系統では37%であった。加えて、図53に見 られるように天然型SAが金南風においてキチンエリシター応答発光を増強させる

(溶媒処理から156%の増加)のに対して,SAの構造異性体(3-HBA及び4-HBA) は殆ど効果を見せなかった(3-HBAにより24%,4-HBAにより10%の増加)。SA及 びその生物学的に不活性な構造異性体の間で認められる異性体効果は,SAR誘導に おける物質特異性や構造的要件などを示すためにしばしば用いられており

(Conrath *et al.*, 1995; Thulke *et al.*, 1998),本研究においてもそれが確かめられた。これらのSAシグナル伝達阻害実験の結果は、少なくともSAR誘導物質による キチンエリシター応答発光の増強では、イネに本来備わっている防御応答のホルモンシグナル伝達を必要とすることを示している。

108



図 52 OsWRKY45 ノックダウンによる SA 誘導性キチンエリシター応答発光増強の抑制

(A) 金南風の野生系統と OsWRKY45-RNAi 系統はそれぞれ 200 µM の SA (灰色の カラム)もしくは溶媒(白色のカラム)で前処理した。前処理開始から 2 時間後, キチン添加の 直前に, 生重量 50 mg の細胞を採取し, OsWRKY45 及び Ubq1 遺伝子発現量を定量的 RT-PCR により解析した。グラフ中の縦棒は標準偏差。(B)エリシター応答発光測定は前処 理開始直後(-2 h)から開始し, エリシター添加のためー時停止(0 h)した後に再開し, その後 12 時間継続した。グラフの値は, 3 回の試験の平均値を示す。





エリシター応答発光測定は前処理開始直後(-2 h)から開始し,エリシター添加のため一時停止(0 h) した後に再開し,その後12時間継続した。グラフの値は、3回の試験の平均値を示す。

#### 3. 考察

二相性の強度推移(第一相が第二相よりも短い)は、イネ培養細胞におけるキチ ンエリシター応答発光の特徴的な性質である(Kageyama et al., 2006)。イネ細胞に よるキチンの認知後、細胞内シグナル伝達因子であるフォスファチジン酸(PA)が 二相性で生成され、活性酸素種(ROS)の生成を誘導する(Yamaguchi et al., 2003; Yamaguchi et al., 2005)。著者らは、これまでにフォスフォリパーゼ D(PLD)によ り引き起こされる二相目の PA 生成を抑制することで、キチンエリシター応答発光 のニ相目の減少が引き起こされる一方で、PA の添加によりキチンエリシター応答発 光の二相目に似た発光が誘導されることを報告している(Kageyama et al., 2006)。 また、キチンエリシター応答発光の強度推移は ROS 生成と比例しており、ROS 消 去はキチンエリシター応答発光の減少を引き起こす(Kageyama et al., 2006;影山ら、 2007;加藤ら、2010)。このように、イネ培養細胞におけるキチンエリシター応答発 光は PA シグナル伝達を介して生成されており、ROS 生成と密接に関係している。

Zhan and Xiao (2015) は、"PA-ROS-SA"で構成されるシグナル増幅モジュールを 提唱している。ここでは、病原体関連分子パターン (PAMPs) もしくはエフェクタ ーの認知が第一相の ROS 及び SA 生成(認識の 0.5-2 時間後) を引き起こし、第一 相が続く第二相(認識の 2-10 時間後) を引き起こすとしている。本研究において、 SA もしくは SA の機能的アナログによる前処理はキチンエリシター応答発光を増 加させ、SA シグナル伝達の阻害はキチンエリシター応答発光の増強を弱める結果 となっており、"PA-ROS-SA"モジュールによる SA シグナル伝達経路の増強は、イ ネ培養細胞において二相性のキチンエリシター応答発光を駆動している可能性があ る。

キチンエリシター応答発光の増強が SA 及び SA の機能的アナログによって誘導 される一方で、メチルジャスモン酸やエチレンなど他の分子もイネ細胞をプライミ ングし、キチンエリシター応答発光を増強する(Kato *et al.*, 2014)。さらに、イネに

111

おけるキチン応答自体はジャスモン酸生成を伴う(Desaki et al., 2012)。こうした複 雑性を説明するには、各種 PLD 及び PLD 由来の PA が、様々な種類のホルモンシグ ナル伝達経路に組み込まれ、かつ、機能重複しながら多目的のシグナル伝達構成要 因として働くことを考慮する必要がある(Testerink and Munnik, 2006; Zhao, 2015)。 今後のエリシター応答発光増強機構の解明が、「多目的プライミング検出システム」 の開発を加速するだけでなく、植物における PLD 由来の PA と ROS によるシグナ ル伝達の複雑性を解明するのに役立つかもしれない。

## 第Ⅲ章 総合考察

#### 1. 病害抵抗性誘導によるプライミングの意義

植物の病害抵抗性のうち,代謝変動を伴う「動的抵抗性」は,「病原体の認識」に 係る部分と,「病原体に対する攻撃」に係る部分に分けられる。いずれも,病原体と 植物の長い生存競争の歴史が生んだ共進化の賜物であるが,病原体と植物の攻防に おける進化の「いたちごっこ」を生み出しているのは主に前者であり,病原体,植 物双方が決定的な武器を持った後は,それぞれ,「いかに相手に攻撃させないか」,

「いかに相手を認識し,効率よく封じ込めるか」という点で進化している (Jones and Dangle, 2006)。

病原体による妨害がある中で、PRR/R-proteinからの信号入力と、病害抵抗反応 の発動を結び付け、防御を成立させるのが、病害抵抗性誘導によるプライミングの 役割である。汎用性が高いPRRの増加や、付加的なMAPキナーゼ群、転写因子の 準備、クロマチン(ヒストンタンパク質)の改変による防御関連遺伝子群の転写に より、病原体のEffectorによる病害抵抗反応の抑制を克服する堅牢なシグナル伝達 を確立すると考えられている(Conrath *et al.*, 2015)。当該植物が病害虫を認識でき るセンサーを持っていれば、糸状菌・細菌・ウイルス病害や草食性害虫まで効果が 期待できるため(Lawton *et al.*, 1996; Mandadi and Scholthof, 2013)、病害抵抗性誘導 剤は、抵抗性品種と組み合わせ、抵抗性崩壊を抑止したり、農薬の使用量を削減し、 抵抗性病害虫の発達を防止したりするのに有効である。

また,プライミングによる病害抵抗性のエビジェネティックな改変は,栄養繁殖 ではもちろん (樋口・尾松, 2010),種子繁殖により次世代へも引き継がれるケー スが報告されており (Luna *et al.*, 2012; Slaughter *et al.*, 2012),環境ストレス応答も 含めて,複合的なストレス適応策の手段としても有効だと考えられる。

一方でプライミングは、一過的ではあるものの、汎用的な抵抗性を実現するため、

113

植物に相応のコストを強いる(Van Hulten et al., 2006)。イネにおける,ASM(BTH) による病害抵抗性誘導の例では、SAR 経路のうち、OsNPR1(NH1)依存の経路で、 ASM の処理による光合成やタンパク質合成関連の遺伝子発現の抑制が報告されて いる(Sugano et al., 2010; Nakayama et al., 2013)。そのため、寡照な条件など、一次 代謝に不利な条件では、生育抑制につながる可能性もある。WRKY45(OsWRKY45) を過剰発現する遺伝子組換えイネでは、陽光定温器内での栽培時に、環境ストレス 応答のクロストークによると考えられる下流のPR遺伝子(Pb1, PR-2)の恒常的な 発現を伴う成育抑制が認められている(Shimono et al., 2006)。この現象は通常の温 室内では認められていないが、他の環境応答とのクロストークの影響(Fujita et al., 2006; Yasuda et al., 2008; Singh et al., 2014)を含め、病害抵抗性誘導の活用において は、通常の殺菌・殺虫剤とは異なる視点が必要とされる。

#### 2. エリシター応答発光検出の意義

生物の極微弱発光現象は特定の発光器官に依存せず,その発光強度は,いわゆる 生物発光に比べて非常に弱いことから,応用のために発光源や発光のメカニズムを 解析するのに,既知の生理変化から推定することになる(渡辺・稲葉,1991a,b)。植 物の極微弱発光現象は,植物の構造的・機能的な多様性に加え,葉緑体をはじめ, 細胞内外の光や励起分子のエネルギーを蛍光に変換する色素を発達させていること から,発光源を捉えにくい(Hideg,1991;Hideg et al.,1991)。そのような中で,植物 病理学の始まりから,その生化学反応が注目されており(瓜谷,2001),発光源とし ての可能性が高いと推測された病害抵抗反応に注目し,貯蔵根や,懸濁培養細胞な ど,組織構造や色素の影響を受けにくい材料も活用しながら研究を進めた。本研究 において発見した病害抵抗反応に伴う発光は,大別して「病原体の認識」を反映す る発光と「病原体に対する攻撃」を反映する発光を捉えていると考えられる。サツ マイモ貯蔵根の非病原性フザリウム菌応答発光は,第1章第3節の結果から,前者 と後者を共に含んだものであり、キチンエリシター応答発光は、第 I 章第 4 節で述 べた発光メカニズムの解析結果(Kageyama *et al.*, 2006; Kageyama *et al.*, 2007)から、 前者であると考えられる。

Zhang and Xiao (2015) は、高濃度の MAMPs 処理によって引き起こされる強い PTI シグナルは ETI と同様のシグナル伝達モジュール(二相性の PA-SA シグナリング) を駆動するとしている。キチンエリシターや PGPF エリシターの処理において、濃 度が高まるにつれて、二相性が顕著になること(第 I 章第 4 節)は、PTI における このシグナル伝達モジュールの関与を裏付けていると推察される。また、エリシタ ー濃度の上昇につれて、プライミングによる増強程度が小さくなるのは、インプッ トが増加しシグナル強度が増高した PTI が飽和に近づいたことを示し、シグナル伝 達の実態に即していると考えられる。

Tsuda and Katagiri (2010) は、PTI と ETI では、共に SA、JA、ET などのホルモン に依存する各種抵抗性誘導経路を利用するものの、関連遺伝子の欠損変異体を組み 合わせた解析から、前者は相乗的に(synergistically:全ての誘導経路を備える野生 型の抵抗力が、それぞれ単独の誘導経路のみ有する変異体の抵抗力の合計を上回る)、 後者は補償的に(compensatory:それぞれ単独の誘導経路のみ有する変異体の抵抗力 の合計が、全ての誘導経路を備える野生型の抵抗力を上回る)利用するモデルを提 案している。それぞれの誘導経路が補償的に働く ETI は、シグナル伝達の強度と頑 健性において PTI を上回ることで、「病原体に対する攻撃」システムは PTI と同じで あるが、それをより効果的に活用していることが示されている。

各種ホルモンの機能的アナログである病害抵抗性誘導剤の処理は、シグナル伝達 の強化(エリシター応答初期では ROS の生成の増加)をもたらすもので、ETI にお ける、増強されたシグナル伝達と相似しており、エリシター応答発光とプライミン グによるその増強は、病原体の認識に関わるシグナルとその増強、即ち「病害抵抗 反応の増強」を反映していると考えられる。

115

#### 3. エリシター応答発光の増強を指標とするプライミング検出システムの特性

エリシター応答発光によるプライミング検出範囲の広さは、MAMPs をエリシタ ーとして使用したことによると考えられる。MAMPs は、複数の病害抵抗性経路を 活性化させ、それぞれの経路がお互いに synergetic に防御に寄与すること(Tsuda et al., 2009)や, 複数のレセプターに認識されている(キチンオリゴ糖: Kaku et al., 2006) ことが明らかにされている。その上, MAMPs 応答のシグナル伝達に介在する, フォ スフォリパーゼ D (PLD) によるフォスファチジン酸 (PA) 生成が, 生物的/非生 物的ストレス応答に関わる各種のホルモンシグナル伝達経路に組み込まれ、それぞ れがオーバーラップすることが指摘されており、様々なストレス応答の影響を受け やすい。このことが、単一の検出システムで、様々に異なる病害抵抗性誘導物質に よるプライミングを発光の増強として検出することにつながっていると考えられる。 例外として, 第Ⅱ章第3節で明らかにしたように, JA/ET による病害抵抗性誘導 に対して、ブドウー酵母エキスシステムにおいては、イネーキチンシステムなど他 の組み合わせとは反対に、エリシター応答発光の強い抑制が観察されているが、こ のことを逆に利用して、検出システムの組み合わせで JA/ET 経路によるプライミ ングを特定できることが期待される。このような特性も併せて、エリシター応答発 光の増強を指標とするプライミング検出システムは、機能未知の化合物ライブラリ ーを「プライミング活性」で絞り込んで、二次ライブラリーを作成するために用い る(第Ⅱ章第4節)ことで、その利点を最大限に発揮できると考えられる。

近年,病害抵抗性誘導シグナルの全身伝播を担う物質として SAR では Azelaic Acid, Pipecolic acid (Shah *et al.*, 2014), ISR では JA-Ile (Aubert *et al.*, 2015) などが発見さ れ,それら自体も病害抵抗性誘導物質として働くことが明らかにされている。これ により,新たなリード化合物および作用点の情報がもたらされ,候補化合物骨格の バラエティの拡大が予想される。今後も,このような物質の発見は続く可能性は高 く,対象誘導経路を限定しない「プライミング検出装置」の重要性が増すと考えら れる。

#### 4. ケミカルプライミングによる植物のストレス耐性の向上

生物的ストレスと非生物的ストレスに対する植物の応答は,SAR と ABA 応答の 関係のように,ネガティヴにクロストークする例が報告されている(Yasuda *et al.* 2008; Jiang *et al.*, 2010) 一方で,ストレスの種類によってはポジティヴにクロスト ークすることもある(cross-tolerance: Achuo *et al.*, 2006; Qui and Yu, 2008)。このよ うなクロストークはシグナル伝達の初期から生じていると考えられ,生物的ストレ ス応答,非生物的ストレス応答の初期で共に重要なシグナル伝達を担っている ROS の生成は,クロストークの交点にあると考えられている(Fujita *et al.*, 2006; Atkinson and Urwin, 2012; Rejeb *et al.*, 2014)。

さらに、キチンエリシター応答に介在する PLD-PA (-ROS) シグナルモジュール は、複数の非生物的ストレス応答でも介在が報告されており (Testerink and Munnik, 2006; Zhao, 2015), シグナル伝達の初期段階でのクロストークを介したエリシター 応答発光の増強を指標にして、非生物的ストレスを検出できる可能性がある。著者 らの研究グループでは、これらを踏まえ、本システムによる、生物的・非生物的(高 温・低温・塩)複合ストレス抵抗性誘導剤の選抜の可能性を検討し、一定の成果を 得ている (伊代住ら、2008)。植物のケミカルプライミングによる環境ストレス耐性 の向上は、病害抵抗性誘導と並んで注目されているものであり、今後の発展が見込 まれる領域である (Conrath *et al.*, 2015; Savvides *et al.*, 2016)。 このように、エリシ ター応答発光の利用の可能性は、今後も広がると思われる。

#### 5. 体温測定のように~植物の極微弱発光測定技術の今後

日々進歩する,測定技術とビッグデータの収集・解析技術によって形成される,

いわゆる「-omics」データベースを複数組み合わせる発想(Multi-omics)により,生物の生理を多面的に捉え,より価値の高いアウトプットを得ようとする動きが加速しており(Higdon *et al.*, 2014),本研究論文で対象とした,病害抵抗性誘導剤の開発もMulti-omicsデータの活用により発展が見込まれる分野である。

一方,極微弱発光測定技術は、今後、測定感度の向上、同時分光技術の進化とと もに、測定機器の携帯化、低価格化が進み、測定データがより手軽に、波長特性と 共に取得可能になると予測される(Cifra and Pospíšil, 2014)。前述のように、生物の 極微弱発光は非侵襲的な生体情報として、蛍光マーカーや発光レポーターを使用し た情報とは一線を画するものである。生物の極微弱発光をプロテオミクスや生化学 分析情報と併せて、植物のストレス応答解析に活用する報告も現れており(Komatsu *et al.*, 2013)、Muti-omics データの一つとして扱われることが期待される。将来的に は、Multi-omics 解析への組み込みにより、生物の極微弱発光と他の-omics データと の関係性が明らかにされることで、植物の生理状態の診断において、医療における 非侵襲的な生体情報の代表格である、体温測定と同様な存在になるかもしれない。 摘 要

1954年に植物の芽生えにおいて極微弱発光(UPE)の測定に関する最初の報告が あって以来,あらゆる生物が,特別な"発光"システムを細胞内に持たなくても発光 できることが明らかにされてきている。UPEは弱すぎて肉眼では見えないが,生化 学反応の副産物であり,特に体内・外のストレスに対する細胞の生理変化を反映す ると考えられている。1990年代より,著者とその共同研究者らは,植物の生理状態 変化を非侵襲的かつ即時的に調べる方法として,UPE測定技術を用いることを検討 し,特に植物の病害抵抗反応に注目してきた。一方,過去20~30年間の間に,植物 に全身的な病害抵抗性を誘導する物質,いわゆる"病害抵抗性誘導剤"を用いた植物 の病害抵抗性誘導剤は,植物細胞を「プライミング」し,病原体の攻撃に対する 植物の抵抗反応を加速・増強することにより効果を発現するため,この,新しいカ テゴリーの農薬の開発には,従来の殺菌剤や殺虫剤の選抜とは異なる戦略を用いる ことが必要とされている。

この課題を解決するため,第一に,著者は UPE 測定技術により非侵襲的に簡便に 測定できる病害抵抗反応指標である,植物の"エリシター応答発光(ERPEs)"を発見 した。さらに, ERPEs の増強に基づき化合物のプライミング活性を評価する,新し い「プライミング検出システム」を開発した。

# 病害抵抗反応に伴う極微弱発光の検出に適した植物試料と病害抵抗反応誘導因子の組み合わせの選定

タバコ,イネ,メロン,トマト,イチゴ,サツマイモについて,それぞれ"宿主 抵抗性"の程度が異なる病原体と品種の組み合わせにおいて UPE を測定した。野火 病菌を接種したタバコ葉では、野火病菌に対する真正抵抗性遺伝子を持つ品種にお いてのみ, 接種 12 時間後にピークを持つ一過性の UPE の増加(10 光子数/秒/cm<sup>2</sup>) が観察された。一方、つる割病菌もしくは非病原性フザリウム菌を接種したサツマ イモ貯蔵根のスライスでは、長時間持続し、強い UPE が観察された。UPE は接種の 1~2時間後から増加し始め、14~18時間後にピークを迎え、1日以上強い発光が続 いた。非病原性菌を接種した場合の最大発光量(200光子数/秒/cm<sup>2</sup>)は病原菌を接 種した場合(300光子数/秒/cm<sup>2</sup>)に比べて低く,菌糸の成育は停止した。サツマイ モで観察された UPE は両ケースとも植物の基礎的抵抗性に基づくと推測された。病 原菌を接種した場合には、植物は感染を止められず、強く発光しつづけたと推測さ れる。基礎的抵抗性に基づくと推測される UPE の増加は、タバコと立枯病菌、メロ ンとつる割病菌の組合せでも観察されたが、抵抗性と罹病性の違いが明確ではなか った。この試験では、イネとイチゴにおいて病原体接種後の明瞭な UPE の増加は認 められなかった。UPEの特性を明らかにするため、サツマイモと非病原性フザリウ ム菌の組み合わせで生じる UPE についてより詳細に解析した。UPE の強度は接種 源もしくは植物の状態に依存し、UPE がフザリウム菌との相互作用によりサツマイ モから生じていることが明らかとなった。ファイトアレキシンであるイポメアマロ ンの生成は試験中のサツマイモに病害抵抗反応が誘導されていたことを意味する。 さらに、UPE に付随する生理状態の推移を捉えるため、病害抵抗反応に伴う UPE の 連続的な分光解析を実施した。フザリウム菌の接種後 2~10 時間の間は,発光強度 の増加は緩やかであるが、波長組成は主要な波長帯が 580~630 nm から 480~580 nmの短波長側に劇的に変化した。その後,発光強度は接種後20時間前後でピーク を迎えるものの, 接種後 10~36 時間の波長組成は安定していた。ファイトアレキシ ンを含む,防御関連物質の合成に関わる生理状態変化がこの現象に寄与することが 示唆される。より安定で扱いやすい UPE 発生システムを得るため,病害抵抗反応の "エリシター"として、キチン6量体と植物生育促進菌類(PGPF)の培養ろ液を用

いた。キチンエリシターと PGPF エリシターは共に,サツマイモ貯蔵根スライス, タバコ葉,イネ葉でそれぞれ明瞭に UPE の増加を誘導した。特にイネ葉切片と PGPF エリシターの組合せにおいて,サツマイモとフザリウム菌の組み合わせで観察され たような高いレベルの UPE が波長組成変化を伴って観察された。イネの懸濁培養細 胞も PGPF エリシターの使用により強い UPE 生成し,比較的低濃度(1 µM 以下) のキチン 6 量体の処理でも明瞭な UPE 増加を示した。

# エリシター応答発光の増強に基づいたプライミング検出システムの開発

イネにおける PGPF エリシター応答性の UPE を用いて,病害抵抗性誘導剤がエリ シター応答発光(ERPE)に及ぼす影響を評価した。PGPF エリシターで処理したイ ネ葉切片は一過性の比較的強い ERPE を生じた。病害抵抗性誘導剤の前処理は ERPE を増強させた。病害抵抗性誘導剤の前処理による ERPE の増強はイネ懸濁培養細胞 でも認められた。前処理時間を延長することで,病害抵抗性誘導剤による発光増強 の加速(ピーク到達時間の短縮)と,より低濃度でのプライミング効果の発現が認 められた。病害抵抗性誘導剤の単独処理では目立った発光増強は認められなかった。 エリシター応答発光の波長組成は、増強の前後でほぼ同じであった。そのため、病 害抵抗性誘導剤は、おそらく ERPE そのものを増強している。PBZ1, Os\_PAL1, Chit-I や EL2 といったエリシター応答性の遺伝子発現は、病害抵抗性誘導剤の前処理に より増強され、同時に ERPE も増強されており、ERPE が、イネの細胞が病害抵抗性 誘導剤により防御応答のプライミングを受けた状態で増強されていることを示して いる。このプライミング検出システムは、イネとキチン 6 量体、コムギとキチン 6 量体、ジャガイモとアラキドン酸、ブドウと酵母エキスといった植物培養細胞とエ リシターの組み合わせにおいても適用可能であった。プライミングの検出は全身的 獲得抵抗性(SAR), 傷害誘導性抵抗性(WSR), 誘導性全身的抵抗性(ISR),βア ミノ酪酸誘導抵抗性(BABA-IR)及び、ブラシノステロイド依存的抵抗性(BDR) について行った。SAR を誘導する化合物によるプライミングは、試験した全ての組 み合わせで本検出システムにより検出された。イネとキチンの組み合わせでは, BDR 誘導化合物を除き,供試した化合物のプライミング活性が検出された。コムギ とキチンの組み合わせでは、BABA-IR と BDR には本検出システムは適用できなか った。ブドウと酵母エキスの組み合わせでは、BABA-IR に適用できず、WSR と ISR において ERPE の強い抑制が観察された。ジャガイモとアラキドン酸の組み合わせ は供試した全てのタイプの化合物に本検出システムを適用可能であったが、抵抗性 誘導化合物濃度の適用範囲が狭かった。供試した組み合わせの中で、イネとキチン の組み合わせが最も安定しており、適用可能な抵抗性誘導物質濃度の範囲が最も広 かった。イネとキチンの組み合わせを用いて、2セットの化合物ライブラリーのプ ライミング活性に関するスクリーニングを植物への病原体接種試験と組み合わせて 実施した。スクリーニングを実施した 8.947 化合物の中から,病害抵抗反応のプラ イミングに関する 7 種類の新しい骨格構造が発見された。ERPE の増強の基本的な メカニズムを明らかにするため、著者らはイネにおけるサリチル酸依存性の誘導抵 抗性(全身的獲得抵抗性:SAR)の主要な調節因子である OsWRKY45 遺伝子のノッ クダウンを実施すると共に、サリチル酸の異性体がキチンエリシター応答発光(C-ERPE)の増強に及ぼす影響を評価した。野生型の細胞にいては、SAR 誘導性の病害 抵抗性誘導剤により C-ERPE が 200~300% 増加した一方で, OsWRKY45 ノックダウ ンにより C-ERPE の増加は 60%未満まで弱められた。天然型のサリチル酸は野生型 の細胞において C-ERPE を 150%増加させたが、サリチル酸の構造異性体の効果は 低かった(10-24%の増加)。これらのサリチル酸シグナル伝達の破壊試験により、 C-ERPE の増強は、少なくとも SAR 誘導物質によるプライミングに関しては、植物 が本来備えている病害抵抗反応のためのホルモンシグナル伝達を必要とすることが

示された。

以上のように、本研究では、UPE 測定技術を用いることで、植物の病害抵抗性の 新奇な解析技術が開発された。本技術は、高い非侵襲性を備え、multi-omics 解析に 組み入れることで、汎用的なストレス応答解析手法への発展が見込まれる。 Studies on discoveries of elicitor-responsive photon emissions in plants and their applications for development of a defense priming detection system

### Hiroyuki Iyozumi

### Summary

Since the first report of the ultraweak photon emission (UPE) from germinating plants in 1954, there have been a lot of evidences that every organism can emit light, which is too weak to recognize by naked eyes, without specific "light emitting" systems in their cells. UPEs are thought to be by-products of biochemical reactions and to reflect physiological changes, especially to be the responses to external/internal stresses. Since 1990's, the author and colleagues have been considering to apply the UPE measurements to evaluate physiological conditions of plants non-invasively and immediately, and focused on the disease resistant responses in plants. Especially in last few decades, the induced disease resistance in plants became a practical method of crop protection, the substances that induce systemic disease resistance in plants, so-called 'plant defense activators' have been of interest. Because plant defense activators become effective by "priming" plant cells for accelerated and enhanced esistance responses against pathogens, this new category of agrochemicals needs alternative strategies for efficient screening of candidates that are different from ordinary fungicides/pesticides.

To solve this problem, firstly the author discovered the "elicitor-responsive photon emissions (ERPEs)" in plant, a type of disease resistance response marker which can be measured non-invasively and easily by UPE measurement technique. Then the author developped a 'defense priming detection system' to evaluate the priming abilities of chemicals based on potentiation of ERPEs.

# 1. Selection of favorable combinations of defense response inducers and plant materials to detect defense response-related UPEs.

Using various combinations of pathogen and plant cultivars with different degrees of "host resistance", UPEs were measured for tobacco, rice, melon, tomato, strawberry and sweet potato. Tobacco leaves, that were inoculated with the causal bacterium of wildfire disease, had transient increase in UPE (10 counts/sec/cm<sup>2</sup>) which peaked 12 hours after inoculation, only in the case of cultivars that contain a true resistance gene. On sliced sweet potato storage root that was inoculated with the causal fungus of Fusarium wilt disease or nonpathogenic F. oxysporum, long-lasting and strong UPEs were observed. The UPEs started to increase after 1-2 hours and peaked after 14-18 hours of inoculation, and a high level of UPE lasted for 1 day or longer. The peak emission was lower in the case of a non-pathogen (200 cps/cm<sup>2</sup>) than a pathogen (300 cps/cm<sup>2</sup>) and the fungal growth stopped. The UPEs in sweet potatoes were assumed to be caused by basal resistance in both cases. In the case of pathogen inoculation, it is assumed that the plant could not stop the infection and kept emitting a higher level of UPE. Although the UPE increases assumed to be caused by basal resistance were also observed in tobacco-bacterial wilt and melon-Fusarium wilt combinations, differences between the resistant and susceptible responses were not obvious. In the cases of rice and strawberry, no significant increase of UPE was observed after pathogen inoculation. To clarify the characteristics of UPE, UPE generated in the combination of sweet potato and nonpathogenic F. oxysporum was analyzed. The inoculum/plant condition-dependent intensity variation of UPE revealed that the observed UPE generated from sweet potato through the interactions with F. oxysporum. The production of ipomeamarone as a phytoalexin means that the defense response was induced in the sweet potato. The consecutive spectral analysis of defense response-related UPE was conducted to observe the process of physiological transitions accompanying UPE. Although the emission intensity increased slowly, the spectrum range changed to be shorter drastically (the major band changed from 580-630 nm to 480-580 nm) from 2 hours after inoculation until 10 hours after inoculation with F. oxysporum. The spectrum was stable from 10 to 36 hours after inoculation, whereas the emission intensity peaked approximately 20 hours after inoculation. It is suggested that a change in the physiological state associated with the synthesis of defense-related substances including phytoalexin contributes to this phenomenon. To obtain a more stable and easily-handled UPE generation system, chitin hexamer and culture filtrate of plant growth promoting fungi (PGPF) were used as defense "elicitors". Both the chitin elicitor and the PGPF elicitor induced obvious increases of UPEs in slices of sweet potato storage root, tobacco leaves and rice leaves, respectively. Especially, a high level of UPE with spectral change observed using a combination of sweet potato and Fusarium was also observed in the combination of rice leaf segments and PGPF elicitor. Suspension-cultured rice cells also generate a high level of UPE using the PGPF elicitor, and showed an obvious increase of UPE after applying a relatively low concentration (below 1 µM) of chitin hexamer, too.

# 2. Development of priming detection system based on the potentiation of elicitor-responsive photon emission

UPE from rice induced by the PGPF elicitor was measured to estimate the influence of pretreated plant defense activators on elicitor-responsive photon emissions (ERPEs). Rice leaf segments that were treated with the PGPF elicitor transiently generated relatively high levels of elicitor-responsive photon emissions. Pretreatments using plant defense activators increased ERPEs. The increase was also observed in suspension-cultured rice cells. Prolonged pretreatment allowed the plant defense activators to accelerate (peak -earlier) photon generation and to act at lower concentrations. The activators themselves did not induce any marked photon emission in rice leaf segments or cells. The spectral compositions of the increased and non-increased elicitor-responsive photon emissions from rice cells were almost the same. Therefore, plant defense activators probably potentiate the ERPEs themselves. The elicitor-responsive expression of the PBZ1, Os\_PAL1, Chit-1 and EL2 genes were enhanced by pretreatment of rice cells with plant defense activators, when ERPEs were also enhanced. The results indicate that the ERPEs are potentiated when rice cells are primed for disease resistance by plant defense activators. This priming detection system was also applicable to other plant cell culture and elicitor combinations, such as rice and chitin hexamer, wheat and chitin hexamer, potato and arachidonic acid, grape and yeast extract. The Priming detection was performed for systemic acquired resistance (SAR), wound induced resistance (WSR), induced systemic resistance (ISR),  $\beta$ -aminobutyric acid induced resistance (BABA-IR), and brassinosteroid-dependent resistance (BDR). The priming by SAR-inducing chemicals was detected by all tested combinations. The combination of rice and chitin could be applied the system to detect priming by all tested chemicals except BDR inducer. The combination of wheat and chitin was not applicable to detect priming by BDR and BABA-IR. The combination of grape and yeast was not applicable to priming by BABA-IR and showed strong repressions of ERPEs in WSR and ISR. Although the combination of potato and arachidonic acid was applicable to priming by all tested types of chemicals, the applicable range of inducer concentration was narrow. Among the tested combinations, the combination of rice and chitin was most stable and was applicable for the widest range of inducer concentration. Using the combination of rice and chitin, screening of two sets of chemical libraries for priming activities were carried out in combination with pathogen inoculation tests on potted plants. Among 8947 compounds that were screened, 7 new skeletal formulae for defense priming were discovered by these screenings. To elucidate the mechanisms underlying the ERPE potentiation, the author performed gene knockdown of *OsWRKY45*, a major regulator of salicylic acid (SA)-dependent resistance (systemic acquired resistance: SAR) in rice, and estimated the effects of SA isomers on chitin-ERPE (C-ERPE) potentiation. The SAR inducing plant defense activators induced a 200–300% increase in C-ERPE in the wild type cells, whereas *OsWRKY45* knockdown attenuated the increase in C-ERPE to less than 60%. The native SA induced more than a 150% increase in C-ERPE in the wild type cells, but structural isomers of SA were less effective (10–24% increase). These SA signaling-disruption experiments indicate that the potentiation of C-ERPE requires intrinsic components of the hormonal signaling for defense, at least for priming by inducers of SAR.

In conclusion, by using UPE measurement technique, a new type of analysis of disease resistanse in plsnts was developed in this study. This non-invasive analysis might develop as a versatile stress response analyzer when it is built in "multi-omics" analyses.

### 謝辞

本研究の推進にあたり,東京大学大学院農学生命科学研究科 植物病理学研究室 の難波成任教授には、終始、貴重な御助言を賜り、御多忙のなか本論文の御校閲を 賜った。東京大学名誉教授の日比忠明氏には、論文の作成にあたり御助言を賜っ た。浜松ホトニクス電子管事業部の杉江正美氏には,研究開始当初よりフォトンカ ウンターの製作および改良に関して一貫して担当して頂いた。また、同社中央研究 所の平松光夫博士ならびに本澤洋江氏には、研究の立ち上げにあたって御支援を頂 いた。クミアイ化学工業株式会社の故永山孝三博士、清水力博士、渡辺哲博士、高 垣真喜一氏,古瀬勝美氏ならびに、日本曹達株式会社の佐野愼亮博士,馬場康司 氏,加登恵子氏には,化合物や細胞株の提供のほか,実験への御協力,研究方針に 関するディスカッションなど、病害抵抗性誘導剤の選抜方法の確立に関する研究 で、終始御支援を頂いた。静岡県病害虫防除所元所長の牧野孝宏博士には、極微弱 発光研究に携わる機会を与えて頂いたとともに、終始御支援を頂いた。静岡県経済 農業協同組合連合会の市川健氏には、静岡県農業試験場病害虫部において、研究に 関する御指導・御支援を頂いた。また、静岡県農業試験場病害虫部(農林技術研究 所植物保護科),の皆様には,研究推進において御支援を頂いた。静岡県農林技術 研究所果樹研究センターの影山智津子博士ならびに、静岡大学農学部の稲垣栄洋教 授,静岡県経済産業部貫井秀樹主査には、病害抵抗性誘導剤の選抜方法の確立に関 して共同で研究を推進していただくと共に、本論文の作成においても日々のディス カッションを通じて貴重な御助言を賜った。そして、静岡県工業技術センター所長 の加藤公彦博士には、本研究立ち上げから、本研究に関わる三つの研究プロジェク トを通じて、一貫して熱心な御指導を頂き、論文の作成においても貴重な御助言を 頂いた。ここに記して深謝の意を表したい。

# 引用文献

- Achuo, E. A., Prinsen, E. and Höfte, M. (2006). Influence of drought, salt stress and abscisic acid on the resistance of tomato to *Botrytis cinerea* and *Oidium neolycopersici*. Plant Pathol. 55: 178–186.
- Agatsuma, S., Nagoshi, T., Kobayashi, M., Usa, H., Watanabe, H., Sekino, H. and Inaba, H. (1994). Indoxyl-β-D-glucronide, the primary emitter of low level chemiluminescence in plasma of hemodialysis patiens. Clin. Chem. 40: 1580-1586.
- Agatsuma, S., Nagoshi, T., Kobayashi, M., Usa, M., Watanabe, H., Sekino, H. and Inaba, H. (1992). Hydroxyl radical-induced characteristic chemiluminescent spectra from plasma of hemodialysis patients. Clin. Chem. 38:48-55.
- Agaverdiyev, A.S., Doskoch, Y.E. and Tarusov, B.N. (1965). Effect of low temperatures on the ultraweak luminescence of plants. Biofizika. 10:832-836.
- Ahuja, I., Kissen, R. and Bones, A. M. (2012). Phytoalexins in defense against pathogens. Trends Plant Sci.17: 73-90.
- Alvarez, M.E., Pennell, R. I., Meijer, P-J., Ishikawa, A., Dixon, R.A. and Lamb, C. (1998). Reactive oxygen intermediates mediate a systemic signal network in the establishment of plant immunity. Cell. 92: 773–784
- Araki, Y. and Kurahashi, Y. (1999). Enhancement of phytoalexin systhesis during rice blast infection of leaves by pre-treatment with carpropamid. J. Pesticide Sci. 24: 369-374.
- 有江力・仲下英雄 (2007).抵抗性誘導機構とプラントアクティベーター.植物防疫 61:531-536.
- Atkinson, N. and Urwin, P. E. (2012). The interaction of plant biotic and abiotic stresses: from genes to the field. J. Exp. Bot. 63: 3523-3543.

Abels, F. B. (1986). Plant chemiluminescence. Ann. Rev. Plant Physiol. 37:49-72

- Aubert, Y., Widemann, E., Miesch, L., Pinot, F. and Heitz1, T. (2015). CYP94-mediated jasmonoyl-isoleucine hormone oxidation shapes jasmonate profiles and attenuates defence responses to *Botrytis cinerea* infection. J. Exp. Bot. 66: 3879–3892.
- Beloussov, L., Popp, F-A., Voeikov, V. and Wijk, R.V. editors (2000). Biophotonics and coherent systems, Moscow University Press, Moscow.
- Bennett, M., Mehta, M. and Grant, M. (2005). Biophoton imaging: a nondestructive method for assaying R gene responses. Mol. Plant Microbe Interact. 18:95-102.
- Boller, T. and Felix, G. (2009). A renaissance of elicitors: Perception of microbe-associated molecular patterns and danger signals by pattern-recognition receptors. Annu. Rev. Plant Biol. 60: 379-406.
- Busam, G., Kassemeyer, H.-H. and Matern, U. (1997). Differential expression of chitinases in *Vitis vinifera* L. responding to systemic acquired resistance activators or fungal challenge. Plant Physiol. 115: 1029-1038.
- Chen, W. L., Xing, Da, Tan, Shi-Ci, Tang, Yong-Hong and He, Younghon. (2003). Imaging of ultra-weak bio-chemiluminescence and sinlet oxygen generation in germination soybean in response wounding. Luminescence, 18:37-41.
- Cifra, M. and Pospíšil, P. (2014). Ultra-weak photon emission from biological samples:definition, mechanisms, properties, detection and applications. J. Photochem.Photobiol. B: Biol. 139: 2–10.
- Colli, L. and Facchini, U. (1954). Light emission by germinating plants. Nuovo Cimento. 12: 50-155.
- Colli, L., Facchini, U., Guidotti, G., Dugnani-Lonati, R., Orsenigo, M. and Sommariva, O. (1955). Further measurements on the bioluminescence of seedlings. Experientia. 31:479-481.
- Conrath, U., Beckers, G. J. M., Langenbach, C. J. G. and Jaskiewicz, M. R. (2015). Priming

for enhanced defense. Ann. Rev. Phytopathol. 53: 97-119.

- Conrath, U., Chen, Z., Ricigliano, J.R. and Klessig, D. F. (1995) Two inducers of plant defense responses, 2,6-dichloroisonicotinec acid and salicylic acid, inhibit catalase activity in tobacco. PNAS 92: 7143-7147.
- Denoux, C., Galletti, R., Mammarell, N., Gopalan, S., Werck, D., De Lorenzo, G., Ferrari, S., Ausubel, F. M. and Dewdney, J. (2008). Activation of defense response pathways by OGs and Flg22 elicitors in Arabidopsis seedlings. Mol. Plant. 1: 423-445.
- Desaki, Y., Otomo, I., Kobayashi, D., Jikumaru, Y., Kamiya, Y., Venkatesh, B., Tsuyumu, S., Kaku, H. and Shibuya, N. (2012). Positive crosstalk of MAMP signaling pathways in Rice Cells. PLoS ONE 7: e51953.

江原淑夫 (1994). ウイルスに対する植物の応答. ウイルス 44: 55-60.

- Fauth, M., Merten, A., Hahn, M., Jeblick, W. and Kauss, H. (1996). Competence for elicitation of H<sub>2</sub>O<sub>2</sub> in hypocotyls of cucumber is induced by breaching the cuticle and is enhanced by salicylic acid. Plant Physiol. 110:347-354.
- Fawe, A., Abou-Zaid, M., Menzies, J. G. and Bélanger, R. R. (1998). Silicon-mediated accumulation of flavonoid phytoalexins in cucumber. Biochem. Cell Biol. 88: 396-401.
- Flor-Henry, M., McCabe, T.C., de Bruxelles, G.L, and Roberts, M. (2004). Use of highly sensitive two-dimensional luminescence imaging system to monitor endogenous bioluminescence in plant leaves. BMC Plant Biol. 4:19-25.
- Freeman, B. C. and Beattie, G. A. (2008). An overview of plant defenses against pathogens and herbivores. Plant Health Instruct. DOI: 10. 1094/PHI-I-2008-0226-01.
- Fujita, M., Fujita, Y., Noutoshi, Y., Takahashi, F., Narusaka, Y., Yamaguchi-Shinozaki, K. and Shinozaki, K. (2006). Crosstalk between abiotic and biotic stress responses: a current view from the points of convergence in the stress signaling networks. Curr. Opin. Plant Biol. 9: 436-442.

- Fujita, M., Oba, K. and Uritani, I. (1982). Mixed function oxygenase from cut-injured Ceratocystis fimbriata-infected sweet potato root tissues. Plant physiol. 70: 573-578.
- Gamborg, O. L., Miller, R. A. and Ojima, K. (1968). Nutrient requirements of suspension cultures of soybean root cells. Exp. Cell Res. 50: 151-158.
- Garcia-Brugger, A., Lamotte, O., Vandelle, E., Bourque, S., Lecourieux, D., Poinssot, B., Wendehenne, D. and Pugin, A. (2006). Early signaling events induced by elicitors of plant defenses. MPMI 7: 711–724.
- Gill, U. S., Lee, S. and Mysore, K. S. (2015). Host versus nonhost resistance: Distinct Wars with Similar Arsenals. Phytopathol.105: 580-587.
- Glazebrook, J. (2005). Contrasting mechanisms of defense against biotrophic and necrotrophic pathogens. Annu. Rev. Phytopathol. 43: 205-227.
- Görlach, J., Volrath, S., Knauf-Beiter, G., Hengy, G., Beckhove, U., Kogel, K-H.,
  Oostendorp, M., Staub, T., Ward, E., Kessmann, H. and Ryals, J. (1996).
  Benzothiadiazole, a novel class of inducers of systemic acquired resistance, activates
  gene expression and disease resistance in wheat. Plant Cell 8: 629–643.
- Greenberg J.T. (1996). Programmed cell death a way of life for plants. PNAS. 93:12094-12097.
- Guengerich, F. P., Sohl, C. D. and Chowdhury, G. (2011). Multi-step oxidations catalyzed by cytochrome P450 enzymes: processive vs. distributive kinetics and the issue of carbonyl oxidation in chemical mechanisms. Arch Biochem Biophys. 507: 126–134.
- 袴田哲司・加藤公彦・牧野孝宏・山本茂弘 (2004). マツノザイセンチュウを接種し クロマツから発生する微弱発光. 日植病報 70: 162-167.
- Hammerschmidt, R. and Kuc, J. (1982). Lignification as a mechanism for induced systemic resistance in cucumber. Physiol. Plant Mol. Pathol. 20:61-71.

Havaux, M. (2003). Spontaneous and thermoinduced photon emission: new methods to

detect and quantify oxidative stress in plants. Trends in Plant Science. 8:409-413.

- Havaux, M., Triantaphylidès, C. and Genty, B. (2006). Autoluminescence imaging: a noninvasive tool for mapping oxidative stress. TRENDS Plant Sci. 11: 480-484.
- Hayafune, M., Berisio, R., Marchetti, R., Silipo, A., Kayama, M., Desaki, Y., Arima, S.,
  Squeglia, F., Ruggiero, A., Tokuyasu, K., Molinaro, A., Kaku, H. and Shibuya, N. (2014).
  Chitin-induced activation of immune signaling by the rice receptor CEBiP relies on a unique sandwich-type dimerization. PNAS 111: E404-413.
- Herms, S., Seehaus, K., Koehle, H. and Conrath, U. (2002). A strobilurin fungicide enhances the resistance of tobacco against tobacco mosaic virus and *Pseudomonas syringae* pv. *tabaci*. Plant Physiol. 130: 120-127.
- Hideg, É. (1991). On the spontaneous ultraweak light emission of plants. J. Photochem. Photobiol. B: Biol. 18: 239-244.
- Hideg, É. and Inaba, H. (1991). Dark adapted leaves of paraquat-resistant tobacco plants emit less ultraweak light than susceptible ones. Biochem. Biophys. Res. Commun.178: 438-443.
- Hideg, É., Kobayashi, M. and Inaba, H. (1991). Spontaneous ultraweak light emission from respiring spinach leaf mitochondria. Biochem. Biophys. Acta 1098:27-31.
- 樋口康一・尾松直志 (2010). チアジニル粒剤のイチゴ炭疽病 (Glomerella cingulata)
   に対する防除効果. 九病虫研会報 56: 9-12.
- Higdon, R., Stewart, E., Stanberry, L., Haynes, W., John Choiniere, J., Montague, E., Anderson, N., Yandl, G., Janko, I., Broomall, W., Fishilevich, S., Lancet, D., Kolker, N. and Kolker, E. (2014). MOPED enables discoveries through consistently processed proteomics data. J. Proteome Res. 13: 107–113.
- Horo, J. T., Fujii, T., Yamashita, Y. McGoey, S. and Koizumi, S. (2016). Rice Blast Control Efficacy of Three Genes (*Pib*, *pi21*, and *Pb1*) Conferring Complete and Partial Resistance.

JARQ 50: 209-217.

- Hossain, M. M., Sultana, F., Mayumi Kubota, M., Koyama, K. and Hyakumachi, M. (2007).
  The plant growth-promoting fungus *Penicillium simplicissimum* GP17-2 induces resistance in Arabidopsis thaliana by activation of multiple defense signals. Plant Cell Physiol. 48: 1724-1736.
- Ichimura, T., Hiramatsu, M., Hirai, N. and Hayakawa, T. (1989). Two-dimensional imaging of ultra-weak emission from intact soybean roots. Photochem. Photobiol. 50 :283-286.
- Iiyama, K., Lam, T.B.T. and Stone, B. A. (1994). Covalent cross-links in the cell wall. Plant physiol. 104 315-320.
- 稲場文男, (1983). 極微弱光計測技術の医学及び生命科学への応用.光学 12: 166-179.
- Inaba, H., Shimizu, Y., Tsuji, Y. and Yamagishi, A. (1979). Photon counting spectral analyzing sysytem of extra-weak chemi-and bioluminescence for biochemical applications. Photchem. Photobiol.30:169-175.
- Inagaki, H., Imaizumi, T., Wang, G.-Xi, Tominaga, T., Kato, K., Iyozumi, H. and Nukui, H. (2007). Spontaneous ultraweak photon emission from rice (*Oryza sativa* L.) and paddy weeds treated with a sulfonylurea herbicide. 89: 158–162.
- Inagaki, H., Ishida, Y., Uhino, A., Kato, K., Kageyama, C., Iyoumi, H and Nukui, H. (2008). Difference in ultraweak photon emissions between sulfonylurea-resistant and sulfonylurea-susceptible biotypes of *Scirpus juncoides* following the application of a sulfonylurea herbicide. Weed Biol. Manage. 8: 78-84.
- Inagaki, H., Toshiyuki Imaizumi, T., Wang, G.-Xi, Tominaga, T., Kato, K., Iyozumi, H. and Nukui, H. (2009). Sulfonylurea-resistant biotypes of *Monochoria vaginalis* generate higher ultraweak photon emissions than the susceptible ones. Pest. Biochem. Physiol. 95: 117–120.
- Ishikawa, R., Shirouzu, K., Nakashita, H., Lee, H. Y., Motoyama, T., Yamaguchi, I., Teraoka, T. and Arie, T. (2005). Foliar spray of validamycin A or validoxylamine A controls tomato Fusarium wilt. Phytopathology 95: 1209-1216.
- Iwai, T., Seo, S., Mitsuhara, I. and Ohashi, Y. (2007). Probenazole-induced accumulation of salicylic acid confers resistance to *Magnaporthe grisea* in adult rice plants. Plant Cell Physiol. 48: 915–924.
- Iwata, M. (2001). Probenazole a plant defense activator. Pesticide Outlook 12:28-31.
- 伊代住浩幸・稲垣栄洋・加藤公彦・貫井秀樹 (2008). 抵抗誘導能力評価方法及び抵 抗性誘導能力評価装置. 特願 2008-84091.
- Ji, C. and Kuć, J. (1996). Antifungal activity of cucumber β-1,3-glucanase and chitinase.Physiol. Mol. Plant Pathol. 49: 257-265.
- Jiang, C. -J. Shimono, M., Shoji Sugano, S., Kojima, M., Yazawa, K., Yoshida, R., Inoue,
  H., Hayashi, N., Sakakibara, H. and Takatsuji, H. (2010). Abscisic acid interacts antagonistically with salicylic acid signaling pathway in rice-*Magnaporthe grisea* interaction. MPMI 23: 791-798.
- Jones, J. D. G. and Dangl, J. L. (2006). The plant immune system. Nature 444: 323-329.
- Kageyama, C., Kato, K., Iyozumi, H., Inagaki, H., Yamaguchi, A., Furuse, K. and Baba, K. (2006). Photon emissions from rice cells elicited by *N*-acetylchitooligosaccharide are generated through phospholipid signaling in close association with the production of reactive oxygen species. Plant Physiol. Biochem. 44: 901–909.
- 影山智津子・加藤公彦・稲垣栄洋・伊代住浩幸・古瀬勝美・馬場康司 (2007a). 病害 抵抗性誘導物質の前処理により増強される各種エリシター応答発光の特性. 日植 病報 73: 15-20.
- 影山智津子・加藤公彦・稲垣栄洋・伊代住浩幸 (2007b). イネ培養細胞からのエリシ ター応答発光に対する過酸化水素の関与について. 日植病報 73: 300-303.

- Kai, S., Ohya, T., Moriya, K. and Fujimoto, T. (1995). Growth control and biophoton radiation by plant hormones in red bean .Jpn. J. Appl. Phys. 34:6530–6538.
- Kaku, H., Nishizawa, Y., Ishii-Minami, N., Akimoto-Tomiyama, C., Dohmae, N., Takio, K.,
  Minami, E. and Shibuya, N. (2006). Plant cells recognize chitin fragments for defense signaling through a plasma membrane receptor PNAS 103: 11086-11091.
- 神頭武嗣・松浦克成・小河拓也・宇佐美俊行・雨宮・良幹(2011). 紫外光 (UV-B) 照射によるイチゴうどんこ病の防除. 植物防疫 65:28-32.
- 加藤公彦・本津洋江・伊代住浩幸・貫井秀樹 (2010). 6 量体キチンが誘導するエリ シター応答発光と過酸化水素との量的相関.日植病報 76:142-148.
- Kato, K., Iyozumi, H., Kageyama, C., Inagaki, H., Yamaguchi, A. and Nukui, H. (2014).Application of ultra-weak photon emission measurements in agriculture. J. Photochem.Photobiol. B: Biol. 139: 54–62.
- Katz, V., Thulke, O. U. and Conrath, U. (1998). A benzothiadiazole primes parsley cells for augmented elicitation of defense responses. Plant Physiol. 117:1333-1339.
- Kauss, H., Theisinger-Hinkel, E., Mindermann, R. and Conrath, U. (1992a).Dichloroisonicotinic and salicylic acid, inducers of systemic acquired resistance, enhance fungal elicitor responses in parsley cells. Plant J. 2: 655-660.
- Kauss, H., Krause, K. and Jeblick, W. (1992b). Methyl jasmonate conditions parsley suspension cells for increased elicitation of phenylpropanoid defense responses. Biochem. Biophys. Res. Commun. 189: 304-308.
- Kauss, H. and Jeblick, W. (1995). Pretreatment of parsley suspension cultures with salicylic acid enhances spontaneous and elicited production of H2O2. Plant Physiol. 108: 1171-1178.
- 川畑龍三,三池徹,上船雅義,岡部弘高,高木正見,甲斐昌一 (2004). バイオフォ トン計測による植物の食害応答の解析.応動昆 48:289-296.

137

- Keen, N. T., Yoshikawa, M. and Wang, M. C. (1983). Phytoalexin Elicitor Activity of Carbohydrates from *Phytophthora megasperma* f.sp. glycinea and Other Sources. Plant Physiol. 71: 466-471.
- Khabiri, F., Hagens, R., Smuda, C., Soltau, A., Schreiner, V., Wenck, H., Wittern, K.-P., Duchstein, H.-J. and Mei, W. (2014). Non-invasive monitoring of oxidative skin stress by ultraweak photon emission (UPE)-measurement. I: Mechanisms of UPE of biological materials. Skin Res. Technol. 14: 103-111.
- Kobayashi, M., Sasaki, K., Enomoto, M. and Ehara, Y. (2007). Highly sensitive determination of transient generation of biophotons during hypersensitive response to cucumber mosaic virus in cowpea. J. Exp. Bot. 58: 465–472.
- Kobayashi, M., Takeda, M., Ito, K., Kato, H. and Inaba, H. (1999). Two-dimensional photon couting imaging and spatiotemporal characterization of ultraweak photon emission ftrom a rat's brain. J. Neurosci. Methods. 93:163-168.
- Kohler, A., Schwindling, S. and Conrath, U. (2002). Benzothiadiazole-induced priming for potentiated responses to pathogen infection, wounding, and infiltration of water into leaves requires the NPR1/NIM1 gene in Arabidopsis. Plant Physiol. 128:1046-1056.
- Koike, N., Hyakumachi, M., Kageyama, K., Tsuyumu, S. and Doke, N. (2001). Induction of systemic resistance in cucumber against several diseases by plant growth-promoting fungi: lignification and superoxide generation. Eur. J. Plant Pathol. 107:523-533.
- Komatsu, S., Makino, T. and Yasue, H. (2013). Proteomic and Biochemical Analyses of the Cotyledon and Root of Flooding-Stressed Soybean Plants. PLoS ONE 8: e65301.
- Krzymowska, M., Konopka-Postupolska, D., Sobczak, M., Macioszek, V., Ellis, B. E. and Hennig, J. (2007). Infection of tobacco with different *Pseudomonas syringae* pathovars leads to distinct morphotypes of programmed cell death. Plant J. 50: 253-264.
- Kuchitsu, K., Kikuyama, M. and Shibuya, N. (1993). N-acetylchitooligosaccharides, biotic

elicitor for phytoalexin production, induce transient membrane depolarization in suspension-cultured rice cells. Protoplasma. 174:79-81.

- Kunz, B. A., Dando, P. K., Grice, D. M., Mohr, G. P. G., Schenk, P. M. and Cahill, M. (2008).
  UV-induced DNA damage promotes resistance to the biotrophic pathogen *Hyaloperonospora parasitica* in Arabidopsis. Plant Physiol. 148: 1021-1031.
- Lawton, K.A., Friedrich, L., Hunt, M., Weymann, K., Delaney, T., Kessman, H., Staub, T. and Ryals, J. (1996). Benzothiadiazole induces disease resistance in Arabidopsis by activation of the systemic acquired resistance signal transduction pathway. Plant J. 10: 71–82.
- Levine, A., Tenhaken, R., Dixon, R and Lamb, C. (1994). H<sub>2</sub>O<sub>2</sub> from the oxidative burst orchestrates the plant hypersensitive disease resistance response. Cell. 79: 583-593.
- Liu, J. R. and Cantlife, D. J. (1984). Somatic embryogenesis and plant regeneration in tissue culture of sweet potato (*Ipomoea batatas* Poir.). Plant Cell Rep. 3: 112-115.
- Luna, E., Bruce, T. J. A., Roberts, M. R., Flors, V. and Ton, J. (2012). Next-generation systemic acquired resistance. Plant Physiol. 158:844–853.
- Luna, E., Pastor, V., Robert, J., Flors, V., Mauch-Mani, B. and Ton, J. (2010). Callose Deposition: A Multifaceted Plant Defense Response. MPMI 24: 183-193.
- Mauch, F., Mauch-Mani, B. and Boller, T. (1988). Antifungal Hydrolases in Pea Tissue II.
  Inhibition of fungal growth by combinations of chitinase and β-1,3glucanase. Plant
  Physiol. 88: 936-942.
- Midoh, N. and Iwata, M. (1996). Cloning and characterization of a probenazole inducible gene for intracellular pathogenesis-related protein in rice. Plant Cell Physiol. 37: 9-18.
- Miki, D. and Shimamoto, K. (2004). Simple RNAi vectors for stable and transient suppression of gene function in rice. Plant Cell Physiol. 45: 490-495.
- Miki, D., Itoh, R. and Shimamoto, K. (2005). RNA silencing of single and multiple members

in a gene family of rice. Plant Physiol. 138: 1903-1913.

- Minami, E., Kuchitsu, K., He, D.Y., Kouchi, H., Midoh, N., Ohtsuki, Y. and Shibuya N. (1996). Two novel genes rapidly and transiently activated in suspension-cultured rice cells by treatment with N-acetylchitoheptaose, a biotic elicitor for phytoalexin production. Plant Cell physiol. 37:563-567.
- Minami, E., Ozeki, Y., Matsuoka, M., Koizuka, N. and Tanaka, Y. (1989). Structure and some characterization of the gene for phenylalanine ammonia lyase from rice plants. Eur.J. Biochem. 185: 19-25.
- Mueller-Uri, F., Parthier, B. and Nover, L. (1988). Jasmonate-induced alteration of gene expression in barley leaf segments analyzed by in vivo and in vitro protein synthesis. Planta. 176: 241-247.
- Mur, L. A. J., Kenton, P., Atzorn, R., Miersch, O. and Oasternack, C. (2006). The outcomes of concentration-specific interactions between salicylate and jasmonate signaling include synergy, antagonism, and oxidative stress leading to cell death. Plant Physiol. 140: 249-262.
- Musumeci, F., Triglia, A.and Grasso, F. (1992). Experimental evidence on ultraweak photon emissio from normal and tumour human tissues (Chapt.12). Recent advances in biophoton research and its applications (Edited by Popp. F. A., Li, K.H. and Gu, Q.) World Scientific, Singapore. 307-324.
- Nagoshi, T., Watanabe, N., Suzuki, S., Usa, M., Watanabe, H., Ichimura, T. and Inaba, H. (1992). Spectral analyses of low level chemiluminescence of a short lifetime using a highly sensitive polychromatic spectrometer incorporating a two dimensional photon-counting type detector. Photochem. Photobiol. 56: 89-94.
- 仲下英雄・安田美智子 (2004). 全身獲得病害抵抗性と植物ホルモン. 植調 39: 203-213.

- Nakane, E., Kawakita, K., Doke, N. and Yoshioka, H. (2003). Elicitation of primary and secondary metabolism during defense in the potato. J. Gen. Plant Pathol. 69: 378–384.
- Nakayama, A., Fukushima, S., Goto, S., Matsushita, A., Shimono, M., Sugano, S., Jiang, C.-J., Akagi, A., Yamazaki, M., Inoue, H. and Takatsuji, H. (2013). Genome-wide identification of WRKY45-regulated genes that mediate benzothiadiazole-induced defense responses in rice. BMC Plant Biol 13: 150–161.

難波成任 (2008). 植物医科学(上), 養賢堂, 東京 215-319.

- Narusaka, M., Abe, H., Kobayashi, M., Kubo, Y., Kawai, K., Izawa, N. and Narusaka, Y. (2006) A model system to screen for candidate plant activators using an immuneinduction system in Arabidopsis. Plant Biotechnol 23: 321–327.
- 鳴坂義弘・平塚和之・安部洋 (2008). プラントアクティベーターの創薬に向けたハ イスループットスクリーニングシステムの開発. 植物防疫 61:537-541.
- Niki, T., Mitsuhara, I., Seo, S., Ohtsubo, N. and Yuko Ohashi, Y. (1998). Antagonistic Effect of Salicylic Acid and jasmonic Acid on the Expression of Pathogenesis-related (PR) protein genes in wounded mature tobacco leaves. Plant Cell Physiol. 39: 500-507.
- Nishizawa, Y., Kishimoto, N., Saito, A. and Hibi, T. (1993). Sequence variation, differential expression and chromosomal location of rice chitinase genes. Mol. Gen. Genet. 241: 1-10.
- Nojiri, H., Sugimori, M., Yamane, H., Nishimura, Y., Yamada, A., Shibuya, N., Kodama, O., Murofushi, N. and Omori, T. (1996). Involvement of jasmonic acid in elicitor-induced phytoalexin production in suspension-cultured rice cells. Plant Physiol. 110: 387-392.
- Noutoshi, Y., Okazaki, M., Kida, T., Nishina, Y., Morishita, Y., Ogawa, T., Suzuki, H., Shibata, D., Jikumaru, Y., Hanada, A., Kamiya, Y. and Shirasu, K. (2012). Novel plant immune-priming compounds Identified via high-throughput chemical screening target salicylic acid glucosyltransferases in Arabidopsis. Plant Cell 24: 3795–3804.

大矢智幸・倉重秀昭・甲斐昌一 (1998). 環境ストレスと植物の生態成長-光学的手法 によるイオンストレスの早期検出. 九州大学工学集報 71:15-21.

- 大矢智幸・吉田敏・川畑龍三・岡部弘高・甲斐昌一 (2000). 環境ストレスと植物の 生態成長-光学的手法による乾燥傷害の早期検出-.九州大学工学集報 73: 25-31.
- Okada, M., Matsumura, M., Ito, Y. and Shibuya, N. (2002). High-affinity binding proteins for *N*-acetylchitooligosaccharide elicitor in the plasma membranes from wheat, barley and carrot cells: conserved presence and correlation with the responsiveness to the elicitor. Plant Cell Physiol. 43: 505–512.
- Ono, S., Tanaka, T., Watakabe, Y., Hiratsuka, K. (2004) Transient assay system for the analysis of PR-1a gene promoter in tobacco BY-2 cells. Biosci Biotechnol Biochem 68: 803–807.
- Ono, S., Kusama, M., Ogura, R., Hiratsuka, K. (2011) Evaluation of the use of the tobacco PR-1a promoter to monitor defense gene expression by the luciferase bioluminescence reporter system. Biosci Biotechnol Biochem 75: 1796-1800.
- Ortmann, T., Sumowski, G., Bauknecht, H. and Moerschbacher, B. M. (2004). Establishment of a reliable protocol for the quantification of an oxidative burst in suspension-cultured wheat cells upon elicitation. Physiol. Mol. Plant Pathol. 64: 227-232.
- Pieterse, C. M. J., van Wees, S. C. M., Hoffland, E., van Pelt, J. A. and van Loon, L. C. (1996). Systemic resistance in Arabidopsis induced by biocontrol bacteria is independent of salicylic acid accumulation and pathogenesis-related gene expression. Plant Cell. 8: 1225-1237.
- Pieterse, C. M. J., van Wees, S. C. M., van Pelt, J. A., Knoester, M., Laan, R., Gerrits, H., Weisbeek, P. J. and van Loon L. C. (1998). A Novel Signaling Pathway Controlling Induced Systemic Resistance in Arabidopsis. Plant Cell. 10: 1571-1580.

Popp, F-A. (1988). Biophoton emission. Experientia. 44:543-630.

- Popp, F-A., Li, K. H. and Gu, Q. editors (1992). Recent advances in biophoton research and its applications. World Science. Singapore.
- Pospíšil, P, Prasad, A. and Rác, M. (2014). Role of reactive oxygen species in ultra-weak photon emission in biological systems. J. Photochem. Photobiol. B: Biol. 139: 11-23.
- Qiu, Y. and Yu, D. (2008). Over-expression of the stress-induced OsWRKY45 enhances disease resistance and drought tolerance in Arabidopsis. Environ. Exp. Bot. 65: 35-47.
- Rejeb, I. B., Pastor, V. and Mauch-Mani B. (2014). Plant responses to simultaneous biotic and abiotic Stress: molecular mechanisms. Plants (Basel) 3: 458-75.
- Repetto, M., Semprine, J. and Boveris, A. (2012). Lipid Peroxidation: Chemical Mechanism,
  Biological Implications and Analytical Determination. "Lipid Peroxidation". ISBN 978-953-51-0716-3, Chapter 1.
- Rohilla, R., Singh, U. S. and Singh, R. L. (2001). Mode of action of acibenzolar-S-methyl against sheath blight of rice, caused by *Rhizoctonia solani* Kühn. Pest Manage. Sci. 58:63-69.
- Roschger, P., Devaraj, B., Scott, R. Q. and Inaba. H. (1992). Induction of a transient enhancement of low level chemiluminescence in intact leaves by anaerobic treatment. Photochem. Photobiol. 56: 281-284.
- Ryals, J., Uknes, S. and Ward, E. (1994). Systemic acquired resistance. Plant Physiol. 104: 1109-1112.
- Salin, M. L. and Bridges, S. M. (1981). Chemiluminescence in wounded root tissue. Plant Physiol. 67:43-46.
- Savvides, A., Ali, S., Tester, M. and Fotopoulos, V. (2016). Chemical priming of plants against multiple abiotic stresses: mission possible? Trends Plant Sci. 21: 329-338.
- Scala, A., Pazzagli, L., Comparini, C., Santini, A., Tegli, S. and Cappugi, G. (2004). Ceratoplatanin, an early-produced protein by *Ceratocystis fimbriata* f.sp. *Platani*, elicits

phytoalexin synthesis in host and non-host plants. J. Plant Pathol. 86: 27-33.

- Schultheis, J. R., Cantlife, D. J. and Chee, R. P. (1990). Optimizing sweet potato [*Ipomoea batatas* (L.) Lam] root and plantlet formation by selection of proper embryo developmental stage and size, and gel type for fluidized sowing. 9: 356-359.
- Schweizer, P., Buchala, A. and Me´traux, J. P. (1997a). Gene expression patterns and levels of jasmonic acid in rice treated with the resistance inducer 2,6-dichloroisonicotinic acid. Plant Physiol. 115: 61-70.
- Schweizer, P., Buchala, A., Silverman, P., Seakar, M., Raskin, I. and Métraux, J. P. (1997b).
  Jasmonate-inducible genes are activated in rice by pathogen attack without a concomitant increase in endogenous jasmonic acid levels. Plant Physiol. 114: 79-88.
- Schwessinger, B. and Ronald, P. C. (2012). Plant innate immunity: perception of conserved microbial signatures. Annu. Rev. Plant Biol. 63: 451–82.
- Sekizawa, Y. (1980). Recent progress in studies on non-fungicidal controlling agent, probenazole, with reference to the induced resistance mechanism of rice plants. Rev. Plant Prot. Res. 13: 114-121.
- Shah, J., Chaturvedi, R., Chowdhury, Z., Venables, B. and Petros, R. A. (2014). Signaling by small metabolites in systemic acquired resistance. Plant J. 79: 645-658.
- Shibuya, N. and Minami, E. (2001). Oligosaccharide signaling for defense responses in plant. Physiol. Mol. Plant Pathol. 59: 223-233.
- Shimizu,T., Nakano, T., Takamizawa, D., Desaki, Y., Ishii-Minami, N., Nishizawa, Y., Minami, E., Okada, K., Yamane, H., Kaku, H., Shibuya, N. (2010). Two LysM receptor molecules, CEBiP and OsCERK1, cooperatively regulate chitin elicitor signaling in rice. Plant J. 64: 201-214.
- Shimono, M., Sugano, S., Nakayama, A., Jiang, C.J., Ono, K., Toki, S. and Takatsuji, H. (2007). Rice WRKY45 plays a crucial role in benzothiadiazole-inducible blast resistance.

Plant Cell 19: 2064-2076.

- Shinya, T., Motoyama, N., Ikeda, A., Wada, M., Kamiya, K., Hayafune, M., Kaku, H. and Shibuya, N. (2012). Functional characterization of CEBiP and CERK1 Homologs in Arabidopsis and rice reveals the presence of different chitin Receptor systems in plants. Plant Cell Physiol. 53: 1696-1706.
- Shinya, T., Nagasawa, T., Kaku, H. and Shibuya, N. (2015). Chitin-mediated plant-fungal interactions: catching, hiding and handshaking. Curr. Opin. Plant Biol. 26: 64-71.
- Singh, P., Yekondi, S., Chen, P-W., Tsai, C-H., Yu, C-W., Wu, K. and Zimmerli, L. (2014). Environmental History Modulates Arabidopsis Pattern-Triggered Immunity in a HISTONE ACETYLTRANSFERASE1–Dependent Manner. Plant Cell 26: 2676-2688.
- Slaughter, A., Daniel, X., Flors, V., Luna, E., Hohn, B. and Mauch-Mani, B. (2012). Descendants of primed Arabidopsis plants exhibit resistance to biotic stress. Plant Physiol. 158: 835–843.
- Slawinski, J., Grabikowski, E. and Ciesla, L. (1981). Spectral distribution of the ultraweak luminescence from germinating plants. J. Luminescence. 24/25: 791-794.
- Slawinski, J. (1988). Luminescence research and its relation to ultraweak cell radiation. Experientia. 44: 559-571.
- Stumm, D. and Gessler, C. (1986). Role of papillae in the induced systemic resistance of cucumbers against *Colletotrichum lagenarium*. Physiol. Mol. Plant Pathol. 29: 405-410.
- Sugano, S., Jiang, C.J., Miyazawa, S., Masumoto, C., Yazawa, K., Hayashi, N., Shimono, S., Nakayama, A., Miyao, M. and Takatsuji, H. (2010). Role of OsNPR1 in rice defense program as revealed by genomewide expression analysis. Plant Mol. Biol. 74: 549-562.
- Suzuki, S., Usa, M., Nagoshi, T., Kobayashi, M., Watanabe, N., Watanabe, H. and Inaba, H. (1991). Two-dimensional imaging and counting of ultraweak light emission patterns from injured plant seedlings. J. Photochem. Photobiol. B: Biol. 9: 211-217.

- Takatsuji, H., Jiang, C.J. and Sugano, S. (2010) Salicylic Acid Signaling Pathway in Rice and the Potential Applications of Its Regulators. JARQ 44: 217-223.
- Testerink, C. and Munnik, T. (2006) Phosphatidic acid: a multifunctional stress lipid in plants. Trends Plant Sci 10: 368–375.
- Thieron, M., R. Pontzen, R. and Kurahashi, Y., (1998). Carpropamid: a rice fungicide with two modes of action. Pflanzenschutz-Nachrichten Bayer 51: 257-278.
- Thulke, O. and Conrath, U. (1998). Salicylic acid has a dual role in the activation of defense-related genes in parsley. Plant J. 14: 35–42.
- Tsuda, K., Sato, M., Stoddard, T., Glazebrook, J. and Katagiri, F. (2009). Network Properties of Robust Immunity in Plants. PLoS Genet. 5: e1000772.
- Tsuda, K. and Katagiri, A. (2010). Comparison of signaling mechanisms engaged in patterntriggered and effector-triggered immunity. Curr. Opin. Plant Biol. 13: 459-465.
- Uchiyama, M., Abe, H., Sato, R., Shimura, M. and Watanabe, T. (1973). Fate of 3-allyloxy-1,2-benzisothiazole-1,1-dioxide (Oryzemate®) in rice plants. Agric. Biol. Chem. 37: 737-745.
- 瓜谷郁三 (2001). サツマイモの病傷害に伴う呼吸増加. ストレスの植物生化学 (瓜谷郁三編), 学会出版センター, 東京 9-25.
- Van Aken, O. and Van Breusegem, F. (2015). Licensed to kill, mitochondria, chloroplast and cell death. Trends Plant Sci. 20: 754-766.
- Van Hulten, M., Pelser, M., van Loon, L.C., Pieterse, C. M. J. and Ton, T. (2006). Costs and benefits of priming for defense in Arabidopsis. PNAS 103: 5602–5607.
- Vleeshouwers, V. G. A. A. and Oliver, R. P. (2014). Effectors as tools in disease resistance breeding against biotrophic, hemibiotrophic, and necrotrophic plant pathogens. MPMI 27: 196–206.

渡辺和彦・前川和正・神頭武嗣・三好昭宏 (2000). 無機元素による全身獲得抵抗性

誘導. 『農業技術大系』土壤施肥編 第2巻 作物栄養 V 6:8-14.

- 渡辺治夫・稲場文男 (1991) a. 生物フォトンの生化学-代謝,発光機構,進化-①.O plus E. 143: 112-123.
- 渡辺治夫・稲場文男 (1991)b. 生物フォトンの生化学-代謝,発光機構,進化-②.O plus E. 143: 139-153.
- Yamada, A., Shibuya, N., Kodama, O. and Akatsuka, T. (1993). Induction of phytoalexin formation in suspension-cultured rice cells by N-acetylchitooligosaccharides. Biosci. Biotechnol. Biochem. 57: 405-409.
- Yamaguchi, T., Minami, E. and Shibuya, N. (2003). Activation of phospholipases by *N*-acetylchitooligosaccharide elicitor in suspension-cultured rice cells mediates reactive oxygen generation. Physiol. Plantarum. 118:361-370.
- Yamaguchi, T., Minami, E., Ueki, J. and Shibuya, N. (2005). Elicitor-induced activation of phospholipases plays an important role for the induction of defense responses in suspension-cultured rice cells. Plant Cell Physiol. 46: 579-587.
- Yang, Y., Qi, M. and Mei, C. (2004). Endogenous salicylic acid protects rice plants from oxidative damage caused by aging as well as biotic and abiotic stress. Plant J. 40: 909– 919.
- Yasuda, M., Nakashita, H. and Yoshida, S. (2004). Tiadinil, a Novel class of activator of systemic acquired resistance, induces defense gene expression and disease resistance in Tobacco. J. Pest. Sci. 29: 46–49.
- Yasuda, M., Kusajima, M., Nakajima, M., Akutsu, K., Kudo, T., Yoshida, S. and Nakashita,
  H. (2006). Thiadiazole carboxylic acid moiety of tiadinil, SV-03, induces systemic acquired resistance in tobacco without salicylic acid accumulation. J. Pest Sci. 31: 329–334.
- Yasuda, M., Ishikawa, A., Jikumaru, Y., Seki, M., Umezawa, T., Asami, T., Maruyama-

Nakashita, A., Kudo, T., Shinozaki, K., Yoshida, S. and Nakashita, H. (2008) Antagonistic Interaction between Systemic Acquired Resistance and the Abscisic Acid-Mediated Abiotic Stress Response in Arabidopsis. Plant Cell 20: 1678-1692.

- Yoshinaga, N., Kato, K., Kageyama, C., Fujisaki, K., Nishida, R. and Mori, N. (2006). Ultraweak photon emission from herbivory-injured maize plants. Naturwissenschaften 93: 38-41.
- Yu, H. and Li, L. (2014). Phylogeny and molecular dating of the cerato-platanin-encoding genes. Gen. Mol. Biol. 37: 423-427.
- Zhang, Q. and Xiao, S. (2015). Lipids in salicylic acid-mediated defense in plants: focusing on the roles of phosphatidic acid and phosphatidylinositol 4-phosphate. Front. Plant Sci. 6: 387.
- Zhao, J. (2015) Phospholipase D and phosphatidic acid in plant defense response: from protein-protein and lipid-protein interactions to hormone signaling. J. Exp. Bot. 66: 1721-1736.
- Zimmerli, L., Gabor Jakab, G., Metraux, J.-P. and Mauch-Mani, B. (2000). Potentiation of pathogen-specific defense mechanisms in Arabidopsis by β-aminobutyric acid. PNAS 97: 12920-12925.